

聖女と直死

ふあにむ一

【注意事項】

このPDFファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にPDF化したものです。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でPDFファイル及び作品を引用の範囲を超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

【あらすじ】

万物の死を視る少年と全てを癒す少女。

時代はオラリオ暗黒期。

聖女と誰かを絡ませたいと思って書いたものです。駄文、設定無視、なんでもありという方はどうぞ。完全に自己満足です。聖女要素がない回もまああります。

目次

プロローグ	1
翼竜	5
直死開眼	18
デアアンケヒトファミリア	24
2人のステータス	32
冒険者登録	38
初めてのダンジョン	50
探索後	60
鍛冶神との取引	65
ロキファミリアとの遭遇	73
フィン・ディムナ	85
幼女襲来	96

神会	108
神々との邂逅	120
小竜	135
18階層	145
豊穡の女主人	155
抗争前夜	167
魔導書	183
顔無し	194
女神の戦車	211

プロローグ

あつという間だった。

イヤほんとに。

私こと島津識は、駅のホームで訳もわからず後ろから突き飛ばされたと思ったたら気づけば此処にいた。最後に見たのは突っ込んできた電車のライト。

だからあれほどホームにホームドアを付けろと言ったんだこのバカタレ!!?と思いつながら、先月父親とそのことについて議論したことを思い出す。どうか俺の死が今後に役立つ様に頼んだぞ親父…。

「で、俺どうなるんですかね?」

俺死んだと思っただが。まあ、それを知覚してる時点で異常ではあるか。とりあえず目の前で座っている綺麗な女に聞いてみる。

イヤだって明らかに何か知ってるでしょこの人。いや、俺の予想だと人じゃないけど。

「先程の事故で貴方はお亡くなりになりました。短い生ではありましたが貴方の様な人材が命を落とすことを残念に思います。」

やっぱり神か何かか。

「いや、社交辞令とかはいいんで、ほんと。俺をどうするつもりですかね？」

別の世界に行つて何かしてこいみたいなのは勘弁してもらいたい。まあこのまま無に還れ、とかよりはマジだけどね。でも俺つてば唯の一般人な訳で？魔王倒せみたいなこと言われてもマジ無理なんでほんとそこんとこよろしくお願いしたいんですけど……

「貴方がいた地球ではない世界に行つてもらいます。オラリオという迷宮都市があるのでそこを目指すのが良いでしょう。ですがそんなに身構える必要はありません。地球の人間がそこに行くこと自体が重要ですので、そこで貴方が何をしようか問題ありません。」

それと、転生といった形になるので一時的に記憶に関しては消させてもらいます。」

なるほど、不足している魔力か何かを補充するのが目的なのだろうか？よくわからないうが、別にその辺りは興味も無いので掘り下げる気はない。記憶についても仕方ないだろう。といつても何もなしに行けと言われてもハードルが高い。せめて2回目くらいは老衰で死にたいものだ。

「そうですか……。でしたら何か要望があればスキルとして発現させましょう。」

それはありがたいな。

まあとはいえ、別に俺TUEEみたいなのをしたい訳じゃない。迷宮都市というからにはダンジョンとかあるんだらうか？

詳しく聞くと、その都市には所謂ファンタジー系の亜人やエルフの他に天上の神達が暮らしてゐるらしい。

え、何それ。急に帰りたくなってきた。

どうやら神の恩恵とやらを与えることで人は力を得て冒険者になるんだそうだ。人にステータスを刻むってことか。ダンジョンのモンスターが持つ魔石やアイテムを換金して生計を立てている人が多いんだとか。

当面は金稼ぎにダンジョンかな？

ーどうしようか。

戦闘なんて以ての他喧嘩もロクにした事が無い。俺TUEEするつもりはないと言ったが、それなりに何か貰っておかないとホント死ぬ。

「じゃあとりあえず、恐怖と痛みに対する強い耐性が欲しいです。」

だつて血の出るような怪我なんて慣れてる訳無いし、痛みでショック死するなんてことになりかねない。モンスターとか怖いし正直まともに見たくない。

ーでもどうしたものか。一度の攻撃で敵を殺せるような何かが欲しいとは思うが、あんまり目立ちたくないし、汎用性のあるものにしたいのが本音だ。

あ、そうだ。

「じゃあ……。」

死ぬ前に最後に読んだ本に出てきた能力を口にする。

「それでは、貴方をこれから下界に送ります。良い人生になるよう、お祈りしております。」

そう言うと同時に、俺を眩い光が包む。……

翼竜

説明不足っていう言葉があるけど、それって使う時点で既に手遅れなことが多いと思う。なぜかって？そんなの、終わってみないと説明が正しかったか判断できないからだ。

つまり何が言いたいかというと…

「いきなりかよ…」

急に倒れた俺を見て周りの大人たちが心配そうにこちらを覗き込むが、仕方ないと思つて欲しい。5歳にして前世の記憶が戻ったとか冗談にも程がある。というか…

「記憶をなくすとは言つてたけど…」

いや、まさか気づいた時には5歳児だとは…。感覚的には5歳までの記憶に上乘せしたような感じなので、幸い此処が何処だか分からないなんてことはない。とはいえ、もとの俺の記憶の最後はあの神と話してた所だ。いきなり大量の情報が一気に入ってきたために脳がオーバーヒートを起こしたようだ。容姿は黒髪黒目といかにも日本人といった感じで、もとの自分と大差ない。(まあ日本なんてあるわけないので極東と呼ぶことにするが)

周りを見ると俺のここでの育て親の爺さん（俺は拾われたことになっている）と1組の夫婦が話しかけてきた。適当に話を合わせておくが、記憶が戻った以上、今後対応等で不審に思われるのは避けられないだろう。まだ二十歳前の学生だったと言っても精神年齢の差が大きい。此処はオラリオから離れた村のようだし、早めに出て行った方が良いかもしれない。

思考を巡らせていると視界にいたずら書きの様な線や点が見え始めた。

ーつと、まづいまずい。

こんな感じに見えるのか。今後は気をつけて行動しなければ。制御出来るように練習しないとイケない。

とりあえず今のうちに出来ることはしておいた方がいいだろう。言葉は通じるようだが、文字は早く覚えなければ。

ーところで、その影からこちらを見ているのは誰だろうか？
声をかけると驚いたように飛び出してくる。

柱の影から出てきたのは、俺と同じくらいの身長をした少女だった。銀色の髪を腰まで伸ばし、アメジスト色の瞳を持つ、整然とした印象を受ける。

どうやら先程一緒にいた夫妻の娘らしい。先日この村に移住してきて、うちの隣に家

を建てたそうさ。是非仲良くしてやってくれと頼まれた。

同年代の友達ができるのは嬉しいことだ。

こちらの表情を窺う少女に声をかける。

「君、名前は？」

一瞬身体がビクついたものの、ゆっくり透き通った声で、

「…アミッド・テアサナーレ、です…。」

「そうか。俺は…」

奇しくも前世と同じになった名前を口にする。

「シキだ、よろしく。」

記憶が戻ってから4年が経った。

今では9歳になり、普段はアミッドの家の倉庫にある本を読ませてもらいながら、薬の調合の手伝いをしている。

今日は朝早くから農業の手伝いをしていたのでかなり眠い。さつきから7秒に1回レベルで欠伸をしている気がする。川岸で横になりながら、自分の今後について考えて

みる。

「どうかしましたか、シキ？」

俺の様子を不審に思ったのか、隣に座っていた少女が声をかけてくる。

「ごめん、何でもないよアミツド。」

「大丈夫ですか？先程も倒れたと聞きましたけど。」

「心配ない、ありがとう。」

彼女の両親は薬師だ。育った環境で人は変わると言うが、ここまで大人びた少女は少ないだろう。ちなみに俺の親代わりの爺さんは農家を営んでいる。極東の出で、名前が和風なものもそれが理由だ。俺もたまに手伝わされているが、筋力がつくと思えばそこまで苦でもない。生きていく中で食料を作ることは重要だ。

この世界に来て良かったと思うことの1つとしては、やること全てが生活に繋がるということだ。以前いた世界では、『これ本当に将来生活に必要なのか？』といったものばかり学ばされてきたが、此処ではやること全てが自分や誰かの為になることが分かる。それだけでもやりがいがあるってもんだ。

「また何か考え事ですか？」

「いや、何でもないよ。それより、お父さんの体調はどうだ？」

確か彼女の父親は以前から体調が優れないと話していた筈だ。

その言葉に一瞬顔を曇らせるが、すぐにいつもの整然とした態度で、

「大丈夫です。最近は容態が安定して…」

「大変だ！誰か来てくれ！テアサナーレの親父が突然苦しみだして…」

「!!?」

村の大人達の声を聞き、咄嗟に走りだす。アミツドの父親にはいつも世話になってい
る。こんな子供の身で何が出来るかわからんが、放っておくことは出来ない。隣を走る
アミツドを安心させながら、彼女の家に向かう。

扉を開けて目に入ったのは、横たわり胸を抱えて苦しむ彼女の父親だった。呼吸が辛
く見えることから、恐らく肺に関係する病気だろう。アミツドが血相変えて父親をどう
にかして治そうとするが、まだ所詮は子供。病人の治療など出来る筈も無い。ましてや
治療薬などこの村にある筈も無い。

周りが慌ただしい中、俺は妙に自分が落ち着いていると感じていた。無理も無いだろ
う。この光景を見るのは2度目だ。

前世の俺の母親も肺の病気で死んだのだ。

早期発見であれば、十分に治療が可能な病気の筈だった。だが俺達家族は、あの人の
様子がおかしいことに気づかなかった。結果ウイルスは侵攻し、呆気なく世を去った。

まだ、あの時に比べて症状は軽い。今ならばまだ間に合う可能性がある。しかし、だ

からといって治療する場所も技術も俺は持っていない。半端な知識では状況を悪化させることしか出来ない。

視界の端で、父親の手を握り続けるアミツドの姿を捉えた。いつも静かな顔をした彼女の顔には既に余裕は無く、迫りくる父の死に怯える小さな少女の背中があった。

「何か俺に出来ることは無いのか」

そう思いながらも何も出来ずに彼女の父親を見ていると、視界に「線」が現れ始める。
「！これなら」

よく見ると男の胸の辺りで、別のものを示すように蠢く点があった。懐からナイフを取り出す。上手くいく保証は無い。でも出来なければ、彼女の父親は死ぬ。覚悟を決め、足を前に出して彼女の隣に立つ。

「シキ？ーっ ！！？」

突然横に來た俺の気配に顔を上げ、その手に持ったナイフを見て驚愕する。

「一体何を…っ ！！？」

アミツドの疑問に答えず、病人の胸にナイフを突き立てる。突然の奇行に目を見張り、今すぐやめさせようとするが、先程まで苦しんでいた父の表情が少しずつ穏やかになっていくのを見て、再び驚愕する。ナイフを抜き、何かを払うように振るうと、やがて静かな寝息を立て始める。

「血が出ていない…今の一体…?」

内心上手くいったことにホツとしながら、立ち尽くすアミッドに顔を向ける。彼女の顔には、父親が助かったという安堵、友の行動に関する困惑など、多くの表情が見え隠れしている。周囲の大人達も、以前までのような小さな子供を見る目ではなかった。

―潮時か…。

彼女の横を通り抜け、扉を開けて外に出る。人前でこの能力を使うことは避けてきたが、今回のことで俺が異質であることは周囲にばれてしまった。

家から少し離れた川岸に座り、遠くを眺める。山の隙間から都市の高い塔が見える。水面に映る自分の瞳が、蒼眼からもとの黒い眼へと戻る。

オラリオに向かうなら早いうちがいいだろう。一応家に手紙を残して行こう。荷物は…ナイフと小銭だけでいいか。食料は調達すればいい。

―いやなに、もともと俺はあそこに行くつもりだったんだ。何も問題は無い。この目があるなら、モンスターも大して脅威じゃない。

アミッドには悪い事をした。目の前で幼馴染みが父親の胸を突き刺したりしたらシヨックを受けるだろう。大人びちゃいるが、まだまだ子供だ。時々危なっかしいところがある。出来ることなら横で面倒見てやりたいところだが、こうなつては難しいだろ

う。

いつか彼女が薬師になったら会いにこよう。それくらいなら許される筈だ。

とにかく、行くなら早いうちがいいだろう。恩恵をくれる神も探さなくてなくてはならない。ナイフは先程使った時に置いてきてしまっていたが、家に手紙は置いてきたし、金も少しならある。馬車は使えないが、気楽に歩いていくのも悪くない。

そう思つて歩き出そうとした時、

「待つてください、シキ。」

よく知つた声が聞こえた。よく耳に残る透き通るような音に無意識に振り返る。

「…何処へ行くのですか？」

急いで走つてきたのだろう。息を切らしながら問うてくる。手には先程彼女の父の胸に刺したナイフを持っていた。

「…別に何処でもいいだろう。俺は此処を出る。始めからそのつもりだったんだ。

…お前には悪い事したと思つてるよ。」

「…父が目を覚ましました。」

「…：…：そうか。」

「…：どうやって病気を治したのですか？」

「…：治してなんかいない。唯、病気になつた原因となるものを殺しただけさ。誇るよう

なことでもない。」

感情の昂りによって自分の眼が変化していき、視界に線と点が現れ始める。

「!? シキ、眼が…」

「俺の眼はね、ものの死が見えるんだ。」

万物には全て綻びがある。

生物にも、道具にも、時間にだってだ。

結果的にお前の父親救ったとしても、

俺がしたのは治療なんかじゃない。

唯の殺しだ。」

【直死の魔眼】

この世界に生まれて手にした能力。

ものの死が見えるなんて聞こえはいいけど、周囲の人や物の脆弱さが見えてしまうのも困ったものだ。応用が効くとは言っても、結局は殺すだけの力でしか無い。

「…それでも貴方は、命を救った。だから…ありがとう。私の父を救ってくれて。」

自己嫌悪に陥る中、アミッドのその言葉に救われた気がした。ああ、やはり彼女は誰よりも優しく、俺を癒してくれる。

「さあ、帰りましょう、シキ。」

先程の決意も虚しく、その手を取ろうとした時、

―地が揺れた。

肌を焦がす熱さと煙の匂いに目を開ける。

すぐ横にアミッドが倒れてるのを見て飛び起きる。急いで息があるのを確認して
ホツと一息つき、周囲を…

「―は？」

見回そうとして、自分達他に何も無いことに気づく。美しかった景観は何処にもな
く、生まれ育った村も無い。全てが火に吞まれ、生物の存在を許さないかの如く燃え広
がる。

「…おい、村の人達は何処だ？」

―何処かに避難している筈、避難していてくれ、頼む。

倒れたアミツドを背負い、火から逃げようと歩き出そうとしたところで、後方で爆発が起こる。

「なっ!?」

爆風で足元に飛んできたものが視界に入った途端、

「……、それは。」

呼吸が止まった。

見間違い？

いやそんな筈は無い。

だって、これは、つい数時間前に、

―俺が救った筈の人物の腕だったから。

「…お父、さん？」

背中越しに震えた声が聞こえる。

背中から重みが消え、その正体を確かめるように震える指で手を伸ばす。しかし触れることなく、寸前で止まる。

手首に巻かれていたのは、彼女が願掛けに巻いた薬草。病気が治るよう祈り、俺が作り方を教え作ったミサンガ。

腕の持ち主が誰か確信し、アメジスト色の瞳から涙が溢れる。

「何故、どうして世界はこんなにも唐突に残酷に牙を剥く？」

人の為になりたいと願った彼女をこんなにも苦しめる？

燃え盛る村から一体の翼を持った竜が現れたかと思うと、

彼らを逃がさないかのように、

道を塞ぐようにして降り立った。

怪物の咆哮に少女の泣、嗚咽はかき消され、
手首に巻いた薬草のミサンガが燃え尽きた。

直死開眼

この世界のモンスターには、大きく分けて2種類が存在する。

1つは、迷宮都市オラリオに存在するダンジョンで産み落とされるモンスター。奴らは体内にある魔石を核として生き、魔石を砕かれると消滅する。しかし、ダンジョンの中では無尽蔵に産まれるためキリがなく、階層が下がるごとに強くなる。

そしてもう一つは、生殖機能を持ち、地上で繁殖したモンスターである。ダンジョン内で産まれるものに比べればやや弱いものの、恩恵を持たない一般人では到底対処出来るものではない。奴らは本能のままに人間を襲い、蹂躪する。各地でその姿は確認されているが、正確な分布は分かっておらず、今でも被害が相次いでいる。

その中でも特に被害が大きいモンスターが、

「ワイヴァーン……」

level3相当。冒険者のうちほんの一握りの上級冒険者にしか討伐出来ない、一般人にとって死の象徴。何より人には無い翼を持ち、上空からの火炎攻撃で人々を圧倒する。

敵う筈がない。

―あいつが…

勝てる相手ではない。

―村の皆を…

ここは逃げなければ、

―彼女の父を…

地に落ちたナイフを拾い上げる。

「…殺す…！」

眼球が熱い。

視界に死の線が現れる。

怪物の中心を示す死の点に狙いを定めて走り出す。

「待って…！」

静止する声が聞こえるが無視する。

恐怖は無い。奴には死がある。殺せる存在であることがわかる。死があるのなら、殺してみせる！

脆弱な武器を持ち、自身に向かって駆けてくる人間を目にして、翼竜は笑みを浮かべる。遅い。敵う筈のない相手に向かう愚かな行為に内心で嘲笑する。

血に濡れた牙を鳴らしながら少年が近づくの待つ。

恐れることなど何一つない。近づけば最後、あの少年は無惨な姿へと変わり果てる。少年と翼竜の距離が近づく。

翼竜が前脚を突き出し、爪で貫かんとする。

これから起こる光景を予期し、少女が微かな悲鳴を上げる。

勝利を確信し、少年に顔を向けると、

少年の蒼眼と目が合った。

少年のものとは思えない程の殺意を真正面に受け動きが止まる。全身が強張り、目の前のものに対する恐怖を覚える。

好機と見たか、もとより止まる気がないのか、少年はナイフを突き刺さんと翼竜に接近する。

今まで蹂躪するだけだった存在である人間からの強烈な殺気を受け、思わず回避行動をとる。少年を敵と認めると、後方へと飛びながら、村の住人を焼き殺した火を放つ。

その炎は少年のみならず、後方に見える少女をも焼き尽くすはずだった。

少年がナイフを振るうと、炎に一本の線が刻まれると同時に霧散する。

予想外の事態にまたもや動きが止まる。

無防備な身体に向かつて、少年が飛び込んでくる。身体に傷を負いながらも両眼だけは見開き、この身を滅ぼさんとかかってくる。

所詮は脆弱なナイフ、通常であれば無視しても構わない程度の攻撃。しかし、絶対に殺すという意思を持ったその攻撃にまたもや恐怖する。

鋼鉄の翼を使い、その攻撃を防ごうとする。

否、防ごうとした。

通常であればナイフが砕け、こちらに傷などつく筈もない。

しかし、振るわれたナイフは片翼を見事なまでの切断面を残して斬り飛ばす。

片翼を失ったことで大きくバランスを崩す。

間髪入れずにもう一度振るわれるナイフを目にし、咄嗟にもう片方の翼を動かし爪突き出す。その攻撃に少年の左腕が宙を舞う。

少年の後ろで小さな悲鳴が上がる。

勝機を見出し、不適な表情を浮かべる翼竜だが、敵の様子に不信感を抱く。痛みを歪める様子は無く、その眼は開かれたまま、手を止めることなくナイフを振るう。

対応が遅れ、残った翼も根元から斬り飛ばされる。両翼を失い、最後の武器である牙を使って少年の命を奪い取ろうとするが、牙を的確に切り落とされ不発に終わる。

「死ぬ。」

三度ナイフが迫ってくるのを感じ、迫り来る死の前に翼竜は思う。

―今度も生まれ変わったなら。

―蒼眼の獣には近づかないようにしよう。

「二度とその面見せるな。」

その思考を最後に、翼竜の意識は途絶えた。

首に刺されたナイフを抜くと、翼竜は灰になることなくそのまま倒れる。

激闘の末、身体の疲れに膝を着く。

地についた手の甲に一つ二つと滴が落ち、やがて全身を濡らす程の雨が降り始める。

立ち上がり、少女のもとへ向かおうとして左腕がないことを思い出す。痛みは感じないが、血が絶え間なく流れ続け、意識が朦朧とする。周囲の炎が弱まる中、落ちている自身のポロポロになった左腕を拾い、少女のもとへと歩き始める。

「…無事か？アミッド。」

「…っ？ シキっ！」

その声に我に還ると駆け寄り、自身の服を裂いて少年の左腕の切断部に巻きつける。止血を終えると、手に持った左腕を見て顔を歪めて俯き、頬に滴が流れる。

父と幼馴染みの2人の腕を見て、多くの失ったものたちを思い浮かべる。

「…シキ、お願いです…二度とこんな無茶をしないでください…。私を残していなくならないで…。」

雨音で消えてしまいそうな声を出す少女の震える肩に手をかけ、抱き寄せる。

彼女は少年のことを理解し、肯定してくれた唯一の人物。故に、生まれて初めて人を死なせたくなくと感じてしまった。

「…ああ、約束する。お前は絶対に死なせない。だから…見失うなよ。」

翌日夜が明けた頃、騒ぎを聞きつけた都市からの捜索隊が、燃え尽きた村の中で倒れている2人の子供を発見した。

この日シキは、この世界で10回目の誕生日を迎えた。

ディアンケヒトファミリア

「……………」

まず感じたのは背中に当たる柔らかな感触。木々とは違う都会特有の匂いに目を開ける。

「………は……？」

身体を起こそうとして、左腕の感触があることに気付く。

「腕はワイヴァーンとの戦闘で失った筈。」

思考がそこに至ったところで、隣にいる筈の人物がいなことに気付き、飛び起きる。

「……アミッド！」

近くにいた女性がいきなり飛び起きたシキに悲鳴を上げるが無視し、全速力で部屋を飛び出す。足に上手く力が入らず転びそうになるが、人の気配を探して廊下を走る。

まるで病院だ。似たような部屋を一つ一つ探して回るが見つからない。

「あつ、君！止まるんだ！」

「どけ！アミッドは何処だ！」

男性が呼び止めるも、蒼眼に睨まれ怯んだところを通り抜ける。

すると向こうからも走ってくる人影が見える。何かを探すように周囲を見渡しなが
ら廊下を通り抜ける。服装は違うが、背格好と銀色の髪を見て誰であるか確信する。

「！ 見つけた！」

駆け寄ってくる少女を腕を広げて抱きとめる。肌から伝わる熱が、彼女が生きている
ことを改めて教えてくれる。

「良かった…見つからないかと思うとかなり焦った。」

「…本当です。いなくならないと約束したのに…。」

「ああ…でも、ちゃんと此処にいるだろ？」

「…はい。私も、此処にいます。」

子供をあやすようにして頭を撫でる。

少女の心を落ち着けたところで、今の現状を確認しようとする。

「ウオツホン！」

「！」

「まったく、こんな朝っぱらから院内を駆け回りよつて。子供は回復が早いというのは
本当じゃったか。」

後ろから髭を生やした白髪の老人が声をかけてくる。

「さて、2人共目が覚めたところでいくつか聞きたいことがある。辛いこともあるだろうが、答えてもらおうぞ。」

「…あなたが俺達を治療したのか?」

「そうじゃ。」

「…この腕も?」

「それについては後で話すとするかのう。」

とりあえず2人共、こつちに來るんじゃ。」

老人に促され、2人揃って応接室のような部屋に通される。老人と向かい合うようにして椅子に座り、質問する。

「此処は何処なんだ?」

「迷宮都市オラリオの治療院じゃ。同時に儂のファミリアのホームでもある。」

オラリオだと?それにファミリアと言ったか?自身のファミリアということとは、

「…あんたは神。ミアハ、いや、医神ディアンケヒトか。」

「ほほ、よく儂の名を言い当てたな。ミアハと間違えられたのはムカつくが。」

お前達はオラリオ南方にある村の子供で間違いないな?」

「ああ(はい)。」

「お前達は6日前、焼け野原になった村で倒れているのを発見され、この治療院に運び込

まれた。千切れたお前の腕も一緒にな。」

「——」

「…やはり…。」

「私達だけ…。」

「損傷が酷くはあつたが、なんとか繋げることは出来た。その歳で義手ともなると、サイズの調節に手間がかかるからな。お陰でエリクサーまで使う羽目になったわい。」

なんと、千切れた腕を繋げるほどの回復薬があるらしい。前世や村の常識では考えられないことだ。

「…礼を言う。ありがとう。」

「まったく、妙に子供っぽくない奴じゃ。」

それで、お前達を発見した近くでこいつを見つけてな。」

ディアンケヒトが机に出した物に、思わず腰を上げかける。この爪は、

「これはワイヴァーンの爪。まったく、死体丸ごと残ったものなど初めてみたわい。両翼が断ち切られ、首にナイフを刺したような痕がありおつた。心当たりはあるかのう。」

「…それは…。」

「俺が殺した。」

「——！シキ…。」

「…どうやったかを聞いてもいいかの？」

「それについては答える代わりに頼みがある。」

「…なんじゃ。」

「俺をこのファミリアに入れてくれ。」

「…ほう。」

「俺達には帰る家が無い。都市について何も知らないガキが歩き回ってもどうにもならないし、金だつて持ってない。」

神に嘘はつけない。俺が今話してることは紛れもない事実だ。今の俺ではアミッドを守ることができない。それに眷属になれば、恩恵を刻み、ステータスを確認することもできる。両者にとって都合がいい。

「駄目じゃ。うちに子守をする余裕なんてないわい。面倒を持ち込むのは御免…」

「俺の殺した魔物、灰になっていないらしいな。」

ディアンケヒトが口が止め、姿勢を直す。

此方を見定めるように目を細める。

「ここは治療薬を作ってるんだろう？俺達は今まで村で薬の作り方を学んでたんだ。少しは役に立つだろう。それに、モンスターの死体が残るなら素材も取り放題だし他のファミリアに全面的に頼る必要はなくなる。恩恵無しでモンスターを倒してんだ。そ

ちらにも利益の出る話だと思うぜ？」

ふむ……。と顎に手をおいて考え始める。

「…それに、腕の治療代を払わなくちゃな。」

「…ふ、ハハハハハ！ まったく生意気なガキじゃ、気に入ったぞ！ 悪くない取引じゃ。ただし、金はしつかり払ってもらうからな。」

大きな声で笑いを承する。

見かけ通りの豪快な神だ。

「ああ、それで構わない。」

「それで？ お前さんはどうする。」

と、アミッドに声をかける。

「私は…」

「アミッド、金と居場所については心配するな。お前一人、俺が絶対に養ってみせる。」

その言葉に首を振る。

「私は…もう誰も死なせたくない。この手で掴める命を救いたい。だから…」

席を立ち、頭を下げる。

「私も、貴方のファミリアに入れてください。」

「…ふむ、よかろう。その歳でそこまでの心意気、見事じゃ。それに、ガキが一人も二人

も変わらんからな。」

「……ありがとうございます。」

「本当にいいのか？アミッド。冒険者になれば常に危険と隣合わせなんだぞ。もしお前に何かあつたら……」

「私自身で決めたことです。シキー一人で危険な所に行かせるなんてもつての他ですから。」

それに、と続け、

「シキは私を守ってくれるんでしょう？もしもなんて起こりませんよ。」

微笑みながらそんなことを口にする。

ーホント、いきなりそんなことするのやめてくれ。心臓止まるかと思った。

「ハツハツハ！これだから下界の子供は面白い！よし、早速恩恵を刻むとするかの。さて、お前達の名は？」

「シキだ、姓は無い。」

「アミッド・テアサナーレです。」

「シキにアミッドよ。これより2人を我がディアンケヒトファミリアに迎え入れる！しっかりと働いてもらおうぞ！」

やることは決まった。俺達はここで生きていく。そのために出来ることはなんでもやっつけていかなければ。

2人のステータス

「…いや、おかしいじゃろ…。」

恩恵を刻み終えたのか、ディアンケヒトが紙を見て固まっている。

「どうかしたか？」

「…なるほど、確かにお前さん達は規格外のようじゃ。特にシキ、お前の眼は異常だ。その眼は神さえも容易に葬る。」

「…そこまでやばいのか。しかし、俺はともかくアミッドにも何かしらスキルか何かがあつたのだろうか？」

とりあえずステータスを見せてもらう。

シキ

LV. 2

力 : I 0

耐久 : I 0

器用 : I 0

敏捷：I O

魔力：I O

千里眼：H

恐怖耐性：A

痛覚耐性：E X

《魔法》

《スキル》

【直死の魔眼】

・任意発動可能

・”死”を視覚情報として捉えることが可能

・”死”の概念が無いもの、”死”を理解出来ないものは見ることが出来ない

・格下であれば見ただけで殺すことも可能

【霊核御手】

・常時発動可能

・視界内の物体の掴み取りが可能

・実体を持たないものでも可

・投擲に対して高補正

「設定が物騒なものがあるな。というか知らないスキルが発現してる。頼んだ覚えはないから自力で発現したということだろうか？原因は恐らく、一度腕を失ったためだろう。かなり使い勝手が良さそうだからありがたい。」

「アビリティ欄を見ても新しいのが増えている。千里眼つてことは遠くが見えるのか、はたまた違う効果があるのか。その辺はまあ放っておいてもいいだろう。」

それよりも、

気になることがもう一つある。

「なあ、レベルの数値間違えてないか？」

普通は1からだと思っただが。

「ディアンケヒトを見ると首を横に振るが、この数値に疑問を持っている様子がない。」

…理由に心当たりがあるのか？

「シキはワイヴァーンを倒したでしょう？」

「ワイヴァーンはLV3相当。恩恵無しでそれを撃破したのですから当然かと思いませんよ？」

代わりにアミッドが答えてくれた。

…そうなのか。この歳でレベル2だなんて、変に悪目立ちしてしまいそうだ。

まあ自身が強いことは何も問題ないし、金を稼ぐ上で都合がいい。いざという時にアミッドを守れないなんて話にならない。

「それで？アミッドはどうだった？」

長年都市にいる神が言うのだからなかなか優秀な魔法かスキルがあるのだろう。

「はい。魔法が発現していました。」

お、すごいな。始めから魔法が発現しているヒューマンはごく僅かだろう。

アミッド・テアサナーレ

L V I

力 : I O

耐久 : I O

器用 : I O

敏捷 : I O

魔力 : I O

《魔法》

【ディア・フラーテル】

・全癒魔法

・魔法円内にいる者の治癒、体力回復、状態

異常と呪詛の解呪

・詠唱式【癒しの滴、光の涙、永遠の聖域】

《スキル》

「ーん？」

いや、そこに手を置かれるとスキルが見えないんだが。

「そこは駄目です。」

頬を赤く染めて拒否してくる。

ー何故だ？

奥で主神がニヤニヤしてるのでとりあえず睨んでおく。

まあいい。知られたくないのなら無理に見ようとは思わない。危険なものであればあの神も黙ってないだろう。

それしてもこの魔法はすごい。

ここまでの治癒魔法を持つ人物はここでもなかなかないだろう。今は魔力が足りないだろうが、探索系ファミリアからも引つ張り凧になるレベルだ。

「よし終わったな？それじゃあギルドに冒険者登録に行くぞ。ついでだ。暇潰しにその

辺を少し案内してやるわい。」

「ディアンケヒトが豪快に笑いながら立ち上がり、シキの肩に手をかける。

「登録して何をすればいいんだ？」

「なーに、名前とファミリアを言っつて、軽く説明を受けるだけじゃ。大したことない。」

「そうか。」

シキとディアンケヒトが何やら話しながら部屋を出て行く。アミッドは自身のステータスが書かれた紙を見て、再び頬を染める。

《スキル》

【直死羨望】

- ・ 特定の人物に対する魔法の効果を大幅に向上
- ・ 特定の人物が傍にいる間ステータス大幅上昇

「アミッド？早く行くぞ。」

「ーはい。」

冷めることのない熱をどうにか抑え込み、後を追いかける。

頬の熱が消えても、心臓の動悸が収まることはなかった。

冒険者登録

「はあ、朝から疲れた…。」

ウエアウルフ

狼人族のトーコ・ニルヘルンが新人受付嬢として配属されてから、もうすぐ半年が経つ。

15歳で故郷の村を出てギルドに就職してからというもの、上司や先輩達にこき使われる毎日。半年前に受付嬢を任命された時には辞職を考えた程だ。今では18歳。所謂お年頃という奴である。

「何か癒しが欲しい。」

そう思うのは仕方のないことだ。若いうちは耐性が少ない分、原動力となる何かが必要なのである。

「冒険者登録に来ました。」

「…はえ？」

突如聞こえた可愛らしい声達に、思わず妙な声を上げてしまう。慌てて顔を上げるが、カウンターにそれらしき人影はない。

「子供の幻聴まで聴こえるなんて。」

「いよいよ本当に疲れてるのか、などと考えていると、いつの間にか傍にいた老神に声をかけられる。」

「おい、ちよつといいかの。」

「え？あつ、はい！つてディアンケヒト様！！？」

「こやつらの冒険者登録に来たんじゃが。」

「ーへ？」

カウンターの下を指差す老神に誘導されるように、身を乗り出して顔を向ける。

「…あの、冒険者登録に…」

そこに立っている2人の子供に目を丸くさせ、放心する。見まごうことなき美男子と美少女であると同時に、見た目の愛らしさに瞬時に心を射抜かれる。

「ーっは！はい！冒険者登録ですね？かしこまりました！」

その言葉にギルド内の冒険者達がざわめき出す。見た目10歳に満たないであろう少年少女が冒険者となるとなれば無理もない。更にそれを連れているのが医神ディアンケヒトともなれば、驚くのも仕方ないだろう。

動揺してそれすら頭に無いのか、駆け足で書類を持ってきたトーコが詳しい説明を始める。両者に同意を得たところで登録が完了する。

「それでは、シキさんとアミッドさんの担当アドバイザーを務めさせていただきます、受付職員のトーコと申します。何か質問等ございましたらお申し付けください。」

「わかりました。」

ああ、癒される。こんな殺伐とした職場にも一つのオアシスが、

「おお、そうじゃった。こっちのシキはレベル2じゃからそっちで登録しといてくれ。」

ざわめいていたギルド内が静まり返る。

―その後、過労で倒れたギルド職員の介抱と大騒ぎする冒険者達の処理に、一時ギルドが混乱に陥った。

「さて、うちは医療系ファミリアなので基本的に探索に出ることはないけど、稀に素材を取りにダンジョンに潜ることがある。他にもギルドからのミッションで行くこともあるから、最低限の戦闘は出来るよう、ダンジョンには週2程度で潜るように。」

冒険者登録を済ませてから2日経った。一応入院明けすぐには流石にまずいということでも2日間は安静にするよう指示され、今日からダンジョン探索を始める予定である。今はファミリアの団長のクロイ・サーチスから説明を受けている。

団長は俺達と同じヒューマンの男で、好青年といった印象だ。治療の実力はかなり高く、レベルも俺の一つ上の3だ。

「といっても、君達はまだ小さいし店の接客は難しいだろうからね。当分の間はお願した素材と薬草の採取と、治療院の手伝いになるかな。そのうち、空いた時間にポーションの製造方法についても学んで貰うことになるよ。最初は結構辛いだろうけど、体調を崩さないように適度に休みながら行うこと。いいね？」

「了解。」「わかりました。」

「よし、じゃあ僕からは以上かな。ああ後、ダンジョンでの稼ぎはファミリアに納めることになるけど、月に働いた分の給料は貰えるから、その金は好きにしてもらっていいよ。」

初期装備代は渡しておくから、それは自由に使ってくれ。食事については特に決まっていなくても、外で摂るときや食材の調達については報告しておくこと。…もうないかな？」

「大丈夫（です）。」

「うん。じゃあ行つておいで。シキはレベル2だから問題ないだろうけど、くれぐれも無茶はしないようにね。」

「ああ（はい）。」

そう言つてホームを出る。まずは装備を買わなくちゃいけない。2人合わせて3万ヴアリス。武器がどれくらい値段がするかわからないが、俺の場合、別段業物である必要はない。安いナイフをいくつか買うくらいで別にいいだろう。防具は今のところ買わなくてもいい。慣れないものを着けても動きにくいだけだ。

そう思い、武器が多く並ぶというバベルに足を踏み入れる。ここでは駆け出しの鍛冶師も作品を出しているところがあるらしい。それらしき店を見つけて、アミッドと共に中へ入る。

「いらつしやい…っ？」

明らかに場違いな少年少女の入店に、店主らしい人物と店内にいた冒険者達がざわめき出す。

「使いやすい量産型のナイフってあります？安物で全然構わないんですけど。」

「ああはい、それだったら…。」

「アマッドはどうする？」

「私は魔法的に回復がメインなので、小さい杖と護身のナイフくらいで…。」

「わかった、杖は後で専門の店に行こう。ナイフは俺のと予備も含めて10本ぐらいでいいかな。」

「そんなにですか？」

「投擲用にも使えるし、多めに越したことはないさ。武器がなくちゃ戦えないからな。」

「お待たせ。これでいいか？まとめて買うならサービスするよ。」

「丁度10本か、買った。いくら？」

「一本1200ヴアリスだが、まとめて10000ヴアリスでいいぞ。」

「ラッキー。ありがとう。また来るよ。」

流れるようにして購入を決めた少年は、まるで長年冒険者を続けている上級冒険者のよう
で、

「おいおい、こんなガキが冒険者だって？笑わせるぜ。いつからオラリオはガキの街にな
つちまつたんだ？」

それを良く思わない者達がいるのは、ある意味仕方のないことではある。自分より遥

かに若い人間が大きい顔をしているのを見たらそういう感情が生まれるのは必然とも言える。

「よし、次はアミツドの杖を探しに行こう。確かここへ来る途中にエルフが開いている店があつた筈だから。」

「はい。シキも一緒に選んでくださいね?」

「あんまりそういうセンスないんですけど…」

「大丈夫ですよ。私もよくわかりませんから。」

「…そうですか…」

嫌味を気にも留めない態度に更なる苛立ちを覚え、少年の胸ぐらを掴んで持ち上げる。

「おい! 何とか言えよこのクソガキ!」

「シキ!!?」

「うるせえな、室内で騒ぐなよ。ダンジョンでそんなことしてたらモンスターに群がられて死ぬぞ?」

怯えるどころか軽くあしらうような言い回しにキレて、腰にささった片手剣を抜く。

「この野郎!!? ぶつ殺してやる!」

「ーへえ？」

少年の目が蒼く染まる。

「誰が、」

剣に亀裂が入り、粉々に砕け散る。

「誰を殺すって？」

「氣づけば背後から首筋にナイフを当てられている。それも先程購入した安物のナイフで、」

「俺を殺そうとしたんだ、殺される覚悟はあるよな？」

「ヒイツ！」

「ーやめてくださいシキ。殺す必要なんてないでしょう？」

「なに、唯の冗談だよ。お前を殺そうとした罪は重いが、代償はその剣で充分だろ。」

「いきなり切り掛かってきたのは向こうですから謝る必要はないですけど、今後無意味な戦闘はやめてください。心臓に悪いです。」

胸を押さえながら心配そうに言うアミッドの頭を撫でてから、後ろの男に振り向く。

「剣壊しちゃまって悪いな。まあさつきも言ったけど、切り掛かってきたのはそっちだ。

正当防衛ってことで、」

それじゃあな。そう言つて店を出て行く。少女も後を追いかけて、お辞儀をして店を出

て行く。店内の冒険者達はしばらく呆然とするしかなかった。

「まったく、変なのに絡まれたお陰で時間食っちゃまった。ダンジョンに潜るのは明日以降だな。」

「そうですね。買う物だけ買って、一旦ホームに戻りましょうか。」

まあ仕方ない。昼から出かけたのも今考えれば悪手だった。明日はもっと早く起きようと決める。

「ねえ、ちよつといいかしら?」

「ん(はい)?」

振り返ると片目に眼帯を付けた女性が立っている。

「…あんた誰?」

「あら、ごめんなさいね。私はヘファイストス。一応ここの鍛冶ファミリアの主神よ。」

「へえ。」

「こちらこそ。アミッド・テアサナーレといいます。」

「あら、小さいのに随分礼儀正しいわね。そっちはそうでもないみたいだけど、」

「シキです。別に取り繕っても仕方ないでしょう? 神なんですし。」

「ええ、問題ないわ。それにしてもその歳でかなりの腕ね。そんなナイフで大柄の男を

倒しちゃうなんて。」

「そんなナイフって、貴方のところの鍛冶師でしょうに。」

「そうね。でもまだ技術が無いのは確かよ？甘くしたってしょうがないしね。」

「なるほど。それで、俺達に何か用ですか？」

「別に用ってほどでもないわよ？小さな冒険者2人組が店内に入っていくのを見かけたから、主神として観察してたってわけ。」

「見ていらしたんですか？」

「ええ。まさか鍛冶師の店で剣を砕くなんて真似すると思わなかったけど、」

「見たのに止めなかった貴方も同罪でしょう。怪我を負わせたわけでもないですし問題ないですよ。」

「あら、手厳しいわね。何処のファミリアの影響かしら。」

「鍛冶師はあんまり利用しないところだと思えますがね。」

「あら、やつぱりディアンのところなのね？あの老神に比べては随分静かな子だけれど。……まああそこは殆どがそうか。」

楽しく談笑しているように見えなくもないが、片側はまだ小さな子供だ。遠目で見ている冒険者達も不思議なものを見るように観察する。

「じゃあそろそろ行きますね。別の場所にも用があるんで。」

「ええ、引き止めてしまつてごめんなさいね。」

「また装備を買いに来るんで、その時はちよつとまけてくださいよ。」

「ふふ、考えておくわ。」

2人で一度頭を下げてからその場を去る。

後にアミツドの杖を購入し、ホームに戻つて食事にする。

明日遂にダンジョンに潜る。万が一死ぬこともないだろうが、彼女を危険に晒さないためにも、今日は早く寝ることにする。

目を閉じてしばらくすると戸を叩く音がする。

「…シキ?起きてますか?」

あえて寝たフリをする。俺が起きてると知ったら遠慮して入つてこないからだ。少しして、そつと扉を開けて中に入ってくる。

「…失礼、します…。」

ベットに潜り込み、胸に顔をうずめて腰に手を回してくる。

「…眠れないのか…?」

震える身体を包み込むように、肩を抱いて頭を撫でてやる。

「起きてるなら言つてください…。…そうです。あそこで寝ると、どうしても独りに感じてしまつて…。」

口には出さないが、かなり辛かっただろう。まだ9歳そこらだ。あまりに失ったものが多すぎる。しかし、これは仕方のないことだっただろう。自分でも冷たいことだと思うが、一般人にとってモンスターとは上位の存在であり、自分達が肉や魚を食べるのと同じように狩られる存在なのだ。生き残った俺達が特別なのであって、彼等が死んだことを悲しむことはあれど、悔やむことはない。

そんな考えを話しながら、背中をさすって落ち着かせる。

「…独りが怖いなら俺の隣にいろ。俺は絶対に死なない。俺が死ななきや、お前も死なない…死なせない。これからは、お前がしたい、すべきだと思つたことをするんだ。」

腕の中から微かな寝息が聞こえてきたのを確認し、自分も眠りに就く。

「朝起きた時、どんな反応するかな？」

それを密かに楽しみにしながら。

初めてのダンジョン

窓から差し込む陽の光に目が覚める。腕の中で寝息をたてているお姫様を起こさないように抜け出し、身支度を整える。

投擲用を含めた計6本のナイフを収納しようとして、取り出しに不便なことに気付く。

「少し調整するか。」

その辺の店で買った普通の革コートだが、戦闘用に作られた訳でもないので仕方ないだろう。内側に少し細工をして、すぐさま取り出せるように作り変える。コートに5本を収納し、後の一本は少し迷って袖に隠し持つ。いつでも出せるようにしておくべきだろう。

「ーんう、」

背後から聞こえる澄んだ声に振り返り、近寄って頭を撫でる。

「ほら朝だ、起きろ。」

「一え、シキ?...ツ!!?」

寝ぼけていたところを見られたからか、瞬時に顔を赤く染めると飛び上がるようにして起き上がる。

「あ、私昨日...す、すぐに支度してきます!」

「急がなくてもいいからしつかり準備しな。玄関で待つてる。」

ちよつと面白かったが、そこまで恥じることだろうか?少し前まで家が隣同士、よく同じ布団で寝たものだが。

軽く食事を摂り(団長が作ってくれた)玄関で待つていると、数分でアミッドがやってくる。

「一ごめんなさい、起きるのが遅くなってしまつて...」

「気にしなくてもいいよ。何しろ初めてのダンジョン探索だ。無理せず気楽に行こう。」
まだ朝早い時間帯。ダンジョンの入口には人がうろついているもの、その人数はまばらだ。多くがこちらに物珍しそうな顔を向けているが、一部は嘲笑を浮かべている。その中に昨日切り掛かってきた男を見つけ、笑みを向けてやると、引きつった顔をして仲間と共にダンジョンへと入っていく。

「トーコから聞いた話だと、今の俺のステータスなら上層は問題なく探索できるそうだ。」

「アミッドはまだレベル1だし戦闘にも慣れていないから、まずは5層くらいまでで様子を見よう。」

「は、はい、頑張ります。怪我をしたら言うてくださいね。魔法で治療しますから。」
「わかった、その時はお願いするよ。でも魔力がまだ少ないから注意すること。基本的にはその杖での打撃になるだろうけど、危なくなったら今渡したナイフを使って。適当なところに刺すだけでも違うから。」

アミッドにナイフを1本渡し、いざダンジョンへ潜り込む。中は思った程暗くなく、壁の色が分かるくらいには明かりがある。

入団してから2日ほどは、知識を付けることに費やした。オラリオの状況、ファミアの立場を含め、此処で生きるのが最低限必要なことは覚えてきた。生き繋いだ命だ。死ぬつもりも死なせるつもりもない。

基本的にうちのファミアは薬草や素材の採取がメインだが、上層のこんなところには薬草など殆ど無いし、ゴブリンやコボルドから落ちるような素材なんてたかが知れている。今のところは安全階層の1-8階層まで自力で行けるようにするのが目標かな？あそこは薬草も沢山生えてるし素材回収には良く行くらしい。

そんなことを考えていると、視線の先からゴブリンが2体歩いてくるのを目にする。こちらに気付くと、いかにもといった醜い表情をして走り寄ってくる。前世でもこんな

顔をした奴は見たことがない。身長は俺達とそんなに違わないが、動きは人間によく似ている。身体の構造もそうだ。故に、心臓部分をひと突きすれば終わる。

腰からナイフを抜き、前へと突き出す。

一体を難なく倒し、もう一体を足で地に転ばして押さえつける。

「アミッド、それで殴って倒してみろ。」

「は、はい。」

微かにモンスターとの戦闘に怯えがあったのだろう。慣れない手つきで杖を持ち、ゴブリンの頭を殴りつける。絶命し灰になって魔石を落とすのを見ながら語りかける。

「ほら、いくらモンスターといってもそれで殴れば倒せるし、倒せば灰になって消える。人間と同じ生物だ、怖がることは無い。」

「……はい。」

自身の怯えが見透かされていたことに気付き羞恥するも、モンスターとの向き合い方を悟り、杖を握る手を強める。

「さて、先に進むか。」

それにしてもさつきはあまりに手応えがなかった。そのうち自分がどこまで行けるか確認しに行く必要があるな。悪いがその時はアミッドにホームで待ってもらおうしよう。

モンスターに出会っては倒し、魔石を回収する。この工程を何度か繰り返したところで、下への階段が見え始める。

「この調子で5階層まで降りよう。無理はしなくていいから、疲れたら言ってくれ。」

3階層まではアミッドも難なく通り抜けたが、4階層に入ったところで疲労が見え始めた。

道の角に差し掛かったところでモンスターの集団に出食わし、挟み撃ちにされる。――まずい。

危機感を抱き、杖を構えるアミッドの肩に手が置かれる。

「無理するなアミッド、ここは俺がやる。」

「ですが、」

――それに、まだ今日は眼を使っていない。

「爺さんに結果の報告をしないといけないからな。」

蒼眼の獣がモンスター達に襲いかかる。

「やっぱりこの眼を使うのは良くないな。倒した感覚がまるで無い。」

アミッドは呆気にとられ、放心する。

「ものの数秒。」

気づけば彼の周囲には灰にならずバラバラになったモンスター死骸があるのみだった。

「早すぎて何も見えなかった。」

レベルの差とはこれほどあるのか。1つくらいならすぐに追いついてみせると思っていた心が、今では彼を遠い存在に感じてしまっている。嫌でも自分が足手纏いなことが理解できてしまう。

「成る程、魔石を取ると死体も消えるのか。で、身体の部位を取ってからなら、魔石を抜いてもその部位は消えない訳か。これは回収に手間がかかるな。」

恐らくスキルであった、物体の掴み取りが可能とはこのことだろう。試さないことには不明だが、この理論で言うと、生きてるモンスターから直接部位を取ること可能だろう。

呑気に素材の回収を始めるシキを見て、

「シキ、明日からのダンジョン探索、私は…」

「置いていけってか？」

「!?？」

「まあ別にそれでも構わないぜ？確かに俺はレベル2だからもつと下まで潜れるし、探索スピードだって上げることは可能だ。」

「…はい…ですから…」

「難しく考えるなつて。…今日の戦闘を見てわかった。お前は決して戦いに向いてる方じゃない。例えレベルがお前と逆で低くても、俺が勝てる自信がある。」

ただ、と続ける。

「お前がこの街で、やりたいことはなんだ？その為に必要なことはなんだ？」

「…それは…」

主神の前で願った望みを思い出す。

「…救いたいんだろ？」

「つー…はい。」

「なら、お前はその回復魔法を極めればいい。例え戦えなくても、窮地に陥った人を助ける力が、お前にはあるだろう？俺が持つてない、お前だけの力が。」

「！」

「…ほら、簡単なことじゃないか。」

顔を上げた彼女の顔には、確固な強い意志があった。

「まあ、どつかで深くに潜る経験は必要だけだな。」

「誰かとパーティーでも組むかな。」

「ファミリア内で組める人はいないだろう。2人の年齢とレベル的に考えると……」

「レベル1の上位かレベル2の子供か。これは、探すのに骨が折れるな……」

「まあぼちぼち考えるところ。5階層まで来たし、そろそろ戻るか。」

「と思ったところで、背後からぞろぞろと来るモンスターの群れにナイフを構える。」

「これから帰るって言うてんだろ。空気読めよ。」

「しやくだから素材にしてやろう。」

「眼が蒼く染まる。」

「そうだ、投擲の練習もするか。」

「コートからナイフを全て取り出し、眼に映る線と点を目掛けて投げる。まるで引つ張」

「られるように飛んだと思うと、あっさりそのモンスターを分断する。」

「おいおい、補正ってこんなにかかるのか。」

「霊核御手の影響だろう。厳密に狙う必要がないなら使い勝手が良い。」

「難なくモンスターの群れを倒して、素材を回収する。」

「……いつら見たことねえ奴らだな。」

「まるで実体がない影みたいな奴だ。生物には到底見えない。」

「……いつの顔、硝子みたいだ。持って帰ってみるか。」

素材を拾ってから魔石を抜き取り、灰になったのを確認してアミッドの元へ向かう。

「終わった。地上に戻ろう。」

「はい。ー！シキ！貴方、血が出ています。」

「ん？あつ、本当だ。」

よく見ると、掌から血が流れている。

「さっきの奴か。思ったよりリーチが長かったみたいだな。まあこのぐらいなら別に…」

「治療します。動かないで、」

「おいおい、そんな大袈裟な。」

覚えて間もない魔法の詠唱を開始する。まだ感覚に慣れないのか流れるようにとはいかないが、よく通る澄んだ声が耳に届く。詠唱を終えると、アミッドを中心に円が発生する。円から光が溢れ傷に集まり始める。

「【ディア・フラーテル】！」

一瞬傷口が光ったと思うと、次には傷痕も残さず治療されていた。

「ありがとう。しかしすごい回復力だ…な？」

傷口を確認していると、肩に重み加わる。寝息をたてているアミッドを見て溜息をつく。

「流石にまだ魔力が足りないか、」

恐らく精神疲労マインドダウンだろう。慣れない魔法の使用と強力な効果によって、一度に持つていかれたに違いない。

「せめて、ダンジョンを出てからにしてみらうべきだったかな？」

1人の少年が少女を背負って歩き出す。

その姿は赤子を背負う父親のようにも見えた。

「あ、ナイフ拾うの忘れた。」

2階層まで昇ったところで気付く。

初日にしてナイフを半分も無くしたことは、後の酒の席での笑い話。

探索後

「…なんじゃこの素材は…?」

「僕も見したことないですね…。」

あれから、ダンジョンで気絶したアミッドを背負ってホームに戻った。玄関でディア
ンケヒトと団長に会い、中に入ってから回収した素材を見せる。

「えっと…なんだったかな? 爪が長い影みたいなモンスター、そいつの顔。レンズみた
いで綺麗だったから持ってきた。」

「!??まさかウオーシャドー!??どこまで潜ったんだ君は!??」

「おわ!急にデカイ声出さないでくださいよ。安全面を考慮して5階層までしか潜つて
ないですって。」

「5階層じゃと!??初日からなんてところまで潜ってるんじゃ!」

「ウオーシャドーは6階層以降に出現するはず…。まさか、階段手前まで降りたな?」

「だからアミッドが気絶することになるんじゃ!無理させおって!」

「おい待ってくれよ爺さん。アミッドが気絶したのは魔法を使ったからで…」

「彼女の魔法を使ったということは、どこか怪我をしたということだね?」

「何々!!? 怪我をするようなことをしたのかお前は! あと儂は爺さんじゃないわ!」

「儂つつてんだろが! ただ軽く切れただけです。いいつて言ったのに聞かなくて」

「知らん! お前の監督責任じゃ! 飯はやらんぞ! 今日外で食つてこい!」

「それ作つたの僕なんですけどね」。

「はあ!!? …わかつたよ。じゃあちよつくら行つてきますね。支払いはこれで、」

「ーん? なつ! おいこら返せ! それは儂の財布じゃ!」

「必要経費は払つてくれるんでしよう? 主神命令なんだ。食事代くらい出してくれるよな?」

「ふざけるな! それは今夜儂が酒を飲むのに使うんじゃ!」

「あーあ、ダンジョン探索疲れたな。今夜は目一杯酒でも飲んでゆつくりしようかな。」

「5階層程度でお前が疲れる訳ないじゃろ! 二桁になつて間もないようなガキに酒なんて飲ませてたまるか!」

「お、今5階層くらい問題無いつて認めたな!!? ほら、これまでの理不尽な言葉の暴力について謝罪しろよ。じゃないとこの財布の中身全部俺の武器代に変えてやる。よかつたな、眷属の生存率が上がるぜ? ほら、喜べよ。大事な子供が元気に生きられるんだ。」

ありがたいことだろ?」

「やかましいわ! いいからとつとそれを寄越せ!」

「いい加減にして下さい!!? 店まで聞こえています!!?」

扉が勢いよく開き、見知った顔が飛び出す。

「あ、アミッド、起きたのか…?」

「お、おお、よく無事じゃったの…?」

さつきまでの勢いは何処へ消えたか、焦ったように2人揃って声をかける。

「あ、やばい。」

普段冷静な人程怒ると怖いというが、彼女は怖いというより、

「二人とも、そこに座りなさい!」

「は、はい!!?」

逃げられないのだ。瞬時に姿勢を正し、仲良く並んで正座する。団長が横で苦笑するも、とぼつちりを受ける前に退散し、他の団員もそわそわしながらも扉の隙間から様子を確認する。2人が何やら言い訳をしながら、最終的には責任のなすりつけ合いをし始める。目の前の少女の顔が引きつってることには気づかず…。

その日、ディアンケヒトファミリアのホームに、少女の雷が落ちた。

「まったく、お前のせいでとんだとぼつちりを受けたわい。」

「誰のせいだ誰の。」

軽口を叩いた後、会話を戻す。

「―それで?この素材、どうする?」

「うちで使えないこともないが、生憎品質の良し悪しでどうこうなる商品は少ないからな。他のファミリアに売った方がよっぽど金になる。」

「そうか…。なら明日の朝、ヘアリストスファミリアに行ってくるか。…上手くいけば本人との交渉に持っていけるかもしれない。」

「上手い具合に高く売れよ?良い収入源になるかもしれない。」

「フッフッフッフ…」

金の話になると気が合う2人である。

「それとは別に、話がある。」

「…アミッドのことじゃな？」

「ああ。」

一度の魔法の使用で精神疲労。初めてだったからでもあるだろうが、今後ダンジョンで活動するなら魔力が足りない。というより、一度の魔法に込める魔力が調節出来ない。その練習をしなければまともに使うのは難しいだろう。回復魔法の使用なら、地上でも充分可能だ。わざわざ潜る理由はない。

「しばらくはダンジョン探索に行かせる気はない。好きにしろ。」

「…よろしく頼む。」

「何、あれはいずれオラリオ一の治癒術師になる。当然のことじゃ。」

「ああ…。新しい素材と薬草、期待しとけよ？爺さん。」

「やかましいわ、クソガキが。」

夜の空を見上げる2人の影は、まるで星を探す親子のようにも見えた。

鍛冶神との取引

昔から人が多いのが苦手だった。

様々な場所からまるで鳥が囀るように音を発しているのを聴くと、どうしてもそれら全てが邪魔に感じて仕方がない。

まああくまでそう感じるだけで、別に絶対嫌という訳でもない。そんなどうでもいいことを考えながら、天高くそびえ立つバベルへと入る。

「こういう塔って、耐震とか設計に問題があって倒れた時の責任者は誰になるのかな？ 建てられたのはかなり昔の話だし、関わってた神とかが責任問われるのか。うちの主神が関わってたりしないよな？」

結局どうでもいいことを考え、昨日ナイフを投げたまま回収し忘れたことを思い出す。

「まあ昨日だけでも思ったより稼いだし、もっとちゃんとしたもの買ってもいいけどな。」

使いやすさ重視だ。ひとまず素材を売ってからにしようという周囲を見廻していると声

をかけられる。

「あらシキじゃない。もう来たのね？」

「あ、ヘファイストスさん。丁度良かった。」

「3日ぶりくらいかしら、今日はあの子は一緒じゃないのね？」

「あいつは暫く店の手伝いです。ダンジョンには俺一人で潜ります。」

それに関しては少しごねていたが、理由を説明すると一応は納得したようだ。

まあ俺も、アミッドが一人で潜るなんて聞いたら黙っていられる自信無いから、人の

こと言えないんだけど。

「そう。で、何の用かしら？」

「ええ。ナイフの補充と、昨日の探索で手に入れた素材を売りに来まして。」

「成る程ね。いいわ、ついでだから私が見てあげる。」

よし、ここまではいい流れだ。

「この素材なんですけどね。」

バックからウォーシャドローのレンズを取り出して見せる。

「…何？この素材。」

「出来ればきちんとした部屋で話をさせてくれませんか？口外しないという約束で。」

「…あなた、やっぱりとんでもない子ね。」

鍛冶神であるヘファイストスさえ見たことのない素材。冒険者なりたての子供とは思えない高度な会話。

「まったく、ディアンったら面白い子を見つけたものね。

「いいわ、ついて来なさい。」

鍛冶神に連れられしばらく歩いた後、部屋へと入る。

「普段私が働いている部屋よ。ここなら人も来ないわ。」

「神様も働くんですねえ。」

「そりゃあそうよ。働かないようなやつもいるけど、子供達にばかり働かせて自分は楽するなんて示しがつかないじゃない。」

うちの神は命令ばかりしてるけどな。ああでも、俺の腕を治したのはあの爺さんだったな。いや、エリクサーを作ったのは多分団長だからやっぱり何もしてないのか？

∴今度暇な時観察してみるか。

ヘファイストスが紅茶を淹れ、机に並べる。

「それで？これは一体何の素材なのかしら？まさか盗んできたとは思わないけど、かなりの高品質ね。なかなか良いものが打てそう。」

「ああそれ、実はウオーシャドーの頭なんですよ。」

ヘファイストスが口に含んだ紅茶を吹き出しかけてなんとか飲み込むが、器官に入り

むせる。

「はあ!? ダンジョン初日に6階層まで行ったの? 普通死ぬわよ?」

「正確には5階層まで登ってきた個体ですけどね。それに俺一応レベル2なんで、多分問題ないですよ。」

「その歳でレベル2とか…。はあ、あなたの実力が高いのは理解したけど、この品質、上層で採取出来るような物じゃないわよ?」

「とある方法で、モンスターを殺しても灰にならないようにすることが出来るんですよ。なんかそこそこ硬くて綺麗だったんで、ウォーシャドーを殺した後で剥いで持ってきたんです。」

神との交渉に内心かなりびびってはいるが、なるべく冷静な態度を装うために紅茶を飲みながらゆったりとした口調で話す。人は神に嘘がバレるらしいが、別にこういった場で相手を欺くのは何も嘘だけではない。高校の面接で鍛えた精神力でなんとか抑える。

「そんな訳で持ってきたはいんですけど、うちのファミリアじゃ使えないって言われてしまつて。治療薬の材料になるようなもの以外はこちらに売らせて欲しいと思ひ、来た次第です。」

「成る程…確かにディアンのところじゃあ使えないわねこれは。」

驚いてはいたが、この説明に納得したようだ。紅茶を一口飲み、話を続ける。

「いいわ。そういうことなら、うちで買い取ってあげる。でも、素材の価値がいまいちわかりにくいわね。実際に武器を打って使ってみないことには判断が難しいし……」

「じゃあ、買い取りは判断出来てからでいいですよ。急ぐ必要は無いですし。その素材は価値を分析するのに差し上げます。」

少年の返答に目を丸くする。

「無償で提供するってこと？」

「ええ。実際にどの程度のものかわからないと話にならないでしょう。初めてみる素材は一つ無償提供しますから、後はうちの主神と話をつけてください。」

「ディアンとの交渉はあまりしたくないけれど……いいの？この話、あんまりあなたに得があるように思えないけど。」

「別に構いませんよ。使えない素材を持つてもどうしようもないですし。……最悪うちのファミリアで無理矢理使うという手もありますけど、ヘファイストスファミリアほど有効活用出来るとは思いませんからね。」

こちらをちらちら見ながら話す少年に溜息をつく。いい感じにこちらを持ち上げているように見えるが、要するに自分たちのところでは使わないから買い取れと言っているのだ。実物を見せられた後では無駄にするのも惜しい。

「この間の言葉は訂正するわ…。あなた、ディアンに結構似てるわよ。まったく…いいわ、交渉成立。価値が判断出来次第、買い取ってあげる。」

「どうも、ヘファイストスさん。」

してやったり、という顔に再び溜息をつくが、悪い気はしない。

「…ほんとに子供なのかしらね？ まあいいわ。流石に無償で貰うのは悪いしディアンに文句を言われそうだから、代わりにその辺の武器を持って行っていいわよ。うちの子たちの作品なんだけど売るか微妙な物もあるから。」

部屋の扉の近くに並べられた武器を指差す。様々な種類のものがあるが、色が全身黒の短剣やリーチが異様に長い刀など、一味変わったものが多く見える。

「それはありがたいですね。投擲用のナイフも補充しなくちゃいけなかったし。」

「そういえばさつきも言ってたわね。かなりの量買ってた筈だけど、どうしたの？」

「いや、回収するの忘れちゃいました…」

「まったく…。いい？ いくら安くてそこまで丈夫じゃない武器でも、鍛冶師が汗水垂らして打ってるものなんだからね。今後は壊れたとかじゃなく失くすなんて真似は許さないわよ。」

「り、了解です。」

さつきまでの余裕の態度は何処へ消えたのか。成る程、こういう手は効くのね。

「その武器はいつでも持つていつていいわ。あなたに死なれると折角の取り引きも台無しだし、私なりのサービスよ。」

「いろいろありがとうございました。失礼します。」

立ち上がり、置いてあつた中で一番しつくりきた短剣を手に取る。

「本当よ。そんなんじやあの子に呆れられちゃうわよ？ 女は頼り甲斐がある人に振り向くんだから。」

「…あの日、ずっと隣にいと約束したんです。今更そんな心配してませんよ。」

「まったく、生意気な子ね。調子に乗つてるとすぐに死んじやうわよ？」

部屋から出ていこうと扉に向かい、こちらに背を向けている少年に嫌味つたらしい台詞を吐く。

「あいつを残して死ぬつもりはないね。」

顔だけ振り返つてそう言い残すと、会釈だけして部屋を出て行く。

「…あら、随分と男前じゃない。彼女も幸せ者ね。」

本当に10歳の子供なのかしら？ その辺の冒険者には無いような強い覚悟を感じる。

「ホント、これから忙しくなりそう。」

少年が置いていった素材を眺めるとそう呟く。とりあえず自分で打って試してみるか。そう思つて槌を掴むと鍛冶場へと入る。

「彼に触発されちゃったかしら？」

火の中に入れた素材を見ながらそんなことを考える。昨日たまたま見かけた、小さな背中に少女を背負った少年の後ろ姿を思い出して笑みを浮かべる。

滅多に使われることのない鍛冶神の鍛冶場に、日が暮れる頃まで部屋一杯の金属音が鳴り響いた。

ロキファミアミアとの遭遇

冒険者の武器は様々だ。剣だけでも長さや幅、重さに違いがある。見た目が鮮やかな武器を持つ者もいるが、正直そういうものに限って耐久性があまり無かったりする。

また、槍を使う者も意外と多くいる。相手のリーチ外から一方的に攻撃出来るのは当然有利に働く。人間はかつてこの武器を使って地上の支配者となった。だが、高ランクの冒険者になるにつれて、槍を使う者は少なくなる。リーチが長い分取り回しの効きづらい槍は、どうしても扱いに高度な技術が必要とされるためだ。それを使いこなせるかは、使用者の技量に委ねられる。

そんな数々の武器を持った冒険者達が集まるダンジョン入口で、あまりに軽装で貧弱な武器を持つ少年がいた。

「…結局新しいナイフ買わなかったな。短剣だけは貰ってきたけど、やっぱり使い慣れたるナイフの方がいいかな？壊れた訳でもないのに新しいのを使うのは申し訳ないし…今日は中層手前まで行ってみるか。」

トーコに聞いた話、中層からはモンスターの出現率が圧倒的に増えるらしい。1人で

は相手をするのに手間取るかもしれない。潜るのはパーティーを組んでからにしよう。

昨日探索した5階層まではサラッと流して通り抜ける。できればまだ見たことのないモンスターの素材を持ち帰りたいところだ。

7階層まで降りたところで、蟻のようなモンスターの集団と遭遇する。顎をガチガチ鳴らしながら近づいてくる。

「「キシャー!!?」」

「…気持ち悪い。」

普通なら恐怖を抱くところだが、生憎恐怖には耐性がある。代わりに強い嫌悪感が出てしまい、視界に映った線をナイフでなぞり瞬殺する。飛び散る体液がかからないように注意しながら、魔石を回収しようとして顔をしかめる。

「…どうせ全部持って帰れないしいいか。」

一体分の素材だけ剥ぎ取り、残りは魔石を砕いて灰へと還す。この眼の欠点は、魔石を抜かないとモンスターが灰にならないことだ。そのため死体に直で触らなければならない。

「なんでモンスターってのはこんなに異形な奴が多いんだ。」

いくら簡単に殺せる相手でも流石に集団で来られると気持ち悪い。さつきも思わず眼を使ってしまった。使わないで済むならそうしたいが、素材を取る為には仕方な

い。

「さつさと一階層まで降りるか。

身を軽くかがめ、足を前へと踏み出す。

想像以上のスピードに危うく転びかける。

「危なっ、やっぱり神の恩恵つてすごいな。」

当然のように街に神がいるせいで実感が湧かなかつたが、やはり神は神らしい。

「…まあ本来に死ぬかはともかく、殺せるのはわかつたな。」

神とは本来不明瞭なものであり、死が理解出来ないものに分類される。しかし、下界にその存在を降ろし、人間と同等の存在となった神にも、鮮明にとまではないが死の線が見えた。

線が見えるなら神であっても殺せる。もし自分やアミッドに害を成す存在がいるなら、殺すことに躊躇いはない。

「アミッドは嫌がるだろうけどな。」

彼女は人が死ぬことに忌避感を抱いている。当然シキも、人が死んでいくのを好き好んでいるわけではない。

しかしそこに理由があるのなら、それは人間らしい死として受け入れるだろう。人間は醜い生物だ。妬み憎しみで簡単に殺し合う。それは前世でも当然のようであつた話

だし、特に何も思うことはない。こんな世界だ。明確な理由を持った殺人であれば、人を殺すことも迷わない。

そんなことを考えながら進み1階層まで降りていったところで、前方から歩いてくる3人の人影を目にする。

ダンジョンで他のパーティーに遭遇するのは珍しいことじゃない。基本は無干渉がルールで、出会っても話しかけるなんてことはしない。モンスターが大量に発生したりしている場合にはトラブルの原因になるらしいが、幸い近くにモンスターの気配はない。

なんてことを考えていると向こうもこちらの存在に気付く。気付かれたことに気付くも、特に用などない。無視してモンスターが現れるのを待つ。が、

「おや、こんなところに1人でいる冒険者なんて珍しいね。初めて見る顔だ。しかもまだ小さい子供だとは。」

「こんな階層にいるとは、小童にしてはやりおるようじゃ。おいお主、名は何という?」「おいガレス。ダンジョンでは互いに不干渉だ。気安く話しかけるな。」

「まあいいじゃないか、たまにはこういうのも。それにアイズのこともある。聞いておいて損はない。」

その言葉に背の高いエルフの女が黙るが、黙ってもらっても困る。こちらに会話する

ような意思はない。大柄の男（おそらくドワーフ）とシキより身長の低い少年のような男が近づいてくる。1メートルとちよいくらいだ。あまりに小さい。小人族バルツムだろうか？

3人も、ここより下の階層から登ってきて汗一つかいている様子がない。かなりの高レベルの冒険者だろう。流石に無視することは出来ないか。

「…誰だあんたら。」

思わず反発的な態度をとってしまったが、気にした様子もなく笑いながら答える。

「ハツハツハ！すまん、俺はガレス・ランドロックじゃ。気軽にガレスで良いぞ。」

「確かに聞いておいてこちらが名乗らないのも悪いね。僕はフィン・デIMUMナ。こう見えてもロキファミアリアの団長を務めさせてもらってるよ。」

「…リヴェリア・リヨス・アールヴだ。」

3人の聞き覚えのある名前に顔を引きつらせる。ロキファミアリア、都市最強派閥のレベル5全員に話しかけられて普通にしろというのも難しい話だ。

流石にここは名乗らないとまずいだろう。

「…シキです、姓はない。所属はディアンケヒトファミアリア。」

「ディアンケヒトファミアリア？医療系ファミアリアの団員がどうしてこんなところ？」

「薬草と素材の確保と、あとは資金稼ぎですかね。入って間もないんで金がないのと治

療費払わないといけないんで。」

まあヘアアイストスさんとの交渉が上手くいったので、今後は定期的に金が入ってくるようになるだろう。…主神に全部持ってかれるかもしれないが。

「入って間もないだど!??それでこんな階層にいるなど、死にたいのか!??」

先程不干渉だと注意したくせに、エルフの女が突然大声で怒鳴ってくる。

「うるさ…。はあ、レベル2でこの階層って潜りすぎなんですかね?受付では適正って言ってますけど。」

トーコに適正と言われはしたが、この眼を使ってしまうと手応えがあまりにない。素材回収目的以外では極力使いたくない。

少年の言葉に3人の上級冒険者が目を見開く。レベル2、それにこれだけ若いともなれば小さかれ噂になる筈だが、シキなどという名前は聞いたことがない。

「…失礼だが、年齢を聞いてもいいかい?」

「?…10ですけど。」

「…そういえばアミッドももうすぐで10歳になるな。…なんか用意してやろう。」

質問に答えていると、後ろの方で壁に罅が入り、モンスターがぞろぞろと湧いてでる。

「モンスターってああやって産まれんのか。…そういえばさつき魔石砕いちやったから全然回収出来てねえな。」

「…すみません。あのモンスター貰ってもいいですか？」

「え？ああ、構わないよ。」

あの量を1人で？まあ実力を見るには丁度いい。本当にレベル2なら問題ないだろう。

「じゃあちよつと失礼しますね。」

その言葉と同時に駆け出し、ナイフを横に一閃する。

次の瞬間少年の姿はここには無く、慌てて向こうを見ると、遠く離れたモンスターの集団で次々と敵を斬り伏せていく少年の姿があつた。

「早い!!? いや、まったく見えなかった。

レベル5ですら見えない動き。何かのスキルか、あるいは魔法なのか。武器も安物のナイフにしか見えない。小さな冒険者の想像以上の強さに戦慄する。

「彼とは是非友好な関係を築いておきたいね。」

脳裏に半年前入団した金髪の少女を思い浮かべる。あの子には歳の近い友達が必要だ。今度ホームに招待してみようか。

そうこう考えているうちに、少年が最後の一体を斬り伏せる。だがここでも異常な光景を目にする。

「…モンスターが灰にならない!?!?」

異常の連続に、少年の眼の色が変化していることには気が付かなかった。

少年が何やら死体を弄り、身体の一部を剥ぎ取ったと思うとそれをしまう。その後、魔石を抜き取るとようやく灰になり消滅する。全てのモンスターから魔石を抜き取ると、満足したのか戻ってくる。

「あれ、まだいたんですか?…なんかすいません、待たせてしまったみたいで。」

開口一番それか。と苦笑するが、なかなか面白いものを見させてもらった。

「いや、邪魔してすまなかったね。予想以上に強くて驚いてしまった。今度ディアンケヒトファミリアに世話になる時はゆっくり話したいものだ。」

「はあ…」

流石にこれ以上は迷惑だろう。そろそろ退散するでしょう。

少年に別れを告げ、階層を離れる。

「…あの少年、どう思う?」

「さあなあ。なかなか腕が立つが、それだけではないのう…。」

「…彼がモンスターに向かっていった時…見えたかい?」

2人とも首を振る。

「僕も見えなかった…。それにあのナイフ、唯の安物にしか見えなかった。あれではハードアーマードの甲羅が切れるはずがない。」

魔法を使ったようには見えなかった。それではスキルだろうか。いずれにしろ彼が異質な存在であることは確かだ。ファミリアに支障をきたすとは思えないが、まだ彼については情報が少なすぎる。入って間もないとはいえ、そろそろ噂も出回ってる頃だろう。その辺りの情報も集めつつ、近々ある遠征の準備も進めなければ。

「それにしても儂らがいない間、アイズをどうするかが問題じゃな。」

「ああ。遠征中はどうしても面倒が見られない。今日はホームのロキに預けているが、ずっと任せておくわけにもいかないだろう。幾分かマシになったとはいえ、何よりあの子自身我慢出来ない。」

「…さっきの彼に頼んでみようか。」

フィンの眩きにリヴェリアが目を剥く。

「なっ！彼は他派閥だぞ！何か問題があったら…」

「遠征は一週間後だ。…それまでに情報を集めて、彼に直接会いに行く。歳が近いし、彼はソロだった。ここらでディアンケヒトファミリアに恩を作っておくのもいいかもしれない。」

「…確かに、闇派閥イヴィルスの連中に呪詛カースを得意とするやつがいたな。」

「なるほどな。関わりを持っておくのもいいじやろう。」

「よし。彼の方は僕で話をしてみる。リヴェリア、その間アイズを頼んだよ。」

「…わかった。ロキには私から話しておく。ガレスは遠征の準備を進めておいてくれ。」

「僕は雑用係じゃないんだがな…了解した。」

彼には今後世話になる予感がする。親指のうずきとは関係なく、フィンの長年の勤がそう告げていた。

「結局何が聞きたかったんだ？あの人たち。」

ロキファミリアの3人がいなくなり、1人になったところで考えてみる。

「まあ別にいいか。素材も取れたし、今日はもう帰ろう。」

魔石と素材で一杯になったバックを背負い、3人が行ってしばらく経ったところで歩き出す。そこで、足首に僅かな痛みを覚える。

「いつてえな、さっきので挫いたか。」

「急に慣れないものを、殺した」ためだろうか？

自分とモンスターの間を移動するのにかかる筈の時間。そんなものを殺せば、バランスを崩すのも仕方がない。

進んでいればいずれ辿り着く距離とはつまり、終わりがあることを示す。『目的地に着くのかかった時間』なんて言葉があるが、これはその時間が終わった時に初めてわかることだ。終わりとは即ち”死”であり、死に至ることとその場所に着いたという結果が生まれる。限定的な時間における死とは、その時間が過ぎること。なんなら、時間をスキップしたと言ってもいいかもしれない。

例えば、『あのモンスターに向かって走る。』という行動を起こす時、自身の走る速さとは別に、そこに行くまでの時間と距離というものが発生する。

(道のり) \parallel (速さ) \times (時間) という法則がある。

この式の時間が0になれば、どれだけ速さがあってもなくても、必然的に道のりは0になる。時間の死とは、間接的に距離の死でもあるのだ。

これを発見したのは村にいたころだったが、

どんなに頑張っても大した距離に移動することが出来なかった。

ーひよつとして千里眼の影響か？

別の角度からの俯瞰的な光景を目にすることで、距離間が掴みやすくなったのかもしれない。もつと遠くが見えるようになれば、実質的な瞬間移動も可能だろう。距離が遠くなるほど死が見えづらく、脳に負担がかかるため何度も使いたくはないが。

アミッドは今頃治療院の手伝いだろうか？魔力に余裕が出来れば、いつか彼女の魔法が使われるようになるだろう。そうすれば彼女の夢に近づく。

「…早く帰ろう。」

自然と足が早くなる。時折現れるモンスターを魔石ごと貫きながら歩く。一緒にダンジョンに行けなかったことを拗ねてるかもしれない。

その日、ダンジョン上層で黙々と歩きながら、襲いかかるモンスターを無言で瞬殺する少年の情報がギルドで噂になった。

フィン・デイルムナ

ロキファミリアの3人にあつてから4日後、唐突にフィン・デイルムナがディアンケヒトファミリアのホームを訪ねてきた。

今日はダンジョンに潜らず治療院の手伝いの日だったため、荷物を運んだりポーシヨンの作り方を学んだり、中々有意義な時間を過ごしていたのだが、うちの団長が言うにはシキに用があると話してゐるらしい。

「…何かあつたんですか？」

横で一緒にいたアミッドに心配される。最近ダンジョンばかりで一緒にいられず、今日は一日傍にいるつもりだったのだが、呼び出しに応じない訳にはいかない。

「大丈夫だって、心配ない。」

嘘だ。滅茶苦茶不安です。え、この間なんかまずいことしたかな。世間話したただけだと思つたんだけど。

応接室に入るとフィンさんが座つて待つていた。

「やあ、4日ぶりだね。会えて嬉しいよ。」

爽やかな笑顔でそんなことを言つてのける。一体何人の女がこの顔にやられたのか、

想像するだけで恐ろしい。

引きつりそうになる顔を抑え、返答する。

「どうもフィンさん。今日は一人ですか？」

「敬語は不要だ、フィンでいいよ。冒険者同士気楽に話そう。今日は3日後の遠征に必要なポーションの手配と、君にお願いがあつて来たんだ。」

「…お願い？ 都市最大派閥のロキファミリアがレベル2のガキにお願いすることなんてあるのか？」

気楽でいいと言われたため、遠慮なく普通に話す。経験上、変に遠慮すると相手側が困ることが多い。それに昨日から思っていたが、この人意外と気さくなタイプだ。というかすごい話しやすい。

「この場合君の言葉を借りると、ガキだから頼みたいことなんだよね。」

「ガキだからねえ。ガキに頼むっていったらガキについてしか思い浮かばないなあ。」

「察しがいいね。僕たちが遠征に行く1週間の間、是非ガキの面倒を頼みたいんだ。」

「ガキの面倒？ 天下のロキファミリアが他派閥にガキのお守りをさせるのか？」

「生憎うちにはガキがあれしかいなくてね。いい歳したおっさんに頼むわけにはいかな
いからなあ…。せつかくだからガキ同士仲良くしてもらおうと思つてね。」

「おいおい、ひでえ言われようだな。見た目だけならそっちの方がガキっぽいだろ。」

「はははっ！そんなことを言ってくるのは君くらいだよ。内心は知らないけどね。」

軽口を叩いて笑っていると、突然扉を勢いよく開けてディアンケヒトが入ってくる。

「さつきからガキガキうるさいぞ!!?このクソガキども!!?」

「手前に言われたくねえよ。」

…老神が出ていき、扉を閉める。

「おつといけない。いやあ、いいね君。思わず素で喋りかけたよ。こんな立場ともなると皆気を使うし、日頃の態度も意識しないとイケないからね。気兼ねなく話せる人ができて嬉しいな。」

「こつちも子供扱いしてくるやつが多くて普通にしづらいからお互い様だよ。見た目の印象がそんなに大事かね?」

「そうだね…。君から見て僕は何歳くらいに見えるかな?」

「さあ?30代前半つてところじゃないか?」

見た目は子供、中身は親父つてか?そのうち眼鏡でもかけて「あれれ?」とか言うてきそくだ。

「正解！ 良くわかったね。もうかなりのおっさんさ。若さが羨ましいよ。」

「昨日の3人の中では一番歳下だろあんた。いいじゃないか。ありがたくシヨタじじいの名を頂戴しとけよ。」

「それは困ったものだね。早いところ嫁探しをしないとまずそうだ。」

やはり気が合ったようですっかり仲良くなり、楽しく談笑したところで話を戻す。

「で？ どんなやつなんだ、面倒を見て欲しいってのは。」

「7歳の子だね。名前はアイズ。両親がモンスターに殺されて、うちで引き取ることになったんだ。」

「冒険者になったのは自分の意思か？ …唯のモンスターって訳じゃ無さそうだな。大方復讐ってところかね。」

わざわざ都市最大派閥が引き取ったんだ。両親も只者じゃないだろう。

「…ああ、およそ人に言いがたい運命を背負っている。恩恵を刻んでからもう半年だけど、目を離せばすぐにダンジョンに行こうとするし、モンスターとの戦闘を行う。入った当初よりはマシになったけど、僕らの指示もあまり聞かないね。どうも、強くなることに固執しているみたいだ。」

「あんたらが厳しくて嫌になっただら。そのぐらいと年齢になれば、自分の思い通りにいかないといライラするものさ。…依頼としては何をすれば良い？ 流石に常に面倒

を見ろというのは無理だぞ。」

「流石にそこまで言うつもりはないよ。ダンジョンにいる時に無理をしないように見張ってくればいい。出来ればホームに連れ戻してくればありがたいけど。」

「成る程、お目付役つてわけね。戦闘狂の相手をするのは面倒だな。」

「…シキ、引き受けてくれるかい？」

「おいおいフィン、ここには俺に依頼をしに来たんだろ？ 対価があるなら依頼を受けるのは当然だね。」

「？ 対価について話した記憶はないけど？」

「何、ロキファミアリアの団長様とお友達になれて、期待の新人のお目付役だ。充分だろ。今後ともうちのファミアリアを利用してくれるなら言うことは特にならない。パーティーメンバーは俺も探してたしな。」

それに同年代の友人が出来るのはありがたい。そのうちアミッドにも紹介しよう。

「…ふ、やっぱり君とはいい友人になれそうだ。よろしく頼むよ。3日後の遠征に行くときに連れてくるから、ダンジョン入口の広場で待っていてくれ。」

「わかった。毎日無事にホームへ帰すと約束する。」

「ありがとう。これで僕達も安心して遠征に向かえる。…それにしても、そこにいる彼女はどうかしたのかい？」

「ん？ああアミッドか。どうした？」

扉の隙間からこちらを見ていた少女がビクツと身体を震わせると、おずおずと中に入る。

「…シキ。今のは…」

「ああ、しばらくこの人のところの団員とパーティ組むって話だよ。一週間くらい治療院の方は手伝えなくなるから爺さんにも伝えておかないと…」

「私も連れてってください。」

その発言にフィンとシキの動きが止まる。

「…君も冒険者なのかい？」

「はい。回復役ヒールラーをしています。レベルはまだ1ですが…」

まさか、彼以外にもこんなに若い冒険者がいたとは…！もし彼女も来てくれるなら、でもアミッドお前、この間魔法使マインドダウンって精神疲労で倒れたばかりじゃないか。無理する必要は…」

「大丈夫です。あれから毎日練習して、魔力の込め加減が調節出来るようになりました。…それに、シキが近くにいれば多分問題ありません。」

なんだその根拠のない自信は…ひよつとして、あの時手で隠してたスキルが関係しているのだろうか。

「いいんじゃないかい？回復役のメンバーが増えるなら僕も安心だ。戦いが得意じゃないなら、普段はサポーターとして素材や魔石の運搬をするという手もある。」

…確かに俺一人ではやれることに限界がある。万が一負傷でもした場合の対処方を考えていなかった。

「それに、あの子の友達が増えるならありがたい。やっぱり同性がいた方が気安く接せらるだろうしね。」

「それもそうか…。ん？同性って言った？ってことは女子かよ！」

聞いてないんだけど？！

慌ててフインの方を見る。

「あれ？言ってなかったっけ？そう、7歳の可愛い女の子だ。」

「…普通女の子の面倒を、知り会って2回目の男一人に頼まないだろ…。事前に知らないで会う羽目にならなくて良かった。」

戦闘狂の幼女をどう面倒見ろってんだ。軽い気持ちで引き受けるんじゃないかった。

「…依頼料追加だ。深層で珍しい薬草があったら採取してきてくれ。定価の7割の値段で買い取ってやる。」

「そのぐらいなら許容範囲だ。シキと…アミッドだったかな？2人とも、よろしく頼むよ。」

「ああ（わかりました）。」

「それじゃあ3日後にまた。そのうちこちらの主神も交えて話をしよう。」

「こちらこそ。ロキファミアアとはこれからも仲良くしてもらいたい。無事に遠征を終えることを祈ってる。今後素材を売りたい時には是非利用してくれ。」

「ありがとう。…そろそろ日が暮れそうだ。失礼するよ。」

そう言つて立ち上がると部屋を出て行く。

フィンがホームへ帰ると、部屋にアミッドと2人残される。

「でも急にどうしたんだ？ダンジョンと一緒に潜るなんて。何か爺さんに言われたか？」

「…知りません。」

「え？」

そつぽを向いてそんな言葉を口にする。

…なんか、ちよつと怒つてらつしやる？何故？

「…私に相談も無しに、他の女の子とダンジョンに行こうとするなんて…。」

「お、おいアミッドさん？」

何か言つてるが良く聞こえない。今日は一緒に作業する予定だったのに、急に出来なくなつて怒っているのかもしれない。

「…まあいいか。パーティー組む時、頼りにしてるぜ?」

そう言つて彼女の頭に手を乗せる。

今回の依頼、正直言つてあんまり役に立てる気がしない。女の子相手だったらアミツドが適任だろう。こつちはまず、コミュニケーションが取れるように努力しなければ… 思考を巡らせながらアミツドの様子を確認する。顔を俯かせたまま身動き一つしないので、徐々に不安になり始める。

「…ど、どうした?」

「…っシキの馬鹿!」

突然顔を上げて真つ赤な顔でそう言つと、そそくさと部屋を出て行く。

「…なんでさ。」

勢いよく閉められた扉を前にしばらく動けないでいると、扉が開いて別の人物(神物)が入つてくる。

「ようやく終わったかこのクソガキが。まったく勝手なことをしておつて。で?何の用だったんじゃ。」

「…ロキファミアのこの子供のお守りだよ。3日後から一週間、俺とアミツドでダンジョンに潜る。治療院は手伝えなくなるからそこんとこよろしく。」

「はあ!??何を勝手に!認めんぞそんなこと。第一なんじゃその頼みは!??ガキのお守

りなどに付き合う筋合いは……」

「今後のロキファミアリアとの友好関係の維持と深層の薬草を定価の7割で買い取る約束をした。」

「よくやったぞシキよ！」

……見事なまでの掌返しに溜息をつく。

「しかし、もう少しふっかけられたんじゃないかのう。せめて6割ぐらい……」

「友好関係の維持つつてんだろ！ふっかけすぎて印象悪くしてどうすんだ！」

「何い!!？俺は良かれと思って……」

「うるせえな、お前と一緒にすんなジジイ！俺の交渉のおかげでどれだけ利益得てると思ってたんだ！」

ヘファイストスや今回だけでなく、空いた時間で団長とやった他ファミアリアや商会などとの交渉でも、一見フェアに見えてこちらに利益の出る条件を飲ませることに成功している。

「やかましい！それについては認めるが、俺がするはずだった交渉に勝手に割り込んだことを忘れたとは言わせんぞ！」

「過去の商談の履歴見たぞ!!？あんたが足元見過ぎて失敗した商談がいくつあると思ってたんだ！団長がすげえ苦労してたぞ。ヘファイストスさんだって嫌がってたし、いい加

滅その考えを改めろ！」

目の前で喚くジジイに機嫌を損ねた幼馴染み、いまだ正体不明の戦闘狂幼女。
ーとりあえず今日はもう寝よう。

明日のことは明日考える。

その姿勢は決して悪いものじゃない。…そう信じている。

…絶賛機嫌損ね中の少女が、部屋で大声で騒いでいる2人に雷を落とすまであと少し。

幼女襲来

フィンとの約束から3日後、ダンジョンの入口前でアミッドと一緒にまだ見ぬ幼女を待っていた。

「…大丈夫ですか、シキ？」

「ああ…問題ない。」

あの日、散々喚く主神を言い負かしたところでアミッドの雷が落とされた。ますます機嫌を悪くした彼女の誕生日が翌日だったことを思い出し、朝一に外へ抜け出してプレゼントを購入。夜2人になったところでさりげなくプレゼントを渡し、謝ったところでようやく機嫌が直り、安心して寝て起きたのが昨日。今日からの探索のために色々と駆け回っていた結果、

「寝みい、腰痛え…。」

「やっぱり大丈夫じゃないですね…。」

3日間もあつた筈なのに瞬く間に過ぎていったが、戦闘狂のお目付役ともなれば色々準備せざるを得ない。昨日になって人生初めてのステータス更新もした。最悪引き

ずってでも連れて帰らねば、ロキファミアに消されかねない。少しでも戦力は上げておいた方がいいだろう。

「…へ？アイスストスさんにもロクに挨拶してなかったな。」

昨日の間に新しい素材を渡しに行つたのだが、あまりに疲れていたのですぐに帰ってしまった。お金の代わりにと短剣を手渡されたが。

「結局まだそのナイフを使ってるんですね。」

「壊れてもないのに使わないのはもつたいたいしないなあ。まあでもこれは投擲用にして、今日からはこっちの短剣に切り替えるよ。護衛とお目付役の仕事はしつかりしないといけないからな。」

フィン直々に頼まれた依頼だ。なんとしても成し遂げなければならぬ。

依頼とは別の話になるが、そろそろ魔眼を使わない戦闘に慣れていきたい。あの眼を使うと、戦闘ではなく、ただの線をなぞるといふ行為になってしまう。それでは駄目だ。今はステータスで勝っている分、一方的に攻撃することは出来るが、実力が拮抗する相手や格上の存在にはそうもいかない。敵に近づいて武器を振るうのは自分自身であり、線をなぞることが出来なければ意味はないのだ。

昔それで過信して、村の近くに現れたゴブリン達を倒そうとしたことがあったが、一般人の子供の身体能力ではナイフを当てることもできず、返り討ちにされて危うく死に

かけた。その一件でアミッドにそれはもう滅茶苦茶に怒られ、悔しくて鍛錬を始めたのはまた別の話。

「やあ、待ったかい？」

後ろから声をかけられ振り返る。振り返らなくてもわかるが反射的にだ。こんな爽やかな挨拶をしてくる奴は一人しか知らない。

「ああ、随分待ったよ。もう少しで帰るところだった。」

「おや？ここは、『今来たところだよ。』って返してくれるところじゃないのかい？」

「そんな彼女を待ってたイケメン男子みたいな言い方しねえよ。もし俺がそう答えたらどうすんだ。」

「うーん。素の君を知っている分流石に気持ち悪いかな？」

「だったら変な応答期待すんな。…それで？そこにいるのがアイズでいいのか？」

フィンの後ろに立っている金髪金眼の少女を見る。女神顔負けの美少女だが、なんかこう並んでると、

「あんたら兄妹みてえだな。」

背もそんなに変わらねえし、2人とも金髪で美男美女だ。

「口に出てるよシキ。ああ、この子がアイズ・ヴァレンシユタイン。これからは非仲良くしてくれ。」

「…誰？」

「おいおい、なかなかのご挨拶だな。俺はシキ。そのシヨタじじいと違ってお前と同じ子供だから、気軽に接してくれ。」

「シキ。喧嘩を売ってるなら遠征の後で買うから覚悟してね？」

「嫌だね。治療薬は売るが、喧嘩だけは売らないって決めてるんだ。代わりに薬草は俺が買い取ってやるよ。」

「…そつちは？」

「私はアミッド・テアサナーレです。シキと同じディアンケヒトファミリアに所属しています。よろしく願いますね、アイズさん。」

「…うん。」

「やっぱり同性で歳の近いアミッドの方が話しやすいのだろう。少し俯きながらもしっかりと返事をする。」

「早速仲良くなったようで何よりだ。そろそろ出発しないといけないから、後はよろしく頼むよ。それじゃあまたね。遠征から帰ってきたら宴に呼んであげるよ。」

「気が向いたらな。こつちは気にせず無事に帰ってこい。」

「はははっ！君こそ、アイズに何かあつたら唯じゃおかないからね。」

最後に物騒なことを言い残して去っていく。…やっぱり引き受けなきや良かったな。

「つておい、いきなり何処に行く?」

フィンがいなくなると同時に、アイズが歩き出す。

「?...ダンジョンじゃないの?」

首を傾げ、さも当然かのような顔をして聞いてくる。

こつ、こいつひよつとして天然か?天然で戦闘狂で美少女で両親謎とか、設定盛り沢山過ぎるだろ。思わず溜息をつくが、仕方ないと思つて欲しい。俺は眠いんだ。

「とりあえず、今まで何階層まで降りたことある?」

「...10階層。」

...なんだ今の間は。

「それは何回だ?」

「...2回。」

「そこで死にかけたとかは?」

気まずそうにそっぽを向いて黙る。

「よし。アミッドも5階層までしか行つてないし、今日は7階層付近の探索にしよう。」

「はい。魔石は私が持ちますから頑張ってください。」

「...むう。」

...若干一名不満そうだが、こつちはお前を安全にホームへ帰さないといけなんだ。

今日のところは様子を見させてほしい。

「…フィンにはなんて言われたんだ？」

「頼み事をしたら何でも聞いてくれるって言った。」

「あの野郎。…まあいいか。基本的に危なくならなければ手出しはしないが、無理をするような無理矢理連れて帰るぞ。それが依頼なんぞでな。」

「…わかった。」

…本当にわかってんのか？こいつ。

現在ダンジョン7階層。

迫ってくる大量の蟻たち（キラアアントって言った）に突っ込む少女を見て、溜息をつく。あいつ、やっぱりわかってないな。

様子を見る限り、武器はなかなかの業物だし、ちゃんと手入れもされている。大方フィン達に買って貰ったんだろう。

攻撃も的確で、殻と殻の僅かな隙間に目掛けて剣を振るう。一撃で倒せる技量は素晴らしいが、防御や回避が疎かすぎる。敵を倒すためなら、多少の傷は構わないといったところか。

全身傷だらけになりながら戻ってくるアイズに、アミッドが魔法で治療する。どうやら魔力調節は出来てるみたいだ。

「お疲れ。この数を1人で倒すなんてすごいな。：怪我さえしてなければ。」

「：：ポーションかければ治る。問題ない。」

そう言つて腰に下げたポーチからポーションを見せる。うちで作つてる一番安いポーションだ。大方フィンに持たせられたのだろう。いざという時の為に2人も一段階上のポーションを持っている。

「そのポーションは俺らが汗水流して作つてんだ。軽い気持ちで使われても困る。物にもよるが、結構高いんだぞ?」

「?…いくらぐらい?」

「さあな?今度フィンに教えてもらえよ。今日のを見た感じだと、今までの全代金合わせたらその武器ぐらいするんじゃないか?」

剣がどのくらいの値段をするのか不明だったため適当に答えると、その答えにアイズの顔が青ざめる。

「そ、そんなに?」

「さあどうだか。将来的には自分で買うようになるんだし、少しは怪我しないように気をつけるよ?致命傷を避けるという点ではいいかもしれないが、必要のない場面まで特

攻める必要はない。」

「…むう。…気を付ける。」

「それでよし。しばらく休め。それとほら、治療してくれたアミッドに言うことがあるんじゃないか？」

「…ありがとう。」

「いいえ、どういたしまして。」

殺伐としたダンジョンで穏やかな空気が漂うが、ダンジョンというのは空気を読んではくれないらしい。

「うわああああ!?? 助けてくれ!」

「だああああ!?? 畜生つ、ふざけんなつ!」

「クソツ、多過ぎる!」

奥の道から走ってくる冒険者達に目を向けると、その後ろに群がるキラアアントたちが姿を現す。

「キラアアントの大群! どこかのパーティーが打ち損じたようですね…!」

「ーツ!」

飛び出して行こうとするアイズの肩をシキが掴み、引き戻す。

「馬鹿、お前は休んでろって言っただろ。闇雲に戦っても得られるのはステータスだけ

だ。……ここは俺がやる。」

ーついでにこれがどの程度の物か調べておきたい。

ヘファイストスから昨日譲り受けた短剣を手に持つ。この剣の素材は俺が以前渡したウォーシャドローのレンズだ。透明感のある黒いこの武器はヘファイストス本人が打ったもので、ちよつとした特殊効果が付いているらしい。と言つても、それはヘファイストス本人の力であるため素材の影響ではない。

「使つた感想を言わないとな……。ついでだ、アイズ！ちゃんと見とけよ？」

「ー?」

逃げてきた冒険者達が横を通り過ぎ、前方にキラアアントが集まってくる。

「攻撃を避けるつてのはこうやるもんだ。」

避ける、逃げる、拘束から抜け出すの3つは、戦闘における重要なものだと思つている。前世であつたゲームでもそうだが、どんなに攻撃力が低くても、敵の攻撃を全て躲し、地道に反撃していけば必ず倒すことが出来るからだ。俺も村での鍛錬ではこれから練習した。敵との実力差があり過ぎると攻撃が通らないためどうしようもないが、ステータスで勝つてる相手など取るに足らない。

魔眼は使わない。先程アイズがやってみせたように、殻の隙間目掛けて短剣を振るう。ステータスで勝つてる以上、線をなぞらなくても倒せない道理はない。

目の前で繰り広げられる戦闘を見て、アイズは目を見開く。自分と年齢がそう変わらない筈なのに、少年が怪我をしている様子が全くない。次々と襲いかかるモンスターを難なく躲し、隙を見て短剣で斬り殺す。

躲し方はアイズと大差ない。少しだけシキの方が動き出すのが早いのだ。だがまるで、

「…攻撃が来る場所がわかってる？」

あらかじめ来る方向がわかっているとしか思えない。でもどうやって…

「人間でもモンスターでもさ、目ってというのが基本はあるだろう？」

「？」

突然のシキの言葉に顔を上げる。モンスターとの戦闘をしながら話を続ける。

「例えばアイズがモンスターを攻撃する時、斬ろうと思った場所に狙いを定めるために、そこを注視するだろう？それはモンスターの方だって同じさ。攻撃したい場所と見当違いな所を見てたりはしない。」

「…目線で攻撃の軌道を予測している、ということですか？」

「まああくまで補完情報としてだけど。モンスターも人間も多分、思考回路や身体の動かし方は殆ど変わらない筈だからな。アイズ、お前は視点をもっと広く持つといいよ。一点に集中するだけじゃ見えてこないこともある。」

似たようなことを、フィン達にも言われたことがある。その時はよくわからなかったが、シキが戦っているところを外から見ていることで、少しわかるような気がした。

最後の敵を倒し、戦闘を終えたシキが戻ってくる。

「…どうしてそんなに強くなれるの?」

「…別に俺自身は全然強くないさ。今はまだステータスに頼ってるだけだ。唯、強さっていうのは種類があるし、人によって違うものなんだと思うよ。」

「違う…?」

「純粋な戦闘力だけが強さじゃないってことだよ。アミッドみたいに、怪我をした人間を救う力だって、俺は強さの一つだと思う。…お前はどの強くなりたいんだ?」

「私は…」

「まあ、別に今すぐ見つけないといけなくともないし、ちよつと暇な時に考えてみたらいいんじゃないか?」

「…シキは見つけたの?」

「いいや?そこら辺に詳しいのはアミッドだ。俺は結局助言することしか出来ないよ。」
「そんなことありませんよ。シキは沢山のことを私に教えてくれています。…そんなところはあなたの強さだと思いますよ?」

「…そうか。さて、バックも一杯になったことだし、地上に帰るとするか。ホームまでは

送っていくから案内よろしくな。」

「…うん。」

まだ残るとごねるかと思つたが、意外にも素直にうなづいた。

フィンやリヴェリアが見たら絶句する程、アイズの聞き分けが格段に良くなりつつあることに、2人は気付いていなかった。

「ーシキー！あなた、手から血が出てますよー！」

「ん？ーあ、本当だ。」

痛覚耐性のせいでわからなかった。

…やっぱり怪我をしないというのは難しい。

神会

神が何故人間達が住む下界に降りてきたのか。永遠に等しい命を持つ神達にとって、天界での生活は退屈でしかない。全てが満たされ何でもある万能な暮らしに嫌気が差した神々は、下界へと娯楽を求めたのだ。

「まあ何が言いたいかというと、神というのは人と価値観が違う。率直に言つて頭のおかしい奴や変態が多い。」

そんな神達が3ヶ月に一度集まる神会に、珍しい老神が姿を見せていた。

「おや、久しいなディアン。お前が神会に来るなんて珍しいこともあるものだ。」

変態の多い男神の中でも少数派である、心優しい神と評判のミアハに声をかけられ、ディアンケヒトが顔をしかめる。

「やかましいわい。生意気なガキの二つ名を決めないといかんせいで、しょうがなく来ただけじゃ。」

普段ディアンケヒトが神会に出ることは基本ない。医療系ファミリアでは探索が殆どないため、ランクアップ者が少ないのだ。

「まったく、痛い二つ名が付かないようになんとかしてくれと頼まれなければ、今頃は

ホームで酒でも飲んでたんじゃが……」

「お前程のファミリアならどうかするのは容易いだろうに。子供達にもつと寄り添ってやるべきではないか？」

「ふんつ、あのガキにそこまで面倒見られるか！」

とは言ったものの、シキやアマッドはどうも大人びているため、面倒を見ることなど殆どない。アマッドに関しては、既にファミリア内での実権を握っているような気さえする。しかし、慌てた時などにはまだ子供らしい一面が見えることもある。問題はシキの方だ。どうにも子供らしい態度を見せない。寧ろ大人の余裕のようなものを感じる。

どうもあいつは神に近い感性を持つている気がする。他の冒険者達の二つ名を痛いと感じるらしい。まあ神々がそういう二つ名を意図的に選んで付けているため、その通りなのだが。

ここでは神達の近況報告や都市の情勢についてなどを話している。ことになっていくが、いざ覗いてみればぐちゃぐちゃと集まって騒いでいるだけだったりする。何も知らない人の子たちは、神達による厳かな会議が開かれていると思っているのだが。

都市の近況などを話し終えたところで、司会席に座っている朱色の髪をした貧乳女神。都市最大派閥のロキファミリアをまとめるロキが声を発する。

「それじゃあ闇派閥に関してはこれまで通り厳肅に対応するということであええな！…ほんじゃ次に進もうか。お待ちかねの命名式や！」

「「「ヒヤツホオオオオー!!?」」」」

「「「いよっ！待ってました！」」」

司会者の発言に神達が騒ぎ出す。ランクアップした冒険者達の格好いい（痛い）二つ名を決める時間である。

「じゃあまずはセトつちゆう神のこの子や。狼人族の男やな。」

「た、頼む！お手柔らかに…」

「「「断る!!?」」」」

「そ、そんなー！」

都市内で地位を持たないファミリアや、容姿含めて神達に好感を得られなかった場合、娯楽に飢えた奴らの餌食となる。

即ち、痛い二つ名を付けられる。

「それじゃあこいつの二つ名は、ダークネスバークインパルス【闇夜吠える衝動】で決まりや！」

「「「いてええええええええ!!?」」」」

「うわああああああ!!? 許してくれえええ!!?」

―狂つてる。

だから来たくなかつたんじゃ。それに、

「なんでよりもよつて司会者があいつなんじゃ…」

「今日眷属が遠征に行つたばかりで、暇らしいわよ。」

「何い？…：そういえばそんなこと言つとつたな。」

隣の席に座っている女神の声に思わず反応し、先日シキが言つてたことを思い出す。

あいつが受けた依頼が確か今日からだつた筈だ。

「久しぶりねディアン。シキには世話になつてるわよ。」

へファイストスが手を前で軽く振りながら声をかけてくる。

「まったくじゃ。あいつはちと異常じゃからな。この間も儂の知らないところで勝手に交渉を始めおつて。結果が良い分余計にタチが悪い。」

「あら、私以外のところでてもやつてたのね。それで？今日はシキの二つ名を決めに来たの？いつもなら来ないで他の神達に任せるのに。」

「あやつ、痛い二つ名を付けたら儂の財布の中身を全部孤児院に募金してやると脅してきたんじゃ。お陰でわざわざ来るはめになつたわ。」

「それは災難ね…。そろそろ回つてくるんじゃないかしら？」

へファイストスがそう言うと、丁度ロキがシキの名前が書いた紙を取り上げた時だつ

た。

「最後は…ディアンケヒトのこのシキって子供や。うほつ、なかなか格好いい子やな。…ただ、所用期間が空欄なのはなんでや?」

「そのまんまの意味じゃ。ステータス刻んだ時点でレベル2じやったから知らん。」

「はあ!? なんやそのデタラメは!?」

「フアツ!?」

「普通レベル1からだろ!」

「改造でもしたんじゃねえか!?」

「そうだそうだ! チートだそんなもん!」

ロキに続いて神達が騒ぎ立てる中、端つこの席に座っていた男神。羽付き帽子を被った旅神ヘルメスが口を挟む。

「まあまあ。聞けばその子、恩恵を刻む前にワイヴァーンを倒したらしいじゃないか。別に可笑しくないんじゃない?」

その言葉に喧騒が収まる中、ディアンケヒトがヘルメスを睨み付ける。

「…何故お前がそれを知ってる?」

「嫌だなく俺はヘルメスだぜ? オラリオ周辺で起きた出来事なんて当然押さえてるさ。」

「…ちつ、余計なことを言いおつて。」

呆気にとられていた神達も、話が途切れたのをきっかけに、再びざわつき始める。

「ーは？恩恵無しでワイヴァーン倒すとか化け物じゃん。」

「でもだとしたら納得だわ。」

「まだ10歳?!?とんでもねえな!」

「つてか文句無しの最短記録だろ。」

「この間噂になつてた、上層でモンスター殺しまくつてた奴つてこいつじゃねえか?」

「例のモンスター大量斬殺事件つてこいつのせいか!」

「そういうえばこいつ、今朝ロキんとこのアイズちゃんとダンジョンに潜つてくの見た

ぞ。」

「何いゝ?!?どういうこつちや!説明せい!」

「お前知らんのか?3日くらい前に「勇者」^{プレイヤー}がうちのホームに来て、シキとアミッドに面

倒を頼んでいったぞ?」

「あの子も連れて行くの?よかつたわね。」

「なんやそれ!うち聞いてへんで?!?」

「あら、ロキつたら信用されてないのね?」

へファイストスの発言に狼狽える。普段から飲酒に明け暮れている一面がある分、な

かなかに胸に刺さる。

「そつそそそ、そんなことないもん！ウチはみんなから信用されてるもんっ！」

「でも伝えられてないんでしよう？大事な子供の面倒を任されないうんて…残念ね。」

「う、うわくん！こうなったら帰つてきたアイズさんに一杯構つて貰うんやからなく！」

とどめを刺され、泣きながら出て行くロキ。

いなくなつたところで男神達が再びざわつき始める。

「―で？その一緒にいた女の子達はどんな子だつたんだよ？」

「ロキんとこのアイズちゃんともう一人、銀髪でお淑やかな娘がいたぜ。この男の子に

アミッドつて呼ばれてた！」

「何い〜!?その歳でハーレムを作り上げているというのか!?？」

「なんとこちらに、その瞬間をとらえた写真がございます！」

「―でかしたああ!!?」「―」

「うわあ、めつちや可愛いじゃん！この子もディアンケヒトの眷属なの？」

「将来絶対美人さんになるね！この子に会いたいがために怪我をする奴が来ると見た

！」

「はい、この子の二つ名は【聖女】で。」

「―決定!!?―」

「いや、まだランクアップしてねえぞ。」

「この後この子に会いに行かねえ？ちよつかい出すもよし。罵倒されるもよし。どんな子か直々に見定めに行くとしよう！」

「「よっしやああ!!？」」「」」

「やめとけやめとけ。下手にアミッドに手出すとシキに殺されるぞ。」

騒ぐ男神達にディアンケヒトの忠告が飛ぶ。

「殺すってそんな馬鹿な。」

「まあでも最悪天界に送還されるだけだし。」

「お前試しに送還されてこいよ。」

「嫌だよ、お前が行けよ。」

「本当に危なかったら神アルカナムの力使えばどうにかなるでしょ。」

「それどの道送還されるやつや。」

他の神達が笑い飛ばすが、ディアンケヒトのいつになく真剣な表情に周囲の神が訝り始める。

「いや、恐らくあいつに殺された神は送還されんじやろう。」

「…は？何言つとんねん。下界で死んだ神は天界に送還されるのが決まりやろ。」

いつの間にか戻ってきたロキが問いただしてくる。

「…詳しくは言えん。唯、あいつに殺された後にどうなるかは保証出来んという話じゃ。…恐らく、魂ごと消えてなくなるじやろうな。死にたくなかったら手を出すのはやめとけ。」

恐らくシキは、アミツドに手を出す者には容赦はしない。事実手を出そうとした冒険者が瀕死の状態で運ばれてきたこともある。(ギリギリでアミツドが止めたらしい)たとえそれが神だろうと、殺すと決めたなら躊躇いはしないだろう。

さらに気がかりなことは、先日のステータス更新でのスキルの能力の追加だ。シキは勝手に更新されるものと勘違いしていたので、昨日になって初めてステータスを更新した。その際羊皮紙に書き写したステータスを思い出す。

シキ

L V . 2

力 : I O ↓ H 1 7 8

耐久 : I O ↓ I 3 6

器用 : I O ↓ G 2 4 2

敏捷 : I O ↓ G 2 6 1

魔力 : I O

千里眼：H↓D

恐怖耐性：A↓EX

痛覚耐性：EX

《魔法》

《スキル》

【直死の魔眼】

- ・ ”死” を視覚情報として捉えることが可能
 - ・ ”死” の概念が無いもの、”死” を理解出来ないものは見ることが出来ない
 - ・ 格下であれば見ただけで殺すことも可能
 - ・ 威圧、魅了の相殺
 - ・ 発動時、器用と敏捷のステータス上昇
- 【霊核御手】
- ・ 常時発動可能
 - ・ 視界内の物体の掴み取りが可能
 - ・ 実体を持たないものでも可
 - ・ 投擲に対して高補正

アビリテイの数値自体は2週間程更新していなかった分、溜まっていた経験値が加算されただけなので特に問題はない。ただ、発展アビリテイの上昇具合とスキルの追加効果が気になるところだ。千里眼がHからいきなりDまで伸びている。加えて威圧、魅了の相殺。恐らく今後シキには神威が通じないだろう。威圧が通じなければ、力を封じられた神達に成すすべはない。

ディアンケヒトの発言を疑うような声もいくつか上がるが、最終的に今日一度会いに行くことに決めたらしい。話が落ち着いたところで命名に入る。

「髪の色とかは極東の子みたいだし、それっぽい感じの名前がいいな。」

「さっきのディアンケヒトの言葉通りにいくなら、ハデスブレイク「黄泉瓦解」とか?」

「こっわ、死後の魂を許さないのな?」

「医療派閥でその名前はやばいだろ。ハデスに怒られるぞ。」

「【神殺し】」

「いやいや、殺してないから。」

先程の忠告が尾を引いてるのか、それともシキの容姿が気に入られたのか、割りとは難な名前が飛び交う。駄目押しに、変な二つ名を付けたらポーションを売らないと脅せば、僅かにいたふざける神もいなくなった。真面目に考えだしたようなので、口出しせ

ずに放っておく。

しばらくして、ようやくまともそうな二つ名に決まったところで切り上げ、そこで解散となった。

帰ってきたシキになんとと言われるかわからんが、他の痛い例と比較させればどうにかなるだろう。【ロリコンバット幼女墮とし】なんかよりは遥かにマシの筈だ。

シキ Lv2

【ボイダーデモリッション境界切斷】

所属：ディアンケヒトファミリア

…やっぱり怒られた。

神々との邂逅

幼女護衛兼お目付役1日目。シキとアミッドにとって、彼女をホームに送り届けることが本日最後の仕事である。その内容には当然、外敵から彼女を守ることも含まれる。

アイズ達は冒険者であると同時に美男美女でもあるが、傍から見れば普通の子供が3人並んで楽しく歩いているようにしか見えない。よって、フィン達上級冒険者がいないことをいいことに、馬鹿な男神たちがちよっかいをかけてくることは容易く想像できる。

アイズにとつて、男神達などに声をかけられるのは別段珍しくはないが、今日はアイズだけではなかった。

「ねえ〜アイズちゃ〜ん。俺達と何処かに遊びに行かない？その友達も誘ってさ。」

「お？そっちが噂のシキくんだね？実際に見てみると、なかなか中性的な顔付きをしてるじゃないか。」

「これは…アリだな。」

「マジかよwww」

「お前そんな性癖持ち合わせてたのかwww」

男神4人組が3人を囲むようにして何やら騒いでいる。

「…うるせえな。アイズ、アミッド、行くぞ。」

「うん（はい）。」

特に反応することも無く、そのまま歩みを進める。

不審者に絡まれた時の対処法その一。とりあえず無視するだ。

「おいおい待ってくれよ。ちよつと話したいだけだからさあ。」

これをするの大抵、追いかけて再び絡んでくる。これが続けると、そのうち向こうが痺れを切らし手を出す。

「ダンジョン探索後くらい、楽しもうぜ？」

そう言つてアイズの肩に手をかけてこようとする男神の手を掴み、他の3人に向かつて放り投げる。さながらゴミ捨て場にゴミ袋を捨てるような感覚だ。昔それで通りがかりのおばさんに何故か怒られたが。

「ふっ！」

「おわああ!?」

ドンツという音とともに4人揃つて倒れる。

「これも依頼なんぞな。行くぞ2人共。」

立ち去ろうとするが、即座に起き上がった男神に呼び止められる。…慣れてるのか？

「ちよつと待てい！話くらい聞かせてくれたっていいだろう!?」

「君達みたいな若い冒険者がどんなことしてるのか気になるんだよ。」

「そうだつ！ワイヴァーンを倒した時の話、聞かせてくれよ！」

「!?」

男神の何気ない一言にアミツドの身体が強張る。家族と村の皆を殺した竜の姿を思い出し、顔を悲痛の表情に歪める。

アイズの方も、レベル3相当のモンスターを倒したという男神の発言に目を見開く。

「…何故それを知っている?」

少年の発したものは思えない程低い声に、男神達は恐怖を抱いた。いや、正確には声ではない。こちらに向けられた蒼眼を目にした途端、身体が硬直する。

「い、いやあ、俺達は君がレベル2になったきつかけを聞いたただだよ。詳しくは知らないから是非教えてもらおうと思つて…」

「黙れ。」

「つーシキ…。」

アミツドの肩を抱き寄せ、男神達を睨みつける。本当は今すぐにでも、視界に映る男神達の死の線を腰の短剣で斬り飛ばしてやりたかった。腕の中に感じる少女の鼓動を

意識してなんとか抑える。

「で、でも凄いことじゃないか！冒険者でもない一般人の身でレベル3相当のモンスターを倒すなんて！」

「そうだ！君なら英雄になるのも夢じゃない……」

背後に刺さったナイフの音に声が途切れる。男神が頭部に違和感を感じ、手を頭に当てると、さつきまでであった筈のサラサラしたものが無くなり、頭皮の感触のみが伝わってくる。

「お、俺の髪がああああ……？」

驚愕に声を上げる中、少年が少女を抱き寄せたまま横を通り過ぎてナイフを拾う。

「それで頭でも冷やせ。……次は容赦しない。」

声を荒げることなく淡々とした口調で言い残し、その場を去る。目の前で起こった出来事に呆けていたアイズだったが、我に還ると男神達には目もくれず、2人を追いかける。

男神達はようやくディアンケヒトの忠告を理解した。自分達は彼の逆鱗に触れたのだ。近くにいた人々も男神も、少年達が立ち去るまで動くことが出来なかった。

「…シキは、どうして冒険者になったの？」

長らく無言が続いたが、神達から離れてしばらく経ち、アイズが言葉を発した。

先程のこともあり、聞くことは躊躇われた。だが、その眼はあくまで真剣なものであり、自身が強くなるために何が必要なのかを知りたいという気に満ちていた。

「…何か食うか？奢るぞ。」

「…うん。」

「アミッドはどうする？」

「…私もお願いします。」

傍にあつた屋台で串焼きのような物を3本買い、近くの石段へ並んで腰を下ろす。

「…美味しい。」

「…ええ、本当に。」

感想を零し、食べ切ったところで沈黙が訪れる。日が暮れ始めた頃、シキが口を開いた。

「…2週間程前の話だ。とある村が一体のモンスターによつて襲撃された。離れた場所にいた子供2人以外の全ての住人が殺戮の対象となり、瞬く間に殺された。」

「!!？」

少年の発言にアイズが目を見開く。彼等もまた、彼女と同じく奪われた身なのだ。

遠くを見るような目で話を続ける。

「唯一生き残り、身寄りを失った2人の子供は、運ばれた都市の医療派閥にて一命を取り留めた後、団員として今暮らしている…。とまあ、俺達についてはこんなところだ。…これでいいか？」

「…そのモンスターを、倒したの？」

「…ああ。」

「…シキは凄いな。」

彼は、村の仲間の仇を取ったのだ。自分は見ていることしか出来なかったのに。

「…凄くなんかない。アレは純粹な俺の力じゃないしな。それに…」

あの時、村の仲間が殺戮のかぎりを受けたというのに、微塵も悲しみが湧いてこなかった。

確かに、村の仲間が殺されたことへの怒りと、救えなかったことへの悔しさはあった。しかし、仲間の死に悲しみの涙を流すことも、喪失感に襲われることも無かった。

あの時も、隣にいた少女の悲痛な顔を見て咄嗟に動いたに過ぎない。彼女の大事な者を奪ったものに対する怒りが沸いただけだった。

「…それに？」

「…いや、何でもない。…アミッドも気にするな。アレは俺が自分の意思でやったこと

だ。お前が気に病む必要はない。」

「…はい。ごめんなさいシキ。」

「別に気にしてないさ。…さて、そのアンタも満足しただろう。これ以上用がないなら帰ってくれないか？」

「!?？」

「…あら、気付いてたのね?もう少し話を聞いていたかったのだけれど。」

突如として背後の路地から現れた銀髪の美しい女に、2人の少女が驚き振り向く。

「存在感丸出しで立つてたくせによく言うぜ。見ず知らずの相手に話すような内容は、生憎持ち合わせてなくてな。こんな物騒な世の中だ。都市最大派閥の女神様が、こんな時間に出歩いてていいものかね?」

「ひよっとして心配してくれてるのかしら?でも問題ないわよ。この辺りの子ども達は今、私に夢中だから。」

恋する乙女のような瞳を見て、少年が溜息をつく。

「魅了ね…。俺の嫌いな能力の一つだなあ。」

眼を蒼く変化させ、目の前の女神の目を見る。途端に辺りに漂っていた甘い空気が消え去り、女の身体がよろめく。

「つ!??...成る程、ディアンケヒトが言ってたのはこういうことね...自分の全てをさら

け出してゐるみたい。一体何をしたのかしら?」

「さあ? 教えてやる義理はないな。…此処の2人に用があるなら俺が聞くけど?」

後ろを庇うようにして立つシキに、女神が首を振る。

「いいえ、用があるのは貴方よ。唯の剣には興味ないもの。…今夜、私に夢を見せてくれないかしら?」

少年の頬に手を伸ばそうとするが、手の甲で振り払われる。

「夢が見たければ帰って寝れば? あんたの眷属に子守唄でも歌ってもらえよ。」

「あら、振られちゃったわね。…一つ聞いていいかしら? どうして魅了が嫌いななの?」
「別に? 相手を惑わしてまでマウント取ろうとする女が嫌いなだけだ。」

「…そう、残念。…そろそろ帰るわ。貴方に魅了も解かれちゃったし、いい物も見れたから。」

そう言い残し、路地裏へと姿を消す。

その頃には辺りは暗くなり、魔石灯の下を通る人が増え始めていた。

「アイズたくん! お帰りいいいい!」

案内されるままに、アイズを巨大な建物の前まで連れていったところで、向こうから突っ込んでくる朱髪の変態が目に入った。

少女達の肩を掴んで横にずらし、走ってくる人（神？）物の足を引っかける。

「へぶあぁっ?」

見事に石畳に顔を突っ込んだところで、一応アイズに確認をとる。

「…知り合いか?」

「…うん。」

「ちよつとおおアイズたん? 何で今一瞬考えたん? ウチ主神やで?」

早々に復活したのか、起き上がってギャーギャー喚き出す変態に向かってナイフを突きつける。

「ロキファミリアの主神は女神の筈だ。お前のような変態男神とは聞いていない。…誰だお前は? 返答によっては容赦しない。」

先程のように二度と髪が生えてこないようにするか? いや、神々は酒が好きだったな。肝臓の解毒機能を殺してアルコールを分解出来ないようにしてやってもいいかもしれない。

「お、男? ……そんな、からかわれることはあっても、間違われるなんてなかったのに… ショックや…。」

うなだれる朱髪の男(?)を前に、隣でアミッドが耳打ちする。

「…シキ、今前にいるのが女神ロキではないかと。」

「…アイズ?」

真偽を確かめるためにそちらを向くと、気まずそうに顔を逸らす。シキの対応が迅速なあまり、言い出すのが遅れたのだろう。

「そうか…。今まで会った女神はどれも落ち着きのある神物だったからわからなかった。」

「馬鹿にしとるんか!?!?」

「あとその喋り方、知ってる有名な人思い出すからやめてくれない?なんか聞いててイラツとする。…あとウザい。」

「初対面で怒涛の罵倒!?!?リヴェリアでもそんなにきつくないのに!」

かの有名なロキファミリアのホームの前で騒いでいる2人に、周囲から好奇の視線を向けられる。

「ロキ、うるさい。」

「シキ、ほどほどにしてください。」

2人の少女に注意され、ようやくロキが落ち着き始める。

「シキ…ってことはジブンが【境界切^{ポーターメモリッシュン}断】か…。フィンが面倒頼んだらしいし信頼でき

るんやろうけど、第一印象は最悪や。」

「それはこつちのセリ…今なんて言った？」

なんかとんでもない厨二な単語が聞こえたんだが。

…嫌な予感がする。

「…ぼーだー、でもりつしよん？」

首を傾げ、舌足らずな声でアイズが復唱する。アミッドは何かを悟ったように、シキの方を見る。

「まだ見てないんか？今日神会で決まったジブンの二つ名や！どうや？かつちよいいやろ？」

「…あのジジイ、後でしばらく。」

やめてくれアミッド、そんな哀れみの目でこつちを見ないでくれ。

…今は考えるのはやめよう。

「じゃあアイズ、ホームでくらいしつかり休めよ？その変態は相手すると疲れるから無視していい。」

とりあえず明日以降の予定についてアイズに話しておくことにする。向こうの主神もいるし丁度いい。

ちなみにディアンケヒトの財布は孤児院行き決定だ。

「明日以降のダンジョン探索も同行する予定だ。俺はレベル2だし回復役ヒールもいるから問題はなだらうが、負傷した時は必ず報告するように。」

「…明日はどこまで潜るの?」

「そこはお前次第だな。俺が大丈夫だと判断したら、10階層以降まで連れていつてもいい。」

その言葉に少女が目を見開く。心なしかその瞳は燃えているようにもみえる。

「頑張る…!」

「…いいのですか?勝手にそんなことを。」

「問題ない。今日見ただけでも、充分そこまで行く実力はある。」

心配そうに覗き込むアミッドにそう応え、アイズの方に向き直る。

「焦るなよ?アイズ。夢は大きくてもいいが、目標は小さく持て。」

「?」

「一つ達成したら次へ、それも達成したらまた次へ。そうやって、適宜何を出来るようにするかを決めるんだ。いずれ全ての目標を達成した時、夢に大きく近づく。」

目の前の少年の言葉に何かを思案するようなアイズを見て、ロキは内心驚いていた。

あのフィンやリヴェリアが何を言っても響かなかった少女が、少しずつ変わり始めている。

「フインの人を見る目は確かだったみたいやな。

「じゃあまた明日の朝だな。ここまで迎えはいるか？」

「平気。」

首を左右に振ると、少し言いづらそうにしながらこちらを見て、

「…ありがとう。」

とだけ言うと、ホームの中へと入っていく。

「待つてやアイズた〜ん！」

追いかけるようにしてロキが中に入っていくが、すぐさま「へぶつ」という声と一緒に外へと吹き飛ばされてきた。

「…帰るか。」

「はい。」

後ろに振り返り、元来た道に戻るようにして歩く。辺りは既に暗く、ダンジョン探索を終えた冒険者達の人影が多くみえる。

「…シキ。」

「ん？」

しばらく進んだところで、アミッドの声に足を止める。

「…私は、シキの役に立てていますか？」

俯いた少女の口から、そんな言葉が漏れる。

今日のダンジョン探索、一度も戦闘することなく、ずっとシキに守られっぱなしだった。

『足を引つ張っているのではないか。』そう思うのも仕方ないことだった。

「：別に、俺の役に立とうとする必要はないんだぞ。一番やりたいことをしているお前を見るのが、俺は何より嬉しいよ。」

少女の頭に手を置き、やはり少年はそんなことを口にする。いつだって彼は自分には優しく接してくれる。

そして思い出したかのように「ああそうだ。」と言うと、

「治療ありがとうな。助かったよ。」

怪我をした手をヒラヒラと振り、再び歩き始める。

「ーはい。どういたしまして。」

暗くなった街の中でも自覚出来る程に頬を赤く染め、少年の横に並んで歩く。

同い年の幼馴染みでありながらもどこか兄妹のような関係性に、二人とも居心地の良さを感じていた。

「ぬおおおおお!? 儂の金がああああ!?」

その夜、治療院内で老神の叫び声が響き渡った。

ダイダロス通りの一角にある孤児院に多額の寄付金が届いたことは、また別の話。

小竜

新中。
 アイズの面倒を見るようになって7日目。恩恵を貰ってから2度目のステータス更新中。

背後から聞こえてくる唸り声に振り返り、羊皮紙に書き写された内容を確認する。

シキ

LV. 2

力 : H 1 7 8 ↓ G 2 4 5

耐久 : I 3 6 ↓ I 7 9

器用 : G 2 4 2 ↓ E 4 1 3

敏捷 : G 2 6 1 ↓ F 3 5 3

魔力 : I 0

千里眼 : D ↓ C

恐怖耐性 : E X

痛覚耐性 : E X

《魔法》

《スキル》

【直死の魔眼】

・ ”死” を視覚情報として捉えることが可能

(対象が死を意識している程に効果上昇)

・ ”死” の概念が無いもの、”死” を理解出来ないものは見ることが出来ない

・ 格下であれば見ただけで殺すことも可能

・ 威圧、魅了の相殺

・ 発動時、器用と敏捷のステータス上昇

【霊核御手】

・ 常時発動可能

・ 視界内の物体の掴み取りが可能

・ 実体を持たないものでも可

・ 投擲に対して高補正

「ーふむ。」

「…お前、何をしてきた？」

「…何だよ急に。」

「ステータスの上昇具合を見れば疑問に思うのも当然じゃ。一体何をしてきたらこんなに急に上がるんじや?」

目を閉じ、あくまで平静な態度でデイアンケヒトが聞いてくるが、その頬が若干引きつっている。

「…別に、アイズたちの技術も上がってきたし、中層手前まで降りただけだよ。ちよつと攻撃も喰らったけど、大したことないしアミッドの魔法で回復もしたから問題ない。」

「全然大したことなくないわ!それに中層手前だけでこんなに伸びるわけがないじやろう!もつと下まで降りたな!?あと、アミッドへの攻撃を全て排除するのはやめろ!お陰であいつの耐久値お前よりも低いんじやぞ!」

「うるさつ!朝つばらからでさえ声出すんじやねえよ。」

デイアンケヒトの声に驚いた鳥が飛び立っていくのが窓から見える。その窓から昇ってきたばかりの太陽の光が差し込む。

あれから毎日、一日中ダンジョンに潜っているために帰ってくるのが遅くなり、こんな時間に更新する羽目になってしまった。

「…まあ、生きているなら別に構わん。予定だと今日辺りに、ロキファミアの連中が帰還するんじやろ?とつと依頼達成の報告でもしてこい。」

「言われずともわかってるよ。深層の葉草も破格の値段で手に入るし、俺の治療費の返済も近いな。」

ステータス更新のために脱いでいたコートを羽織り、背中に新たな武器を背負いながら立ち上がる。

「…お前、その武器使いにくくないか？」

思わずといった風にディアンケヒトが尋ねる。それも仕方がない。少年の背中には、明らかに身長よりも長い刀が背負われているのだ。下を見ると僅かに地面に引きずっている。

「アイズを見ててリーチが長い武器が欲しくなっただけ。素材と引き換えに昨日へフアイストさんから売れ残りを貰ってきたんだ。軽く振ってみただけ、意外にいいぞ？」

感覚的には剣道に似た感じだ。恩恵で器用度が上がっているせいかな、想像以上に自由に扱えた。

敵と密接することなく戦える為、回避にも余裕が出来るだろう。何より一撃の威力が違う。怪我の頻度も減る筈だ。

「シキ、用意終わりました。」

そんなことを考えていると、準備ができたアミッドが扉から顔を出す。

「ああ。じゃあ、行ってくる。」

ディアンケヒトに声をかけ、アミッドと一緒にホームを出る。まだ陽も昇ったばかりで人通りも少ないが、広場まで行くと既にアイズが待っているところだった。

「…遅い。」

「お前が早いんだよ。…まあ、律儀に待っていたことは褒めてやる。」

文句は言ってきたものの、2人が来るまで勝手に突入せずに待っていたことを考えると、初日と比べてかなりの進歩だろう。

ダンジョンへ入りながらアイズが質問してくる。

「今日は何処まで行くの？」

「昨日は13階層まで降りたからな…。今日もそこまで降りて、余裕そうなら考える。ってところだな。」

その返答に少女が顔を綻ばせる。

アイズにとって、戦闘に対してうるさく口出しせず、下の階層まで連れて行ってくれるシキという少年はとても好感の持てる存在であった。またアミッドの方も、アイズの怪我を見てくれるほか、歳が近く話し相手にもなる姉のような存在だった。

何より、2人と潜るようになってからステータスの伸びは勿論、戦闘における技術、探索に必要な知識についても学ぶことができた。

今日の戦闘も、主にアイズが前に出てモンスターを殲滅し、討ちそびれたものをシキ

が倒すといった形だ。唯一違うのは、シキの武器が長い刀になっていて、間合いが出来た分動きに余裕が生まれたらしい。普段なら僅かにする怪我もない。アミツドも時折ナイフを使って自衛をしながら、倒されたモンスターを回収している。そんなこんなで順調に探索を進め、現在ダンジョン12階層。中層手前ということもあり、浅い層に比べて多くのモンスターが出現するのだが、フロアの中には冒険者はおろか、モンスターの気配が無い。

「……やけに静かだな。」

まるで、猛獣が近づいて来た時の森みたい……などと考えたのが悪かったのか。奥の壁に大きく亀裂が入ったと思うと、巨大までとはいかないが、人より充分大きいモンスターが生まれ落ちる。

「竜？……あいつよりは小さいな。」

脳裏にかつて自分が斬り殺した翼竜を思い浮かべ、目の前の敵と比較する。アミツドもそれを思い出していたのだろう。僅かに顔を強張らせるが、冷静に相手を分析する。

「あれは……小竜インファントドラゴンですね。滅多に現れないレアモンスターで、実質上層の階層主のような存在であると聞きます。」

「成る程ね……。通りで他のモンスターがいないわけだ。」

幸いまだ距離はある。逃げようと思えば逃げられるのだが、生憎こちらには戦闘狂幼

女様がいらつしやる。

「…シキ。」

「…つたく、危なくなつたら無理矢理にでも止めるぞ。というか俺もやる。」

止められると思つたのだろう。アイズが目を見開き少年を見上げる。

「流石に1人でやるのは許可出来ないが…滅多に無い機会だ。ここで見逃すのは惜しい。負傷したらすぐ撤退する。これが条件だ。」

「…わかつた。」

強敵に挑む事を許容してくれる。その事実喜びを覚えるが、即座に顔を引き締める。

こちらの敵意に気付いたのか、小竜が大きな足音をたてながら近づいてくる。

「アミッド。念の為魔法の詠唱をしておいてくれ。」

「わかりました。」

「俺がサポートに入る。アイズ、先陣は任せた。…ああそれと、」

「？」

「あれ、使つていいぞ。」

「！うん。…【目覚めよ】^{テンベスト}！！？」

アイズがそう叫んだ途端、周囲に強い風が巻き起こる。通常ダンジョン内である筈の

ない強烈な空気の流れに、小竜が一瞬歩みを止める。

その隙を少女は見逃さなかった。己の身体に付与された風の出力により、敵の予想を上回る速度で肉薄する。

迫りくる攻撃を身体を捻ってなんとか直撃を避けるも、剣に纏った風が容赦なく体表を切り裂く。

「グオオオオオオ!?」

「っ！浅い。」

鮮血が舞う中、先に体制を立て直した小竜が、前脚の爪を少女に向かって突き立てる。否、しようとした。

振り下ろした前脚が少女に触れる寸前、突如横から現れた少年の長刀が、突き出した前脚を見事な切断面を残して斬り飛ばす。

「?グオオオオ!?」

「やっぱり図体でかい奴が相手だと使いやすいな。斬りやすい。」

何が起きたのかわからないと言うように悲鳴を上げる敵を一瞥し、すぐさまその場から離脱する。

片足を失い大きくバランスを崩す小竜に、自身を獰猛な嵐へと変えた少女の剣が迫る。

「グオオオオオオオオオオ!!?」

エアリアル
「風よ!!?」

風砕。

竜の顔面に叩き込まれた巨大な竜巻が、上顎ごと口内を粉碎する。

行き場を失ったエネルギーが、周囲の壁に大小様々な亀裂を入れる。

戦闘を終え、剣を背中の鞘へと戻して魔法を解く。

「…勝つ、た…。」

無意識のうちに止めていた呼吸により、肺に溜まった空気を吐き出す。小竜が灰になることを確認して、改めて自身の勝利を実感する。

「お疲れ。大分魔法の扱いにも慣れたんじゃないか?」

同じように刀を背中の鞘へと戻し、声をかけてくる少年に首を振る。

「ううん。…まだお母さんみたいにはいかない。」

「そうか。…ま、とりあえず今後の課題としては、戦闘中に呼吸を止めないようにすることだな。」

「うっ、…気を付ける。」

「慣れるまでは仕方ないさ。俺も時々やるからな。」

そんな軽口を叩きながら、一緒にアミッドの元まで戻る。あまりに早く決着が着くも

のだから、少し呆然としてはいたが、共に勝利の喜びを分かち合う。

丁度壁に亀裂が入り、モンスターが産まれないようになった為、昼食がてら休息をとる。

ダンジョンに潜る前に買ったパンを食べながら、千里眼で周囲の警戒を行う。熟練度が低い段階では眼に多少の負荷がかかったが、Cになったことで範囲も広がり、長時間の使用が可能になった。

「それにしても変だな。もう遠征から帰っててもおかしくないんだが…。」

少し妙だ。気になり、ギルドで貰った地図を見ながら、千里眼で下の階層の様子を確認していく。18階層まで視たところで、多くの人の集団がいるのを発見する。その中にはフィンの姿もあるが、どうやら様子がおかしい。

もう少し先までいくと、団員であろう者が何人か寝かされているのが見える。毒でも受けたか、全員顔色が悪い。どうやら治療する手段が無く、どうするか判断に迷っているようだ。

「あー成る程ね。…2人とも、ちよつと遠出するけど…いいい？」

少女達が揃って首を傾げる。

「多分今日中には帰れないから、よろしく。」

2人の服を掴んで立ち上がらせると、腰から短剣を抜き、横へと振るつた。

18階層

「…えーっと、これはどういう状況なのかな？シキ。」

地面に這いつくばった状態から、自身の背中に乗っている3人の子供達に、金髪の青年、フィン・ディムナが問いかける。

会うのはおよそ1週間ぶり。通常なら再会に喜ぶ場面だが、場所が場所だ。ここは18階層。断じてレベル2一人、レベル1二人のパーティでくるような所じゃない。

遠征の帰りに26階層で毒妖蛆ポイズンウエルミスの大群に出くわし、団員の何人かが毒を受けてしまった。解毒薬、治療薬の調達のため、単身地上に戻るか迷っていたところ、気配も無しに背後から襲われ(?)この様である。

「1度目偶然2度奇跡、3度目必然4運命。…そう、これは運命だフィン。」

「うん、どうやって現れたのかは聞かないでよくよ。とりあえず可及的速やかにどいて欲しいな。それと、僕の運命の相手は是非小人族バルツムでお願いしたいね。」

シキの言葉をさらりと流し、自分の背から降りるよう要求する。いくらレベル差があるとはいえ、無防備な状態で武装した人間に背中を取られているのは、なかなか許容し難い。

「いや、これは仕方がないことだ。距離が遠かったから、フィンそのものを座標にするしかなかったんだよ。それに、あんたなら怪我することもないだろう?」

「聞きたいことが増えたうえに、僕の扱いについても話したいことが出来たけど…救援に来てくれたってことでいいのかな?」

3人とも背中から降り、重荷が無くなったフィンが立ち上がる。少女2人はまだ状況を把握出来ていないのか、周囲をキョロキョロ見回している。

「シキ。シキは…?」

「18階層だ。悪いな、何も言わずに連れてきちまつて。」

シキの返答にアミッドが目を見開く。一体何をどうすれば、12階層からここまで一瞬で移動できると言うのか。

「やあアイズ。元氣そうで何よりだ。…また背が伸びたかい?」

「え…フィン…?」

突然知らない場所に連れてこられ、いる筈のない人物が目の前に現れた状況に、少女が目に見えて混乱し始める。

「フィン、怪我人の容態は?」

「どうして君がそれを知っているのか気になるところだけどね…こつちだ。」

少し先に向かうと、10人近くの団員が並んで倒れている。耐異常のない下級冒険者

なのか、顔色が酷く悪い。毒は受けていないが、傷がかなり深い者もいる。

「遅かったなフィン……ん？……アイズ!??何故ここに!」

「リヴェリアまで……」

容態を見ていたのだろう。しゃがんだ状態からこちらを振り向いた緑髪のエルフが、背後のアイズを見て声をあげる。

「えっと……リヴェリアさんだっけ?説明は後でするから、とりあえず状況を説明してくれ。」

「何?……お前は……」

以前上層で会った少年の姿に、フィンが少女の面倒を頼んでいったことを思い出す。何故ここにいるのかは不明だが、とりあえずフィンと一緒にいることは納得する。

「深層でポーシヨンの多くが破損してしまっただね。回復魔法が使える者でどうにかして保っている状態だ。」

「成る程……。アミッド、やれるか?」

代わりに答えたフィンの説明を聞き、後ろの銀髪の少女に問いかける。子供とはいえ、治療師の端くれ。寝かされた者達を見て瞬時に状況を把握したのか、表情を引き締めて思案する。

「ここにいる全員となると……解毒までは難しいかもしれません。」

「わかった、毒の方は俺がやる。そっちは回復に集中しろ。」

「はい。」

病人を前にして、2人の顔つきが変わる。

たった今からシキ、アミッド・テアサナーレは、冒険者から治療師へと己を変える。

「怪我が酷い者からこちらに集めて下さい！毒を受けている者達は一箇所にまとめて！」

「は、はい！」

銀髪の少女が背負っていた荷物を下ろし、容態を見ていたロキファミリアの団員へ指示を出す。まだ子供ながら、凜とした通る声に反射的に反応し、少女の周囲に怪我人を運んでくる。

「彼女は？」

「ディアンケヒトファミリアの新人だよ。回復魔法が使えるそうだ。」

初めて見る少女に疑問を持ったリヴェリアに、フィンが答える。

「…うん。いつも治療してくれた。」

「そうか…後で礼を言わなければ。」

アイズの言葉に僅かに顔をしかめる。この猪突猛進幼女の面倒など、とんでもない苦労をかけたに違いない。

「うう……う、腕が……痛いっす……。」

「ラウル！しつかりして！」

一番怪我が酷いであろう、ラウルと呼ばれた少年の腕に巻かれた包帯には既に大量の血が染み込んでおり、身体の至る箇所に毒の症状が浮き出ている。猫人族の少女が声をかけるも、苦しげな声を漏らす。

「君、どいてくれ。」

「何を……っ！！？」

少女が振り向くと、背後に立つシキの蒼眼を見て息を詰まらせる。黒髪の少年から溢れ出る強烈な殺気に、全身の毛を逆立てる。

「……ら、ラウルに、何する、つもり……？」

「何って解毒だ。すぐに済む。」

そう言うのと懐からピックのような物を取り出し、何かを探すように全身を観察する。視線が脚部のある一点で止まると、少女が声をあげる間もなくピックを振り下ろす。

「なっ！！？」

後ろで見ていたフィン達3人も、突然の奇行に流石に驚愕する。リヴェリアが止めに入ろうと足を踏み出したところで、異変に気付く。

「血が出ていない……どういふことだ？」

心なしか、ラウルの表情が先程よりも穏やかに見える。シキがピックを抜き、何かを払うようにして振るうと、全身に浮き出していた症状が消えた。

「な、何が…。」

「毒は殺したが、まだ残滓は残っている。帰ってしばらくは安静にしてろ。」

そう言い残し、別の患者の元へと去る。先程と同様の手順で次々に解毒を行い、最後の1人が終わったところでアミッドに声をかける。

「よし、いざアミッド。」

「はい。…【ディア・フラーテル】！」

少女を中心に魔法陣が浮かび上がると、光が傷口へと集まり修復を始める。傷口が一瞬光ると、次の瞬間には傷跡も残さず完治していた。

「この人数を一度に…なんて魔法だ…！」

「これは…流石に驚くしかないね。」

「…やっぱり綺麗。」

リヴェリア、フィン。2人の上級冒険者が、目の前の少女の魔法に戦慄する。これほどまでの回復魔法使いは今まで見たことがない。まず間違いなく、彼女はオラリオ最高の治療師になるだろう。

それにシキの方だ。見たところ詠唱をしていた様子はないし、治療薬を使った訳でも

ない。十中八九スキルだろうが、全くもって検討がつかない。

「ディアンケヒトファミリアの期待の星達か……。うちのファミリアに来なかったのが惜しいね。」

これはますます友好関係を維持していききたいものだ。シキに関しては特に謎が多いが、無理に聞く必要もないだろう。ここで反感を買うのは悪手だ。

「ふう……あ……」

「おっと。……お疲れ、アミッド。」

広範囲での使用の反動か、倒れそうになるアミッドを横からシキが支える。初めての生命がかかった治療だ。緊張もしただろう。

「ありがとう2人とも。君達がいなければ、ラウルはかなり危険な状態だったかもしれない。改めて礼を言わせてもらおう。」

「ああ。それと、アイズを面倒見てくれたこと、感謝する。」

フィン、リヴェリアがこちらに向かって頭を下げてくる。

「見ちまったからには放つてはおけないからな。構わないよ。治療費は……そうだな。俺達のステータスは詮索しないことと、アミッドの魔法については他言無用つてことだ。」

「凄く気になりはするけどね……もとより他人のステータスの詮索は禁忌だ。問題ない。彼女の魔法に関しては何故だい？」

「今のを見ても分かると思うが、まだ魔力量が心許ない。それにこんな世の中だ。広まれば騒ぎに巻き込まれかねない。」

まだレベル1だ。悪意を持った連中に狙われれば、危険に晒されることになる。

「成る程…わかった。団員達には釘を刺しておく。それと、今回とは別にまた改めて礼がしたい。地上に戻ったら宴を開く予定だ。是非顔を出してくれ。この子も喜ぶ。これまで面倒をかけてすまなかった。」

隣に立つアイズの頭を手で掴み、再び頭を下げるエルフに、流石に2人も苦笑する。

「いえ、私もアイズさんと一緒にいるのは楽しかったですから。また是非申し付けて下さい。」

「…うん、ありがとう。」

一緒になって頭を下げているアイズの手を取るアミッドに、自然とアイズも顔を綻ばせる。

リヴェリアがその様子を見て目を見開き、何度目かわからない礼を口にする。

「この子がこんな風に笑うなんて…。本当に、感謝する。」

「礼ならアミッドに言ってお下さい。それじゃあ、これからもディアンケヒトファミリアを…鼻屑に…。…さて、なんとか今日中に帰れそうだな…アイズも一緒に戻るか?」

「うん。」

少年の言葉に頷き、少女達が手を取ったままシキの元へと近づく。

「今から帰るだつて？もう地上じゃあ日が暮れる頃だろう？手狭だが僕らの天幕で……」

「問題ない。すぐに着く。じゃあなフィン。宴樂しみにしてるぜ？帰りが遅れることは伝えといてやるよ。」

そう言うのと、少女達にコートの裾を掴ませた後に短剣を振るう。

途端に3人の姿は消え、後には何も残っていなかった。

「……やっぱリスキルについて聞いておくんだったかな……？」

「……データラメにも程がある……。」

その夜口キファミリアの天幕では、突然現れ病人を治療し、忽然と姿を消した子供達の話が後を絶たなかった。

一方ディアンケヒトフアミリアのホームでは……

「なんじやあああああ……？」

「いやあくやっぱり乗るなら大人のでけえ背中に限るな。なんてったって3人乗っても余裕がある。」

「いいからどこかんか！今度は何をしおった？馬鹿者が!!？」

「うるさいですディアンケヒト様！近隣の方の迷惑です。」

「……こは……？」

老神の叫び声に団員が駆けつけると、部屋には子供3人によって下敷きにされた主神の姿があつた。

「とりあえず18階層で取ってきた薬草です。是非お納めください。」

「色々聞き出さなきゃならん言葉が聞こえたが、とにかく儂の背中から降りんか!!？」

数分して団長が帰ってくるまで、ホーム内では少年と老神による激しい応酬が続いた。

豊穰の女主人

18階層から戻ってきて数日。フィンから深層のドロップアイテムを買い取るなかで、シキは宴の誘いを受けていた。

「うくん…楽しみにしてるとは言ったものの、こういう集まりは苦手なんだよな。それに俺、酒はあんまり好きじゃないし。」

「君の歳で既に酒好きだったら問題な気もするけどね…。アイズもいるし、来てくれると嬉しいよ。まだ礼を言えてない者もいるしね。それと、流石にこれは安すぎじゃあないかい?」

少年の返答に苦笑しながら、手元で提示された素材の買取金額を指でトントン叩いて指摘する。

「これ以上高くするとうちの主神がうるさいんだよ。俺自作のボールペンとポーション割引券つけるから勘弁してくれ。」

「割引券はありがたいしわかるけど、このボールペンと言うのはなんだい?先の方にインクのようなものが見えるけど。」

手渡された小さな棒状の物体を、フィンが興味ありげに色んな角度から眺める。

「中にインクを入れることで、何度も先をインクにつける必要なく書き続けることができる。先が球状で転がるようになってるから書きやすいし、事務作業が多い団長様にはぴったりだろ？」

前々から羽ペンが使いづらくてイライラしていたため、なんとか再現しようと作成したものだ。今ではファミリア全員がこれを使用している。

当然ノック式ではないし使いづらい部分もあるにはあるが、自作にしては良く出来た方だと思う。インクの出すぎや漏れないようにするのは苦労したが。

フィンが試しに近くの紙に文字を書くと、滑らかに動く様子に目を見開く。

「これは凄いね！是非使わせて貰うよ。素材代金で足りない分は僕個人で出すとするかな。」

「そうしてくれると助かる。で、この後どこに行けばいいんだ？」

「ああ。ここから少し先の、豊穰の女主人という店さ。多分オラリオで一番安全なお店だと思うよ。えっと…ほら、ここだ。」

カウンターに置いてあるオラリオの地図を取り出し、指で示す。

「まあまあ近いな。仕事が終わってからだから少し遅れるが、顔を出すくらいならいいだろ。」

「もちろん彼女…アミッドも連れてきてくれて構わないよ。いや、むしろ連れてきてく

れると有り難いかな。彼女には特に世話になったからね。」

「へいへい。…酒場つてのは人が多いんだ。礼を言うのはいいが、あんまり18階層でのことは話さないようにしてくれよ?」

人が多く盛り上がる分、酒に酔つて要らぬことを言いかねない。念の為釘を刺しておく。

「本当に彼女を大切にしてるんだね。…僕もそろそろ本気でお嫁さんを探さないとマズイかもなあ…。」

「お前がその気になりさえすれば、相手なんかすぐに見つかるだろ。…ほら代金だ。俺達の酒代分も入れといたから、先に行つて始めといてくれ。」

2人合わせて2000ヴァリスくらいで足りるだろうか。素材の代金も含め、少し大きめの袋に硬貨を入れて、フィンへと渡す。

…この作業面倒だから紙幣になんねえかな。

「ありがとう。じゃあ後でね。」

袋を受け取ると、爽やかな笑みを浮かべながら去っていく。道端でその笑みに墮とされた女がいないことを願う限りだ。

日が暮れ、仕事が終わると、アミッドを連れて指定の場所へと向かう。

「なんか楽しそうだな、アミッド。」

「…そうですね。沢山の方々と食事をするというのは初めてなので、少し楽しみです。」

以前プレゼントした、白を基調とする長衣を身につけ歩く姿は、珍しく歳相応の少女のように思えた。

シキも酒場ということで普段の装備も脱ぎ、護身用の短剣のみといったラフな格好で来ている。

「…ここだよな…?」

「その筈ですが…」

指定場所の雰囲気の良い店に着いたにも関わらず、何故入らずに扉の前で立っているかというと…

ザシユツ!

「ぐあああああああああああああああ!?!?」

「ケ、ケビーン!?!?」

「ケビンがやられたあー!?!?」

うん。明らかに飲食店で起こっているような騒ぎじゃない。なんか剣振ってる音聞こえるし。というか酒場に剣なんか持ち込むんじゃないよ。

嫌な予感がしながらも、扉を引いて顔を覗かせる。

「遅れてすみませ…」

「店のもんを壊すんじゃないよこのアホンダラアアアアアアアアアアアアアアアア!!?」

「うぎゆうう?!?!?」

…音を立てないよう、そつと扉を閉める。

「シ、シキ?」

俺は何も見していない。見知った金髪の幼女が、大きな女将の拳で沈められるところな
ど。

…人は無闇に怒らせない方がいい。今改めてそう実感した。

「見苦しいところを見せて悪いね坊主。ここの主人のミアだ。よろしくね!」
「ど、どうも。」

自分の何倍も体積がありそうな女将を前にして、顔が引きつる。ついさつき目の前で
起きた出来事のせいか、あんまり顔を直視したくない。

「いやあすまない。先に始めてるとは言ったものの、まさかこんなことになるなんて
ね。」

「まったくだ。初めて酒を飲む時は、家で保護者と様子を見ながらが常識だろ。だから遠征で怪我人なんか出すんだ。注意力が足りないぞ。…それとその酔っ払い親父どうにかしてくれ。」

「なんやとおこのガキイ！」

先程の事件について謝罪するフィンに対し、文句をつける。隣ではアミッドが、殴られ気絶しているアイズを膝に乗せている。

あの後なんやかんやで店に入り、フィン、ガレス、ロキ、リヴェリア、アイズ、アミッド、シキの順で円卓に座っている。ロキに関しては既に出来上がっているが。

「これは手厳しいね…礼を言うつもりが迷惑をかけたともなれば、仕方がないかな。」

「…まあいい。こっちはこれから食事なんだ。遠慮なく加えさせてもらう。アミッド、何か食べたいものでもあるか？」

「そうですね…ここに来てからは食べてなかったので、魚料理などはどうでしょう？」

…確かに最近では肉ばっかりだったからな。村にいた頃は、よく川で捕まえて食べたものだが。

「俺もそうしようかな。女将さん、魚料理はある？」

「魚とは珍しいね坊主。今ならまだ捌いてないのがあるよ！どう調理するんだい？」

見た目通りの大きい声。まるで大衆食堂のおばちゃんだ。好感が持てる。

最近開いたばかりでまだメニューがすっかり確立しておらず、客の要望にも店にあるものでならある程度応えられるらしい。

「焼いてもいいが、こう味の濃いものが多いとな…。刺身にしようかな。」

「！私もそれでお願ひします。」

酒場で魚と言つたらやはり刺身だろう。酒は飲まんが。

「刺身い？なんだいそれは？」

都市では聞くことがないのか、ロキファミリアの面々も不思議そうな顔をする。

「あれ、都市じゃひよつとして知られてないのか？村では知ってる人も多かつたんだけど。」

「刺身は主に極東の料理だそうですから…。シキの捌く魚はとても美味しかったので、是非もう一度食べたいです。」

刺身という言葉が出てから、なんだかアミツドの瞳が若干輝いて見える。何年前に村で初めてご馳走してからというもの、魚の刺身が好物になつたらしい。

「なんだ、ひよつとして坊主いけるクチかい？厨房貸してやるからやつてみな！私も興味あるしね。」

そう言うのと、魚丸ごと一匹と包丁を手渡される。

「客が調理すんのかよ…。まあいいけど。」

厨房に入り魚を台の上に乗せると、手際よく鱗と頭を切り落としていく。

「戦闘に治療に料理まで出来るとはね…僕もやれるようになった方がいいかな？」

「そういえばフィンさん、シキがこれをあなたにと。」

少年の手によって魚が見事に解体されていくのを見てみると、その連れの少女から何か手渡される。

「これは…手帳かい？」

「依頼期間中の記録だそうです。到達階層や倒したモンスターなどの情報が記入されています。」

何枚かめくると、1日の活動内容が時間ごとに細やかに記されているのがわかる。

「…本当に凄いな彼は。今日聞こうと思っていたことが殆ど書いてある。」

これはもう依頼料を追加した方がいいかもしれない。流石にあれだけでは申し訳なくなってきた。

「アイズには別に、戦闘の癖とかアドバイスについて書いたのを渡してあるぞ。数日はそれを読んで振り返るように言っておいた。」

「成る程ね…通りで最近はダンジョンに潜らず、部屋にいたわけだ。ダンジョンに行かないなんて、熱でもあるかと思つたよ。それで、調理の方は終わったのかい？」

戻ってきたシキの手に持った皿に興味があるのか、他の団員達も覗き込むようにして

見てくる。

「ああ。…といつても、ただ切り分けたただけなだけだな。ほらアミッド、ご要望の品だ。どうぞ召し上がれ。」

机に置かれた皿には、魚の透明な身が薄く切り分けて並べてあり、芸術品のような美しさを醸し出している。

「ー！いただきます。」

口に入れた途端に感じる旨みに、アミッドの顔が綻ぶ。先程までの凜とした表情からは感じられない少女の緩んだ顔を見て、ロキファミアの面々がゴクリと喉をならす。

「沢山あるから、あんたらもどうぞ。」

そう言つてそれぞれの机に皿を出すと、全員がその美味しさに騒ぎ始める。

「ハツハツハ！こいつは酒に合うわい！」

「なんや、めっちゃやうまいやん自分！」

「久しぶりだったから不格好だが、口に合つたようだなによりだ。」

席に着こうとすると、ミア後ろから腕を回される。

「なかなかやるじゃないか坊主。…今従業員不足だね。うちで働かないかい？」

「やり方だけ教えるんで勘弁してくれませんか？」

「ははははは………ブフツ！」

酔いも回り始め賑やかな雰囲気になったところで、手帳を読んでいたフィンが、口に含んでいた酒を突然吹き出す。

「おおっ!??どないしたフィン?」

「……シキ……3日目の欄に、アイズが精神疲労マインドダウンで帰還つてあるんだけど……どういうことだい?」

「!??」

フィンの発言に、主神とレベル5の2人が目を見開き驚愕する。

「な、魔法だと!??:…ロキ、まさかあの子に教えたのか!??」

「いやいやいや、ありえへん!ここんところ話しかけてもずつと無視し続けられとったし……あれ、なんか涙が……」

立ち上がり詰め寄るリヴェリアに、ロキが外れんばかりに首を横に振る。

「ああ、アイズの魔法ね?本人が知らないのに発動したからおかしいとは思ってたけど、やっぱ隠してたんだな。」

「本人が知らなかった……ってことは、意図的に使ったわけではないんだね?」

「そりゃあな?会話の流れからアイズの親の話になって……偶然にも母親の魔法の詠唱を口にしたら、って感じだよ。手にした力にはしゃいでモンスターを虐殺しまくった結果、魔力が切れて倒れたわけ。」

「あの時は大変でしたね……」

「ああ……。帰る途中でキラアアントの大群に襲われるわ、アイズ背負って思うように動けずにあいつらの体液浴びまくるわ、挙句の果てにロキファミリアのホーム前でその女神が、『う、うちのアイズたんがヌルヌルプレイされとるく!!?』とか叫びやがって、街中で冷たい目で見られるわ、最悪だったぜ。……なんか今更ながら殺意が湧いてきた……」

後半、生気を失った目で語るシキに団員達は同情し、主神は激しく身震いする。

後日アミッドが言うには、若干目の色が蒼くなりかけていたらしい。

「そうか、最終日の小^{インファントドラゴン}竜討伐もこれの影響か……。ありがとう。早めに知れて良かったよ。これからも都合が合うようなら、この子と一緒に潜ってくれと嬉しいな。」

「ん……うん?」

「起きたかいアイズ?……。みんな酔っ払っているようだし、そろそろお開きにしようか。これ以上ミアに迷惑をかけるのもあれだしね。」

その声をきっかけに、ロキファミリアの面々がわいわい騒ぎながら立ち上がり、店を出始める。

「それじゃあね、シキ、アミッド。これからも末長くよろしく。」

カウンターに代金を置くと、爽やかな笑みを浮かべながら店を後にする。

「……俺、まだ何も食ってねえんだけど……。」

机を見ると、皿に沢山あったはずの刺身は綺麗に無くなっている。

唯一余っていた硬そうなパンを口に詰め込み、席を立つ。

「帰るか……」

「そうですね……」

「おい坊主、魚の代金がまだだよ！」

「……あの野郎、次会ったら泣かす。」

念の為にと持ってきていた金を払い、店を出る。ホームに着いて寝る頃には、既に腹の虫が鳴き始めていた。

「……ねえ、これは高すぎやしないかい？」

「この間のこと思い出して言えば？」

ディアンケヒトファミアリアでは、しばらくロキファミアリアに対してぼったくりが行われた。

抗争前夜

物を売る時、バラ売りや束売りなどと言う方法がある。その際一個あたりの値段を考えず、量だけに目をとられて買えば、多少なりとも損をすることになる。

「こつちのバラ売りのを3つ」

「束のもあるよ」

「いや、こつちで」

店のおばさんが一個あたりの値段が若干高い束の方を進めてくるが、構わずバラ売りの方を頼む。

商売なのだし、一個あたりの値段が違うなどと咎めたりしない。むしろいい客寄せ方法だと思う。たとえどちらでも市場価格より高いとしても、比較対照がそこにあるだけで、買った側は得をした気分になるというものだ。

「色々歩き回るのには面倒だな…」

入団から2年近くの年月が経ち、シキとアミッドはファミリア内で確かな地位を獲得していた。

アミッドはあれから修練を重ね、今では治療院随一の回復魔法の使い手だ。レベルは上がっていないものの、アビリティ熟練度はレベル1の中でも上位に位置しているし、治療の際の指示はほとんど彼女が行なっている。

シキに関しては先日レベル3へとランクアップを果たし、必要な素材や薬草を自力で採取してこれる優秀な人材だ。普段は主に治療薬の作成と販売を行なっている。

背は以前よりも伸びたものの、まだ子供らしい背格好でキビキビ働く2人に思うところがあったのだろう。気分転換に買い出しに行くようにと、団員たちから追い出されてしまった。

主にアミッドは白、シキは黒を基調とした格好をしており、シンプルなデザインには、二人のあまり拘らない性格が表れている。

「これで全部ですか？」

「ああ。思ってたよりも安く済んだ。」

「シキは計算が得意ですからね。これで残りは別の用途に回せます。」

アミッドが感心しながらも、残りの金について使用用途を考え始める。

「折角気を使ってもらったみたいだし、少しは息抜きくらいいしるよ?」

「シキこそ働きすぎです。…あなたが休まないなら、私も働きます」

「へいへい…まあ最近結構慌ただしいからな」

以前からあるにはあったが、ここ最近イツイルスは闇派閥の動きが活発化してきている。直接治療院を襲撃されたわけではないが、付近でも既に何かしらの被害が出ている。うちには団長とシキがレベル3、レベル2も数人いる。基本的に非戦闘員だが、いざという時に戦力を求められることもあるため、警戒は常にしなくてはならないのだ。

「相変わらず仲がいいわね、2人とも。」

治療院に戻ろうとしたところで、澄んだ女性の声に振り向く。

「アストレアさん。どうも」

「こんにちは」

正義の女神アストレア。腰まで伸びた長い髪と白い装束、穏やかな笑みは、ただ立っているだけでも目を惹く。美しいと言うより、綺麗と言った方が良いだろうか。フレイヤとは違った、人の視線を集める魅力を持った女神だ。

「こんにちは2人とも。それとシキ、この間は私の眷属達を助けてくれてありがとう。」

「助けたって言うか、貴方の方とこの団長に無理矢理連れて行かれただけなんすけどね…。まあ迷惑かけてるのはお互い様ですし、今後もうちを利用してくれれば言うことは有りませんよ。」

あの時連れて行かれた階層主討伐戦のお陰で、ランクアップできたようなものだ。結果的にはあるが、多少は感謝している。

「ふふ、ありがとう。きつとあの子達も喜ぶわ。…それでねシキ。この後少しいかしら？」

アストレアの表情が、笑顔から真剣なものへと変わる。

「…例の情報交換ですか？」

「ええ、それも含めて話があるの。」

「…アミッド、先に治療院に戻ってくれ。多分今日は遅くなる。」

「シキ…っ……わかりました。」

抗議の声を上げようとするも、少年の顔がそれを許さなかった。渋々ながら了承すると、アストレアに頭を下げ、その場を立ち去る。

「…ごめんなさい。」

「…何がですか？」

アストレアが顔を下げ、申し訳なさそうに謝罪する。

「本来こんなこと、頼むべきではないのかもしれない。貴方達のような子供たちに、そんな顔をさせてしまうのなら…」

「この都市にいる時点で、既に誰もが関係者だ。年齢とか種族、一般人とか冒険者とか、そんなこと一切関係ない。今更ですよ、そんなこと。」

「…そうね……ありがとう。」

「とりあえず場所を移しましょう。話をするにしても、ここは人が多い。」

「まだ空は明るい。人通りはそこまで多くはないとはいえ、誰に聞かれるかわからない。」

「なら私のホームに行きましょう。そこなら安心して話せるわ。」

アストレアに続いてしばらく歩き、アストレアファミリアのホームへと入る。

「お帰りなさいアストレア様……と、シキ？何で？」

「あらあら、なんだか小さい子供が紛れ込んでいますようですけれど。アストレア様？如何してそのような子供を連れ込んだの？」

「何故貴方は毎度彼にあたりが強いのですか……大して歳も変わらなんでしょうに」

「お前とは2歳差だっけか？そりゃあ確かに大して変わんねえな」

赤髪、黒髪のヒューマン、金髪のエルフに桃色の髪の小人族。見てるだけで目が疲れそうな少女達の出迎えに、若干顔を引きつらせる。

「ただいま、みんな。それとアリーゼ？今日はディアンケヒトファミリアと情報交換するって言ったでしょう？」

「あれ、そうでしたっけ？」

「わかんねえでここといたのかよ。相変わらず抜けてるやつだな。」

中心に立っている赤髪のヒューマンに蔑むような視線を浴びせる。

「む、失礼ね！この完璧美少女アリーゼ様に、何か欠陥があるとでも？」

「うちでポーション買いに来る度に、アミッドと談笑するだけして何も買わずに帰っていくお前が？しばらくして慌てて戻ってくるのを何度見たことか。」

「うぐっ…」

「シキ、それ以上アリーゼを悪く言うな！アリーゼはその…ちよつとアレだけです！」

「そこは庇ってやれよ…」

金髪のエルフが間に入り、桃色の髪の小人族が呆れ顔を見せる。

「【疾風】、お前が言えたことか？以前店の整理を手伝うとか言って、治療薬の並んだ棚を丸ごとなぎ倒したのは誰だ？まだ返済終わってないんですけど？」

「そ、それは言わないで下さいと…！」

「お前そんなことしてたのか…」

「阿呆め、このポンコツエルフ。」

「ぼ、ポンコツなどと呼ぶなああああ！」

「それで？そちらはたった一人で情報交換をするので？随分と人手が足りないようですね。」

「あんたら冒険者が怪我せず帰ってくれたら、団長やアミッド達も楽なんだがなあ。まあ元お嬢様には仕方ないかな。」

「本当に失礼なガキですなえ、この男。」

極東出身の黒髪のヒューマンが額に青筋を浮かべ始めたので、これ以上はしないとばかりに、卓に出された茶を飲む。

以前からアストレアファミリアに情報交換の話は持ちかけられていたが、まさか一人では思わなかった。本来なら団長がここにいるべきなのだが、何かあつた時のためにホームにいることが多い。最近はず外の活動は主に自分がやっている。

「ま、さつさと始めましょうか。時間の無駄だ。」

「貴方達の愉快なやり取りは見ていて飽きないけれど……始めましょうか。アリーゼ、他のみんなを呼んできてくれる？」

「はい……みんなー、集合ー！」

アストレアファミリアの団長、アリーゼ・ローヴェルの大きな声に、思わず逃げるように上体を反らす。やはり大きな音は苦手だ。

アストレアファミリアの団員一人全てが集まり、卓を囲むようにして席に着く。

「それじゃあ闇派閥イヴァイルスについて、各自情報を共有するわよ。まずは……」

アリーゼの話をまとめると、どうやらこれまでに四度、魔石製品工場が襲撃されているらしい。そして四度目の襲撃で、あるものが盗まれた。

「……魔石製品の『撃鉄装置』……製品を作動させるスイッチつてやつか。」

「そう。何か心当たりある?」

「さあ?…まあ連中の考えることなら、大体予想はつくが。向こうの神には相当イカれた奴がいるみたいだな。」

「?どう言うこと?」

「連中が自分の命を大切にしない馬鹿ばかりつてこと。まあどの道、既に奪われた以上後手に回るのは避けられないだろう。…さて、今度はこつちの番だな。主に色んなファミリアから寄せ集めの情報だが……」

多くのファミリアがうちを利用するため、情報が入ってきやすいのだ。販売担当なんかしている、各ファミリアの内情なんかもよく耳にする。

「……とまあ、どこも似たような襲撃は多く受けているが、何か奪っていったわけじゃない。何かを探しているの方が近いかもしれないな。」

「その根拠は?」

「撃鉄装置を奪うためのカモフラージュにしては、これらはあまりに過剰だ。他に何か目的があると考えるのが自然だろう。デダインや妖精エルフの森でも動き回ってるらしいしな。果たして何をかはわからんが。」

その言葉にアストレアが目を細め、何かを見定めるようにシキを見つめる。

その他にも被害を受けた冒険者の容態、不足している素材についても報告を行った。

「…まあざつとこんなもんですね。もとよりうちが知っている情報なんてたかが知れている。出来る限りサポートはしますから、今後必要なことがあったら呼んでくださいよ。…それじゃあ俺はこの辺で、」

軽く会釈して席を立ち、外に出る扉へと向かう。

「シキ。」

扉の取手に手をかけたところで、アストレアに呼び止められる。

「なんです?」

「…本当に、イヴイルス闇派閥の目的に心当たりはないの?」

もう一度、何かを確かめるように問を投げかけてくる。

「…ええ、アフロシテア【殺帝】やヴァンデツタ【白髪鬼】共の考えることなんてさっぱりですよ。まああいつらの

思想なんて、知りたくもないですがね。」

そう答えると、扉を開けて外へと出て行く。シキがいなくなった後も、アストレアが何か考え込むような素振りをする。

「……………」

「アストレア様?どうかありませんでした?」

「…いえ、なんでもないわネーゼ。さあ、みんなお腹も空いているでしょう?少し早いけれど、夕食にしましょうか。」

「賛成！ずっと話続けてお腹ペコペコ。ライラ、美味しいやつよろしく！」

「げ、そういえば今日の当番アタシだった。」

「一人では大変でしょう。手伝います。」

「お前は食材に触れるな、このポンコツ妖精。代わりに私が手伝ってやろう。」

「だからポンコツなどと呼ぶなああ！」

いつもと変わらない賑やかな眷属達の会話に、思わず頬を緩める。同時に、先程のシキの言葉を思い返す。

（嘘をついているようには見えなかった。けれど、何かを知っているのはおそらく確実。

…まさか、イヴィルス闇派閥とは別に何か…）

今度、ディアンケヒトやヘルメスと話をしてみようか。あの二柱なら、何か知っているかもしれない。

「アストレア様、食事の用意出来たみたいですよ！ライラの料理、すごく美味しそう！」

「それはもう、愛しの【勇者】プレイバー様に食べてもらうかもしれないと言って猛特訓したからな、

コイツは。」

「そうなのですか？」

「違えよ!!？輝夜がアタシの料理に文句つけるから、頑張つて練習したんだろうが！」

「大丈夫よライラ、私はそんな貴方の恋を応援してるわ！ばちこーん☆」

「話聞けよ！あとうぜえ！」

「…ふふ…さあ皆、冷めないうちに早く食べましょう？」

今は考えるのはよそう。戦えない自分にとって、眷属と一緒にいる何気ない時間こそが、大切なものだから。

「…うん、美味しい。これなら【勇者】^{フレイク}も喜んでくれる筈よ。」

「アストレア様まで！…くっそ、こうなったらいつか絶対あいつにも食わせてやるからな！」

1-1人と1-1柱の賑やかな笑い声は、闇に覆われつつあるオラリオでも、変わらず響いていた。

北西と西のメインストリート、その間の区画。人が通ることなど滅多になく、民家の明かりもほとんどない。

「なんだお前は…ぐあ」

「くそ、どこから…がはっ」

壊れた魔石塔の下、雲に隠れた月が顔を出すと、黒い装束を身に纏った男達が血を流

し倒れる。

ある一箇所を監視するように配置された者達の亡骸を辿り、目立たないように隠れた廃教会の戸に手をかける。

ギイ、という音を立て中に入る。

「…またお前か」

教会の奥に佇む女が、若干の呆れを含む声を発する。

「あんたの周りにはよく闇派閥イッパイルスの連中が隠れてるからな。それに、こう暗い夜はあんたを見つげやすい。」

顎を軽く上げて女の銀色の髪を示す。腰まで伸びたその髪は、暗く月明かりだけの夜でもその存在感を放っている。

「…まあいい。お陰で雑音も消えた。…用が無いのなら立ち去れ。その眼で見られるのは不快だ。」

暗闇でもはつきりの見える少年の蒼眼を、忌々しそうに見つめて言う。

「悪いが、少しここで休ませてもらう。ここが好きなのは、何もあんただけじゃないんだ。」

「…勝手にしろ」

埃の積もった机の上に乗り、死体から剥いだ物品を確認していく。その様子を、女が

興味なさげに見つめる。

「…何も言わないのか？あんたの仲間を殺したのに？」

「勘違いするなよ小僧。我々が組んだのはあの神だけだ。断じて闇派閥共ではない。」

「そうだったな。でもこのまま行くと、確実にオラリオからはそう認識されるぞ。」

「構わん。死後の名声なんぞに興味はない。満足して逝ければそれでいい。」

教会の破れた天井から空を見上げる女は、何処か遠くを見るような目をしていた。

「…気に入らないな」

「…なに？」

「どうせ死ぬなら世界の踏み台になる、だったか？神と違って、人が死ぬのなんて当たり前だろ。それを理由に動くなんて、馬鹿馬鹿しいにも程がある。」

「…馬鹿にしたければするといひ。この地に来た時点で、既に覚悟は決まっている。」

「そうそう。覚悟を決めた者にそんなことを言うのは野暮だぜ？シキ。」

教会の扉を開け、一人の男神とヒューマンが中へと入ってくる。

「…エレボス」

「久しぶりだなシキ？ああ、前に会った時はエレンだったか。」

「…何の用だ。」

「いや、そろそろ来てる頃だと思ってな。もう一度話しておきたくて来たんだ。」

片手を腰にやって、少年の蒼く光る目を見つめる。

「以前も言った通り、俺達は次代の英雄を生むための『必要悪』であり、歴史に罪過の象徴として刻まれる『絶対悪』だ。」

「ああ。そして、オラリオが越えるべく壁として立ち塞がる。：お前のような子供が、戦わずに済む世界にするために、多くの血を流す『悪魔』と化す。」

「…ザルド」

全身に鎧を纏った大男が、シキの頭に手を乗せる。低く野太い声の中に隠れた暖かみに目を閉じ、そして黒く戻った瞳を開く。

「……わかったよ。だったらもう何も言わない。好きに踏み台とやらになればいいさ。」

「おい、本当にいいのか？これから俺達は、オラリオを潰しに行くんだぜ？」

机から降り立ち去ろうとするシキに、エレボスが拍子抜けたような顔をする。

「勘違いするなよエレボス。見逃すのはお前ら3人だけだ。お前の眷属や閥派閥イヴイルスを見つければ、容赦なく殺す。」

「…ふつ、俺達を見逃すとは、大きく出たな坊主。」

「お前らは冒険者を殺しにここへ来たのか？…殺す気がないやつなんか、負けるつもりはない。」

振り返った少年の瞳は蒼く、第一級冒険者でも怯むほどの殺気を放っていた。

「…ザルド、アルフィア。一つ約束しろ。」

「なんだ。」

「この先オラリオがどうなろうと、必ず生きて俺の所に来い。…最後は俺だけの壁として、過去の英雄をこの手で葬ってやる。」

「…貴様程度のガキが、俺達を殺せると?」

「やれなくてもやる。…死に場所を自分で選ぶなんて許さない。」

そう言い残し、扉に手をかける。

「待て小僧…忘れ物だ。」

アルフィアから投げられた物を反射的に掴む。手にあるのは、一冊の厚い本。先程の戦闘の際、倒れた男の一人が持っていたものだ。

「…なんだ、壁のためには必要なんじゃないのか?」

「私にはもう必要ない。…精々私達に会うまで死んでくれるな。」

「そうか、なら有り難く受け取らせてもらう。…エレボス、最後に一つだけ頼みがある。」
黒く戻った瞳で、エレボスを見つめる。

「…なんだ?」

「ディアンケヒトファミアリアの銀髪の少女。…もしオラリオが滅んだとしても、あいつだけは見逃してやってほしい。」

「……いいだろう。眷属達には治療院を襲わせないように誘導してやる。」
「ありがとう。……また四人で話をしよう。」

そう言つて、今度こそ扉を開けて外へと出て行く。月の隠れた夜空の下に、全身に黒い服を纏つた少年は消えていった。

「なあ二人共」

「なんだ」

「……身体の方は大丈夫か？」

「さあな……ま、精々保たせるさ。あいつとの約束の前に、くたばるわけにはいかん。」

「ああ、丁度いいハンデというやつだ。高すぎる壁はかえつて絶望を産む。」

「……そっか」

「デダインから採つてきた薬草、大聖樹の枝。いづれも充分用意はある。撃鉄装置も手に入れた。」

「準備は整つた。……さあオラリオ、お前達の『理想』を見せてもらうぞ。」

大抗争まで、あと十日

魔導書

小さい頃から本を読むことは好きだ。それを読んでいる間は、他の何も考える必要がなかったから。

思考を放棄すると言えば聞こえは悪いが、雑念に惑わされない時間は、自分にとってとても心地よいものだった。

だからこそ、本の内容を自身を当てはめるような行為は好きではない。物語や冒険譚はそこに登場する人物達の記録であり、実用書や専門書は知識を取り込むためのもの。本を読んで知識を得ることは好きでも、物語の彼等に自分を重ねて、「自分だったら……」などと考えることは嫌う。

簡単に言ってしまうえば、シキという人間は主観的に本を読むことが出来ない。

そのため、教会で彼女から受け取った一冊の分厚い本を開くことに、若干ながら抵抗があった。これを読めば、自身に何らかの変化をもたらすことを理解していたから。

団員達を起こさないように窓から自室に入り、武装を解除した後で、壁にもたれるように床へ腰を落とす。ベットに向かわないのは、汚れた身体でそこに寝たくないないためだ。

目を閉じて呼吸を整えると、表紙をめくって内容を目にする。

『ミノタウロスから教わる現代魔法！その一』

…急激に読む気が失せたが、深くは考えずにページをめくる。題名から読者の気を惹く手法はありがちだが、使い方を間違えれば離れていくことを理解して欲しい。

題名が特殊なだけで、中身はどこにでもあるような共通語の文字が並んでいる。ありきたりな文字を読んでいるようで、ただ目線で追っているだけの時間が続く。

引き寄せられるようにして何枚目かのページをめくると、開いたページ内の文字達が組み合わさるようにして集まり、自身の顔のパーツを再現し始める。

『さあ、始めよう』

閉じられた瞼を開き、ヘラヘラと笑いながらこちらを見つめてくる。普段自分がしないような表情に軽く殺意が湧くが、平常心を保ってその目を見つめ返す。

『お前他にとって、魔法って何？』

魔法。そう聞いて始めに、自身のファミリアの銀髪の少女が使う回復魔法を思い浮かべる。

また同時に、月明かりに照らされた教会で、何人もの冒険者を地に這いつくばらせた銀髪の女性を思い出す。

『俺お前にとって、魔法ってどんなもの？』

死から生へと引き上げるもの。

生から死へと叩き落とすもの。

『魔法に何を求める？』

…人を助けるための力は要らない。

あいつが目に見える命を救うのであれば、

俺は如何なる事象や理であつても殺せる者でありたい。

『それだけか？』

都市が煩い。

民衆の悲鳴が煩い。

至る所から聞こえる絶望の音が、

生きることを諦めた人間達の嘆きが、

どれもこれもが煩わしい。

目的のために人を殺す。

生き残るために他を殺す。

どこもかしこも殺しで溢れている。

…死を与えるのは、俺一人で充分だ。

『…ははっ、大きく出たなあ』

うるさいな。だが、

『それが俺だ』

その言葉を最後に、意識が暗転する。

「……キ。…シキ、起きてください。」

「ーんあ？」

最近になって、凜とした声に磨きがかかってきた少女の声に、閉じていた瞼を開く。

「そんなところで寝ていると風邪をひきます。それと、帰っていたなら一声かけてください。」

「……ああ、ごめんアミッド。」

どうやらあのまま壁にもたれて寝ていたらしい。変な体勢で寝ていたからか、首の違和感が酷い。試しに曲げるとボキボキと音を立てる。窓から陽がかなり差し込んでいることから、それなりに寝ていたようだ。

「昨夜は何時ごろ帰って来たのですか？怪我などはありませんか？」

「あー、日付は回ってただろうから正確に言うとは今朝だな。いや、あの時間帯だと朝とは言わないか…とにかく、怪我をするようなことはしてないから心配しなくてもいい。」

「…それならいいんですが…」

どこか附に落ちないのか、なんとも言えない表情で目を伏せる。

「お詫びと言っちゃなんだが、今日の仕事は俺が代わるよ。お前は休んでてくれ。」

「い、いえ私は別に……」

「ここ最近、あまり寝てないだろう。今日は特に用も無いし、気にするな。」

そう言つて頭を撫でると、気が抜けてきたのか、アミツドの目蓋が下がり始める。

「……ん、それでは……休ませて、貰います……」

「ああ、おやすみ」

いくら大人びていても身体は子供。大人と同じ要領で働けば、疲れも溜まる一方だろう。

アミツドをすぐ近くの自分のベッドに寝かせると、音を立てないようにして部屋を出て、後ろ手に扉を閉める。

「ん？なんだ帰つておつたか。」

「げ、爺……いや、やつぱり丁度良かった。」

『『げ、』とはなんだ『げ、』とは………で？何か用か。』

「ああ、ステータスの更新を頼む。」

途端にディアンケヒトの目が細められる。

「はあ……よかろう、部屋に來い。」

ため息混じりの返事を受けて、主神の後ろを着いて歩く。

「…で、何人殺した？」

部屋に入って上着を脱ぎ背中を向けると、開口一番そんなことを口にす。

「…昨日で4人、この5日で11人つてところだな。」

「まったく、お前がそんなことをする必要はどこにも無いだろう。何がお前をそこまですさせる？」

確かに、こんなことをする理由は正直言つてあまりない。むしろアミッド、ファミリアの安全のためには、俺はこの治療院に留まるべきだろう。

「…いいだろ別になんでも。早くしてくれ」

「生意気な口を聞きおつて…割り振りはどうする？」

「いつも通り敏捷と器用に…いや、今回は耐久と魔力に振つてくれ。」

「耐久？なんだ、ようやく儂の忠告を聞く気に…何、魔力じゃと？」

少年から発せられた単語に老神が反応し、再び背中へと目を向ける。

「魔法の発現…しかも今の口ぶりからしてお前、魔導書ブリモアを読んだな!!？」

「奴等からの拾い物だ。アミッドに使わせようかとも考えたが、今のあいつに渡しても負担にしかないだろう。俺自身、新しい力が必要だったからな。」

「むむむむ…まあ仕方あるまい。ほれ、終わったぞ」

シキ

L V. 3

力 : H 1 6 5 ↓ H 1 7 3

耐久 : I 7 2 ↓ H 1 3 4 (+ 5 0)

器用 : G 2 4 7 ↓ G 2 6 1

敏捷 : G 2 6 8 ↓ G 2 8 9

魔力 : I 0 ↓ I 6 0 (+ 6 0)

千里眼 : B

気配遮断 : F

恐怖耐性 : E X

痛覚耐性 : E X

《魔法》

【死与告别】

- ・対象に生^死の概念を付与
- ・周囲の人間の能力値が大幅減少
- ・自身のスキル効果上昇

・詠唱式〔此処に示すは生誕の証

此処に残すは死別の哀

汝の死を以て終局とする〕

《スキル》

【直死の魔眼】

・”死”を視覚情報として捉えることが可能

(対象が死を意識している程に効果上昇)

・”死”の概念が無いもの、”死”を理解出来ないものは見ることが出来ない

・格下であれば見ただけで殺すことも可能

・威圧、魅了の相殺

・発動時、器用と敏捷のステータス上昇

【霊核御手】

・常時発動可能

・視界内の物体の掴み取りが可能

・実体を持たないものでも可

・投擲に対して高補正

【命葬】

- ・人を殺す度に経験値獲得（分配任意）
- ・対人時全能力値大幅上昇

「またとんでもない魔法を覚えよって…それにしても、相変わらず恐ろしいスキルだな。やはり伝えないべきだったか…」

「そりゃあ、初めて闇派閥イヴィルスの連中を相手にした夜、殆ど攻撃受けてないにも関わらず、耐久が30も伸びたら気付くだろ。あんた耐久が低いの気にしてたし。…まあ隠しておきたかったのも分かるけどな。」

【命葬】のスキルは、入団時点から既に所持していたらしい。大人びていたとはいえ、まだ善悪の区別が難しい子供には教えられなかったのだろう。

受け取った羊皮紙に目を通し、能力値の数値を見て薄い笑みを浮かべる。

「…ははっ、レベル1相当の人間を1人殺して手に入る経験値がたった10だなんて、笑えてくるな。」

殺せば経験値が手に入るだなんて、まるでモンスターみたいだ。結局のところ、どちらも醜いことには変わらない。

「…シキ、目が蒼くなっておるぞ。」

「ん、ああ…またか」

「最近特に酷使し過ぎだ。今の様子だと、もう”死”が見えることに違和感を感じとらんのだろうか？このままではいずれ制御出来なくなるぞ。」

他人事のようにこちらを気にかけるような言葉に軽く笑みを溢す。

「まあ慣れだよ慣れ。見えてても触らなければいい話だしな。それに、もう【万能者】^{ベルセウス}には依頼してある。心配しなくても、うっかりあんたを殺したりしないよ。」

「そういう話ではないわ馬鹿者が。」

「更新どうも。それじゃあ店の方出てくるんで失礼…」

「シキ」

上着を羽織り部屋を出ようと扉に手をかけたところで、背中越しに呼び止められる。

”死”に慣れるな。人を斬るのに抵抗をなくすな。」

「…わかっている。」

「…今後しばらく、お前は好きに動け。ただし、絶対に生きて帰ってこい。」

普段の豪快さの欠片もない、落ち着きのある声か耳へと届く。

無言で部屋を出ると、後ろ手に扉を閉める。そのまま店まで向かい、近くの団員に声をかける。

「店番は俺がやっておくから、あんた達はポーシオン作っておいでくれないか？」

「え？でもまだ在庫は充分に…」

「いいから、どうせすぐに必要になる。」

「わ、わかった」

他の団員達も裏に向かい、カウンターに自分一人になる。

先程渡された羊皮紙にもう一度目を通し、椅子にもたれかかるようにして座る。

「これじゃ足りない。もっと強くならないと…」

だが圧倒的に時間が足りない。短時間でより効率的にステータスを上げるには…

少年の口元が獐猛な肉食獣のように歪む。

幸い敵には困らない。精々役に立って貰うとしよう。

「…待つてろよザルド、アルフィア。必ずお前達を葬つてやる。」

大抗争まで、あと九日

顔無し

「団長、『ガネーシャファミア』との定期連絡行つて来ました！詳細、この羊皮紙にまとめてあります！」

「ああ。ご苦労、ラウル。悪いがガレス、代わりに受け取つておいてくれないか。」

作業を片手間に、団長室に入ってきた若い団員に労いの言葉をかける。

「それでは、失礼します！」

入り口付近に座っていたガレスに書類を渡し、軽く頭を下げると部屋から出て行く。

扉から気配が離れて行くのを確認すると、隅で腕を組んでいたリヴェリアが口を開く。

「こここのところ、頻繁にシャクテイ達と連絡を取り合っているようだが、何か気になることもあるのか？」

「ああ。最近の闇派閥イウイスの動きが気になってね……。色々と情報を集めながら、整理しているところなんだ。」

「現状、目立った不安の種はないように思えるが。」

不審そうな顔をしたガレスの持つてきた書類に目を通し、何かを見定めるように目を

細める。

「…シヤクテイ達の連絡によると、襲撃された工場から魔石製品の『撃鉄装置』が奪われていたらしい。」

「また訳のわからんものを……一体何に使うと言うんじゃ。」

「それはまだわからない。いずれにしても、都市内外でのきな臭い話は絶えない。都市外の調査は「ヘルメスファミリア」に任せるとして、僕達は…」

先を続けようと口を開くと、扉から入って神物を見て口を止める。

「話してるところすまんけど、ダンジョンでまた『冒険者狩り』が出たらしいでー」

「またか？見境なく騒ぎを起こしおって…」

「どうするフィン、向かうか？」

室内にいる3人が視線を向けられると、書類から目を離さず、なんて事も無いように答えた。

「ああ、そつちは必要ない。もう来る頃だと思っていた。彼女達に任せてある。」

自身に向けられる驚きの視線を知覚しながらも、書類を眺める表情は険しいままだった。

（これまでの報告から考えると、恐らく彼女達だけで『冒険者狩り』を撃退、捕獲することは難しいだろう。今回は上手くいったが、次はそう簡単にはいかない筈だ。）

現状、ギルド傘下のこちら側が優勢とも思えるが、必ず先手は闇派閥側からだ。実際、何らかの被害を受けてからしか、こちら側は動くことができていない。

都市内外での怪しい動きも含め、わかっていないことが多すぎる。おまけに、数日前から報告が相次いでいる件についてだ。

（『冒険者狩り』とは別の、『闇派閥狩り』か…）

闇派閥に敵対している以上味方とも言えるかもしれないが、その素性は不明。同一の切り口から正体は一人だと思われ、死体のどれもが、思わず目を背けたくなる程の斬殺死体であることから、通称『死喰い人』と呼ばれている。

フィン自身、あれを目にした時のことはあまり思い出したくない。

辺りに散らばるほどの死体にも、四肢、胴体全てが繋がった物がない。斬られた箇所は様々だが、切り口はどれも滑らかで、必ずその箇所で分断されている。

流れ出た大量の血を見るまで、それが元々人間であったと気付くことが出来ない、真正銘の地獄絵図。もはやどちらが悪かもわからない。

そんな芸当が可能であろう人物を、恐らくフィンは知っている。この場の全員が会ったことのある一人の少年。

「…君かい？シキ……」

手に持つペンを眺めて言ったその言葉は、誰にも聞かれることはなかった。

「イ……闇派閥イワイルスだあああああああ!!?」

『冒険者狩り』!!? 畜生、に……逃げろおおおつ!!?」

「おやおや、逃げるのですか? 亡骸仲間を置いて? 本当に? それでよろしいので?」

ダンジョンの18階層。黒い装束を身に纏った集団が、仲間を殺され、逃げ惑う冒険者達に背後から襲いかかる。

その集団の中で一人、多数の冒険者を斬り殺した男が、冒険者達を挑発するように声を上げる。

「そこは戦うべきでしょう! 『英雄』とまでは言わなくとも! せめて『冒険者』の名に恥じぬように!」

「—そうか。なら『悪党』の名に恥じぬよう、此処で死ぬ。」

「っ!!?」

背後に感じた悪寒に反射的に剣を振ると、キンツという音を立てて襲撃者を弾き飛ばす。

「…チツ、やはり幹部はそう簡単にはいかないか。」

「はて、貴方は……?」

自分を襲ったと思われる小さな少年を見下ろす。手にはその身に余るほどの長刀を持ち、こちらを鋭い目つきで見ている。

「やつと見つけたぞ、『顔無し』。」

「…ほう。私のことを知っている者がいらつしやるとは、珍しいこともあるものですね。」

「お仲間を尋問したらあつさりゲロつたぜ？ 寄せ集めのせいで教育がなっていないんじゃないの？」

「いやはや、これは面目ない。何分数が多いものでして…」

「…ああでも、動く爆弾にするだけだったら別に気にすることもないのかね？ それとも、最悪あの二人を頼ればどうにかなるでも思ってるのか？」

付け加えられた少年の発言に、男の細い目がさらに細められる。

「その様子…なるほど、貴方が我が主の言っていた人物ですか。しかしあれですね…あなた、色々知りすぎな気がします。」

男は得心がいったのか、満足そうに頷くと剣を構える。それに合わせるようにして、少年も長刀を腰に構える。

「主には殺すなと命じられています…貴方は少々危険ですね。この先大きな障害になりかねません。」

「あの神には悪いが、お前はここで殺す。」

男は先程まで浮かべていた微笑を仕舞い、少年は軽く目と閉じ呼吸を整える。

少年が目を開けると同時に周囲を強烈な威圧感が包み込み、男が細められた目を片方見開く。

先に動いたのは少年の方だった。片足を軽く踏み込むと、10メートル近く離れていた距離を一気に詰める。長刀のリーチを存分に活かし、最小限の動きで男の首を直接狙いにいく。

少年の想像以上の速さに躲すことが難しいと判断したのか、男も急遽剣を手前に構える。上体を反らしながら、下から空中へ押し上げるようにして迫る刀を弾く。

刀が長いとその分、弾かれると体制を崩しやすい。案の定150センチ程度の小さい身体は、刀に引つ張られるようにして宙を浮き、体制を崩す。

男が追い討ちとばかりに剣を振ると、少年は刀から手を離し、腰から短剣を取り出して受け止める。

「…流石に、この程度じゃ倒れてくれませんかねえ」

「…正面戦闘は性に合わないんだがな」

自身の後方に長刀が落ちたのを感じながら、目の前の男を見て悪態をついた。

「まーた当たったぜ、フィンの読み！どうなってんだアイツの頭！」

階層入口から、11人の武装した少女達が駆けてくる。

「少し遅かった…！リオン達は被害を受けてる冒険者達の救出を！」

「わかりました！」

アリーゼ、輝夜、ライラを残した八人が、襲われている冒険者達の元へと向かう。

「アタシらはどうする？アリーゼ。」

「私達は…」

「？あれは…！」

何かに気付き、輝夜が走る速度を上げる。

「え？お、おい輝夜！！？」

「！ライラ、後を追うわ！向こうで誰か戦ってる！」

「はあ！！？おい待てよ！」

両者の攻防が続く。

長刀から短剣に切り替えたことで、先程よりも素速い動きで果敢に攻める。

男も速度では僅かに劣るものの、少しでも隙を見せれば的確にそこを突いてくる。

背後に回ろうと一瞬足が地から離れた所で少年を弾くと、体制を崩したタイミングを

見逃さずに剣を振るう。

少年は短剣を逆手に持ち替え、側面を狙って振り下ろされた剣を受け止める。

互いの剣が拮抗し、ギリギリと音を立てる。

「主の話では、貴方は医療系ファミリアの筈なんですがねえ……戦闘慣れし過ぎではないですか？」

「抜かせ。ヴァレッタ以外にここまでできる奴がいるとは聞いてねえ……ぞつ」

死角を突いた少年によるナイフの投擲を、顔を反らして寸前で躲す。

均衡が崩れるも、体格の差で再び少年の方が弾かれる。

距離を取るため後ろに跳ぶと、少年が地に足を着いた途端、驚くべきスピードで間合いを詰めてくる。

即座に受け止めようと剣を引き戻し、両者の剣が触れた瞬間、何の抵抗もなく男の剣が中心付近から切り飛ばされる。

驚愕に目を見開きながらも、身を振って短剣を躲し、迫る少年を蹴り飛ばす。

「野郎っ」

蹴られた反動で宙を移動しながら、数本のナイフを指の間に挟むと、投擲による反撃を行う。

男は近くの冒険者の死体から別の剣を引き抜くと、ナイフを弾き、未だ宙に浮かぶ少

年に向かつて走り出す。

少年は背後に先程落ちた長刀を見つけ、それ目掛けて短剣を投げつける。短剣が長刀の先端に当たり、反動で持ち上がった刀の柄を掴み取る。

さらに長刀に弾かれた短剣に手を向け、掴む素振りを見せると、そのまま男へ向けて腕を振り下ろす。

「なっ」

宙に舞う短剣が突然止まったと思うと、勢いよく男に向けて飛んでいく。予想だにしない方向からの攻撃に男は驚愕し、少年に振り下ろす筈だった剣を引き戻し、寸前の所で弾き飛ばす。

少年はその隙に長刀を地面に突き刺し、空中で身を振って男の横面を蹴り飛ばすと、そのまま反動で距離を取って着地する。

「くっ……なるほど、お強い。話に違わぬ腕前です。……もしや、貴方が噂の『死喰い人』では?」

「知るかよそんな呼び名。何?この世界の奴らはいちいち二つ名つけないと気が済まないのか?」

「やはりそうでしたか。……でしたら尚更、ここで始末しておくべきでしょう。」

男は袖で頬を拭うと再び剣を構え、足を踏み出す。

「させるか、阿呆」

「っ!?」

横からの突然の斬撃に、男が構えていた剣を引き戻して対応すると、反動で離れて距離を取る。

「シキ！大丈夫!?」

声の方向に目を向けると、赤髪の女が隣に走り寄ってくる。正面で男と対峙しているのは黒髪の刀を持ったヒューマンだ。

「アリーゼに輝夜……フィンンの指示か」

よく見ると、他の闇派閥の者達とアストレアファミリアの面々が応戦している。向こうから小人族のライラが走ってくるのも見えた。

「貴方たちは……」

「非道な行いを見過ごすわけがない、正義の味方よ!」

「正義……? ああ、【アストレアファミリア】の……『死喰い人』に援軍となると、これは少々分が悪い。」

男がそう言うと、周囲から数人の黒装束の者達が集まってくる。

「ワイトー様、ここは撤退を。我々の目的は……」

「分かっています。名残惜しくはありますが……ここでお別れです。それでは皆さん、ご

きげんよう。」

「逃がすか」

シキが複数のナイフを投げて足止めしようとするが、身を挺した部下の行動によって阻まれてしまう。

ヴィトーと呼ばれた男は、部下の死に目もくれず、仲間と共に階層から消え去った。

「チツ、逃したか……これ以上は無理だな。」

「待ちなさい！」

「待て、団長。誘っている。深追いは禁物だ。」

輝夜が追いかけてようとするアリーゼを落ち着け、傍で短剣を回収しているシキに視線を向ける。

「おい、何故貴様がこんな所にいる。」

「…何だ、冒険者がダンジョンにいたら悪いのか？」

「私はお前が何をしているのか聞いている。ここ最近のお前の行動には、不審点が多すぎだ。」

「話す義理はないな。…俺はもう行く。」

投擲に使用した全てのナイフを回収し終え、反対側に歩きだそうすると、目の前にアリーゼが立ち塞がる。

「…どけ。」

「どかないわ。そんな傷だらけの人を放っておけないもの。」

ヴィトーとの戦闘で身体の各所に切り傷があり、服も所々斬られた跡がある。

「俺は医療派閥だぞ？治療薬ホーションくらい持つてる。それに大半は俺の血じゃあない。」

「……そ。でも悪いけど、私達と一緒に来てもらうわ。ここには【勇者】ブレイバの指示で来てるもの。貴方が戦った男についても報告しなくちゃいけないからね。」

「……はあ…仕方ないか。」

一歩も引かない態度に諦めたのか、ため息混じりに了承すると、仲間の元まで歩き始める3人について歩く。

「…にしてもお前、あんな奴相手によくそこまで闘えるな。アタシじゃ絶対無理だ。」

歩く途中で傷口に治療薬をかけていると、横にいたライラが感心しながらそんなことを言う。

「ああ、一太刀打ち合ったがかなりの腕だ。完全に不意を突いたつもりが、容易く受け止められた。」

「輝夜でもそう感じたのね…。でもあんな奴の情報なんて、聞いたことないわ。ねえ、シキは何か知ってることとかある？」

「後で同じ話をするのは面倒だ。戻ってフィンと合流してからにしてくれ。」

傷口が癒えたのを確認すると、半分ほど残った治療薬を上着のポケットに仕舞う。

事が片付いたのか、覆面を付けたエルフを先頭に他の面々が近づいてくる。

「3人とも、大丈夫ですか？」

「大丈夫も何も、アタシらは牽制しただけで、まともによつたのはこいつだけだ。まんまと幹部を逃しちまったがな。」

「シキ……？何故こんなところに。」

「そのやり取りさつきやった。別になんでもいいだろ。」

「そつちは？」

「…逃げてきた冒険者はみんな無事。でも、最初に襲われた何人かは……」

ライラの質問に、獣人のネーゼが言いづらそうに答える。

「く……！あと少しでも早く、駆け付けていれさえすれば……！」

「つけ上がるな、間抜け。」

「阿呆かお前。」

二方向から飛んできた言葉に、目を伏せていたリユーが弾かれたように顔を上げる。

「英雄でも気取っているのか？未熟な今の私達が、全てを救えるわけがないだろうに。」

「つ……！訂正しろ、輝夜！たとえ至らない身であっても、最初から救えないと決めつけて実践する正義など、間違っている！」

「正義とかそうじゃないとかどうでもいいよ。現状、お前達じゃ全てを救うなんてことはまず無理だろう。フィンだつてそれを了承済みで、今回の件を任せただらうしな。」
「っ……シキ！ 貴方も医療派閥ならわかる筈だ！ 目の前で救えたかもしれない命を失つた時の悔しさを……！」

「…別に、悔しいとかそんなものはない。そもそも名も知らない人間の生死について、どうこう思うことなんてないだろ。そんなに仲間内での正義ごっこが大切なら、他の冒険者達なんて放っておけばいいじゃないか。」

「っ……！」

「あーあーうるせえうるせえ。こんな所で言い合うんじゃないよお前等。…おい団長、なんとかしろ。」

「…まずは遺体を仲間の元まで運びましょう。こういう時は、さっさと帰つて休むのが一番よ！」

遺体をパーティーメンバーへ引き渡すと、ホームへの帰路に着く。女11人に男1人で身が狭くなるかと思えばそんなこともなく、ごく普通に地上までたどり着いた。

「んー疲れたー。今日は結構大変だったわね。」

「ちえつ、折角『冒険者狩り』の野郎をとつちめてフィンに自慢してやろうと思つたのによー。」

「お前らが来て不利だと思ったんだらうな。敵が3人も増えたら流石に逃げるだろ。ちよつとは考えろ。」

目もくれずに文句を言う態度が癪に障ったのか、少し前を歩いていた輝夜がシキを睨み付ける。

「わざわざ助けに来てやったのに何だ、その口の利き方は。目上の者に対する態度がなってないぞこのガキ。」

「歳は片手の指で済むくらいしか変わんねえだろ。それに悪いが、今じゃ俺もフアミリアの副団長なんぞな。立場的には俺もお前も同じなんだよ。」

「ふんつ、目上というのは言葉通りだ馬鹿者。その歳でその程度じゃあ、将来的に私には追いつけまい。」

「身長で決めるとかどつちがガキだよ。【勇者】フレイパー達小人族の前でもう一度同じこと言ってみろ。」

シキを見下ろして勝ち誇った顔をする輝夜に、強烈なカウンターをお見舞いする。

いつの間にか二人とも足を止めると、互いに睨み合つて論争が始まる。声を荒げるようなこともないのに、バチバチとした空気が両者を包み込む。

「…なんでかあの二人、会うとしよつちゆう喧嘩してるよね。」

「喧嘩つて言うのかあれ。相性が良いのか悪いのかわかんねえな…」

もはや輝夜& a m p:リユー以上に見飽きたこの光景に、「アストレアファミリア」の面々が呆れて眺める。ライラ達はともかく、アリーゼまでもが呆れていることに、その頻度を察して欲しいと思う。

「ここまで多いと、本当は仲が良いんじゃないかと疑いたくなるな。」

「はっ！ひよつとして実は影でデキてたり……！」

「するか阿呆。生憎歳下は範囲外だ。」

「まったくだ、誰がこんな猫被り女と。……もういい。俺は治療院に戻るぞ。」

「っておい、報告はどうすんだよ。」

「どうせ今日はもう遅いし無理だろ。紙にまとめといてやるから、明日取りに来い。報告はそつちで勝手にしてくれ。」

「相変わらず上から目線でものを言いますねえ、このガキ。」

「だからもうやめろって。……まったくなんでアタシがこんなに突っ込まなきゃなんないんだ……。」

「じゃあね、シキ。アミッドによろしく！」

最後まで騒がしい連中のためにため息をつく、自身のファミリアへと戻る。

今日のはかなりの人数を殺した。明日の朝ステータスを更新してもらおう。

こんなことを考えてしまう辺り、もう自分は壊れているのかもしれない。

そう思って窓から部屋に入り、装備を外そうとすると、目の前に銀髪の少女が仁王立ちをしていて思わず悲鳴を上げかける。

「……………シキ……………」

「ア、アミツド？なんでここに？」

暗い部屋の中でも、彼女の銀髪と紫紺の瞳は月夜に光って見えた。

すうすうと息を吸い込む仕草に、これから浴びせられるであろう言葉を想像し、甘んじて受け止めようと身構える。

「……………お帰りなさい。…シキ。」

そう言って、予想外の言葉に固まる少年の背中に手を回す。その手は僅かに震えていた。

「……………ただいま。アミツド。」

大抗争まであと八日

女神の戦車

「第二級冒険者が全滅？」

「ああ。おまけに超硬金属アダマンタイトの壁をぶち破るほどの馬鹿力だ。最低でもレベル6：以下はありえないと、あいつがそう言った。」

「都市最高戦力オツタルがね……。なるほど、昨晚運ばれた奴等はそういうことか……」

「ディアнкеヒトファミリア」のホーム。その店の奥で、人間の少年と猫人族キヤットビープルの青年が互いに顔を合わせることもなく淡々とした口調で声を交わす。

「それで？ 珍しく顔を出したと思えば、まだギルドに報告も済んでない真新しい情報を流した理由は何か？」

「フレイヤファミリア」のレベル5。都市最速と謳われる「女神の戦車」ヴァナ・フレイヤアレン・フローメル。

そんな人物が、ただ治療薬を買うためだけにこんな所へ訪れるとは考えにくい。本来ならば、ファミリア内の下級冒険者がまとめて購入しに来る筈だ。

手元の羊皮紙にペンを滑らせながら、壁に寄りかかって動かない青年に向けて言葉を

続ける。

「言っておくが、こつちから提供出来るような情報は特にないぞ。昨日は迷宮に潜つてたしな。第一、うちでまともに戦えるのなんて俺と団長くらい……」

「てめえ……一体何を掴んでやがる」

アレンの口から発せられた低音の一言に、一瞬シキが手の動きを止める。

「……何の話だ」

「てめえが何やら動き回ってるのは知ってる。……大人しく白状しやがれ。」

カウンター付近の壁に預けていた身体を持ち上げると、得物の槍をシキの顔の横に突きつける。

突然のその行動に、店内の冒険者達がざわつく。緊張の走る中、作業を終えたシキが軽く息を吐くと、視線を目の前の猫人族に向ける。

「アレン、お前今日暇?」

「質問に答えろ。あと暇じゃねえ」

「じゃあ今からちよつと付き合ってくれ」

「聞いてんのかてめえ」

「昨日の探索で、少し気になることができた。」

「……ああ?」

「目星はなんとなくついてる。何もなければすぐに済むよ」

「てめえ一人で事足りるだろうが」

シキはレベル3。幹部クラスの相手でもなければまず遅れを取ることはないだろう。

「証人が欲しい。俺一人では発言力に欠けるからな」

「わざわざ付き合う筋合いはねえ」

「じゃあ依頼だ。高級治療薬ハイポーション5個。事の次第によつては、お前の知りたいことも分かる

と思う。…時間を取らせるつもりはない」

「……………チツ……………早くしろ」

まだ呆けている冒険者達を無視し、アレンが槍を肩に担いで外へと歩き出す。

「ああ、すぐに行く。…………アミッド、後は任せた」

「え？あ、はい。」

突然の展開にアミッドが驚くも、シキの仕事は既に大半が済んでいるため、特に咎めることもない。

ただ少し、不安と不満を顔に浮かべ、部屋へ身支度に向かう少年を見送る。

「ふーん？アミッドつたらそんな顔もするのね！なんかちよつと意外かも！」

「！」

すぐ隣で聞こえた声にハツとし、先程まで対応していた赤髪の女性へと振り向く。

「ア、アリーゼさん、何を……」

「駄目よアミッド？好きな人を見送る時は、もつと笑顔で言わなきゃ！」

「す……？好きな人とは……その……シキはそういうのではなくて、ですね」

うんうんと頷きながら得意げに人差し指を左右に振るアリーゼに、所々つまりながらもなんとか弁明を試みる。

「あらそう？でもこんな世の中だもの。毎日笑顔で過ごすことって大切よね！」

「そう、ですね……」

「それにしても、シキってばあの戦車さんと仲良かったのね？なんだか珍しい組み合わせ。」

「仲が良い……かはわかりませんが、よく話しているのは目にします。お互い、無駄が無いところが似てるんじゃないかと……」

そんなことを言っているうちに、奥から着替え終えたシキが出てくる。

「アミッド。悪いけど、帰りは遅くなると思うから団長に伝えておいてくれ。それとアリーゼ、昨日の件の報告書だ。フィンにそのまま渡してくれればいい。……じゃあ行ってくる。」

「はい。気を付けて」

シキが扉を出たことを確認すると、羊皮紙を受け取ったアリーゼが伸びをする。

「さーてと！それじゃあ報告書も貰ったし、私達も行くわ…って、あれ？輝夜は？ついさつきまで此処にいたのに」

背後を振り返ると、一緒に来ていた3人の仲間の1人が欠けていることに気づく。小人族のライラ、エルフのリューともう1人。ヒューマンの少女の姿がない。

「あいつなら、シキが出ていってすぐに飛び出してつたぞ？」

開いた扉の外を見ながら、呆れて物も言えないような表情でライラが応える。

「え？ウソでしょ!!?ライラったら、なんで止めてくれなかったのよ？」

「無茶言うな。掴んでもアタシごと引っ張られるのがオチだつて」

「でも出て行つたつてことは、シキを尾行しに行つたつてこと?...:輝夜つてば、情熱的なのは私嫌いじゃないけれど、神様達の言う『すとーかー』紛いなことは許容できないわよ?。」

「いい加減そのネタでいじるのやめてやれよ。あいつが聞いたら間違いなくキレルぞ？」

「そういうのも知ってるわ!『つんでれ』つて言うのよ?ヘルメス様が言つてたもの!ふっふーん!」

「だからやめろつて言つてんだろ!!?あいつ意外と耳ざといんだから、不用意に変なこと言つなつて!」

「ふ、2人とも、この場で騒いでは店側に迷惑が……ひっ！」

カウンターの傍で騒ぐ2人を宥めようとするリユウが、ふと視線をずらし、短く声を漏らす。

「あ？どうし……げ」

「ア、アミッド？あーその、ね？ふざけてたとかじゃないの。こうやって周りに笑顔を振り撒くことも大切だってことを……あ」

視線の先の少女を見て瞬時に理解したのか、ライラが思わず声をあげ、アリーゼが先の様子を正当化しようと試みる。

「……店内ではお静かにお願い致します。」

『は、はい。ごめんなさい』

有無を言わさぬその圧力に、3人の第二級冒険者が口を揃えて謝罪する。

歳下の少女に注意されているその様子は、普段の姿とは違い、客観的に見ても格好の悪いものだった。

「面倒なところに付き合わせやがって……一体何のつもりだ。いい加減答えろクソガキ」

場所はダイダロス通り。オラリオにおいて最も複雑な地形を誇るその区域は、ギルドでさえその全様を把握できていない。今やそこに住むのは、あてのない人々や孤児院のみだ。

そんな道を、二人の男が並んで進む。

「都市で物を隠すのなら、この場が最も適している。奴等が使わない理由はないだろ。」

「そんなことは聞いてねえ。こんなわかりやすい場所、既に他の冒険者達が調査を終えてるに決まってるんだろ。今更何を探す。」

「…昨日、ダンジョン18階層で闇派閥イヴイルスの襲撃があつたことは知ってるか？」

「…それがどうした」

「道中含めて俺が殺しただけでも14人。中にはレベル2も二人いた。幹部クラスの奴には逃げられたが、推定ではレベル4程度。……そんな多数の連中が、何故前触れもなくダンジョンに現れた？」

自身に問いかけるようなその言い方をするシキに、アレンが足を止める。

そう、不自然なのだ。

あの場に向かう途中、階層から離れる冒険者を追っていた者だけでも7人。18階層のフロア内では20を超える闇派閥が、殺戮の限りを尽くしていた。それこそ、「アストレアファミリア」の大半が応戦に向かうほどには。

違和感が決定的なものになったのは、ヴィトーと呼ばれた男が逃げた時だ。直接追うのは断念したものの、千里眼を使って姿を見ていた。しかしある地点から突然、千里眼の接続が切れたのだ。

つまり、そういった類の作用が効かないエリアに逃げ込まれたか。あるいは、シキ自身（シキ）がそれを認識していない、存在を把握出来ない場所に入り込まれたかのどちらかだと考えられる。

「ダンジョン内部には多数の目がある。当然、見た者全てを消したと考えられなくもないが、であればなんらかの異常が報告されてもおかしくない。レベル1や2の構成員がほとんどのことから、少人数で別々に移動したとも考え難い。……以上のことをふまえて可能性をあげるなら……」

「……てめえまさか……」

「奴等がバベルからではなく、別の道を通って来たという可能性。つまり、ダンジョンへの扉が他にあることを指しているのではないか……ま、単なる憶測だけだな。」

ダンジョン内部へ繋がるもう一つの道。

それこそ、闇派閥（イツイルス）の潜む巣ではないだろうか、と。

「……それについては理解した。だが、俺の最初の質問には答えちゃいねえ。……てめえはどこまで搦んでやがる。」

「…さあな。依頼達成出来たら答えてやるよ。」

「ぎげんな」

「まったく、わかったよ。高級治療薬ハイポーションならくれてやる。まさかそんなに欲しいとは思わなかった。」

「頭がち割られてえのか」

「やだね」

「…チツ、とつとと行くぞ」

「ああ」

そう言うと、二人の男は地上の迷宮へと足を踏み入れた。